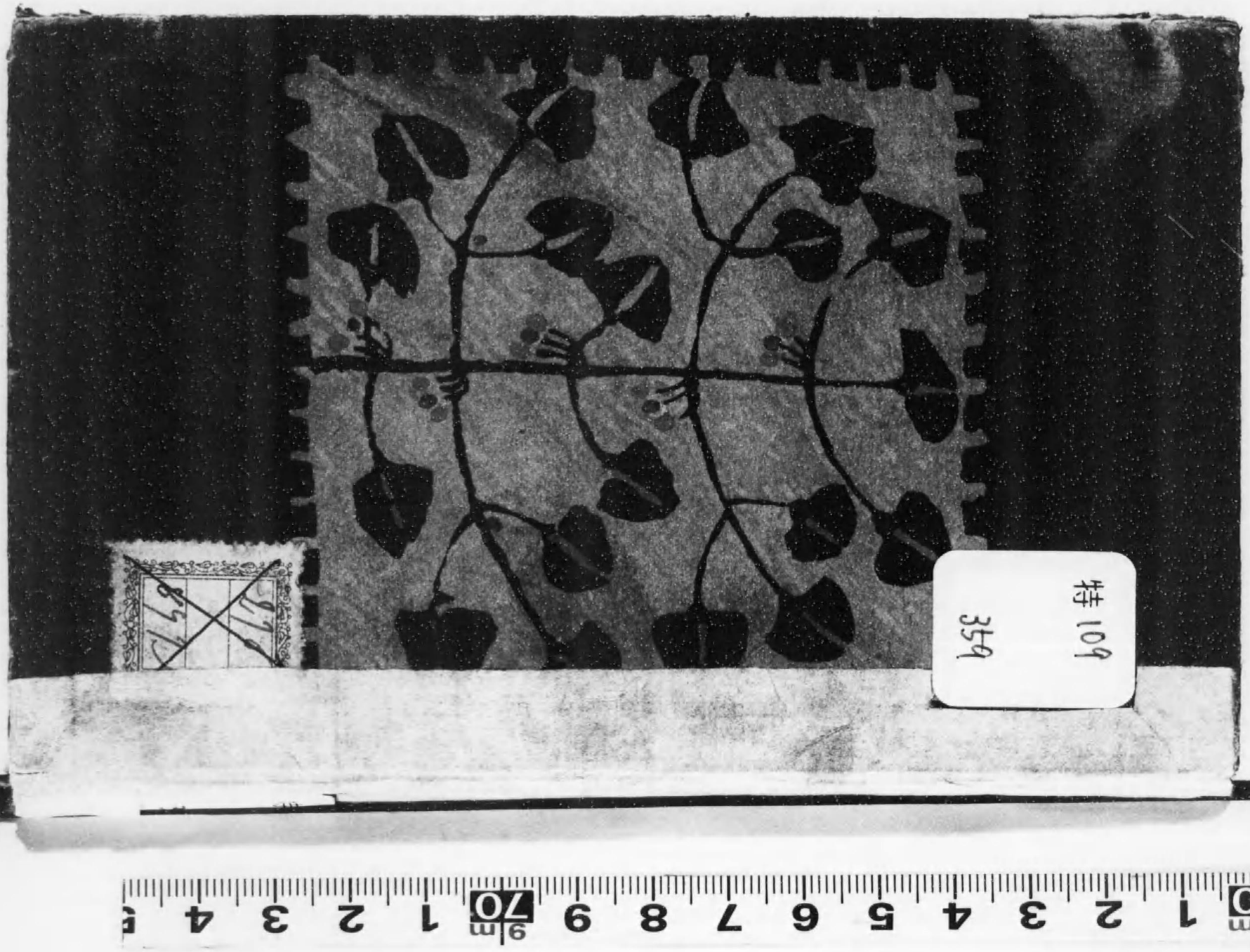
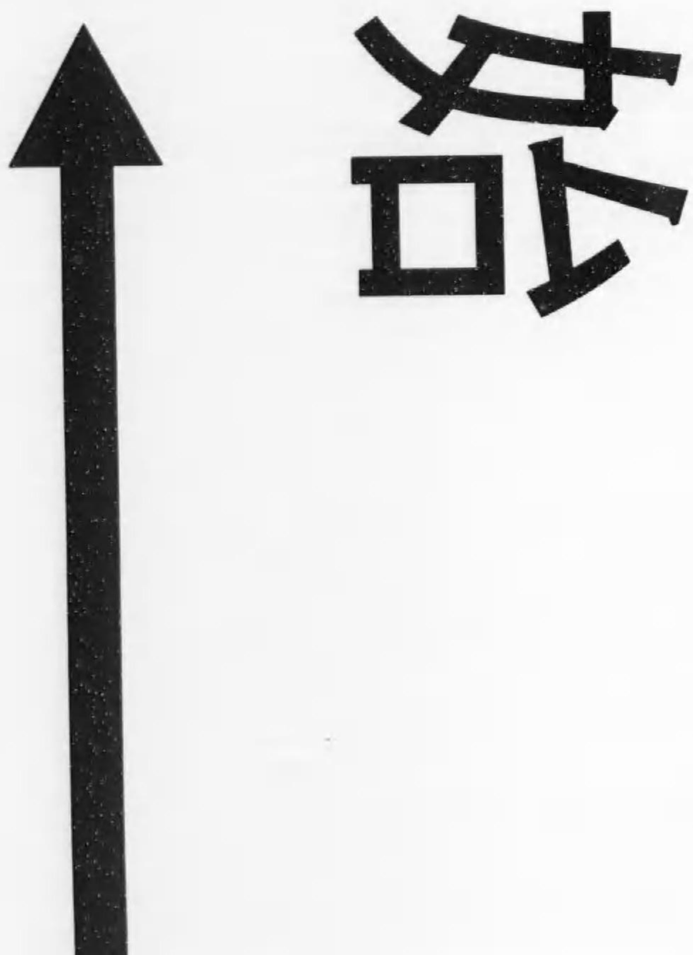
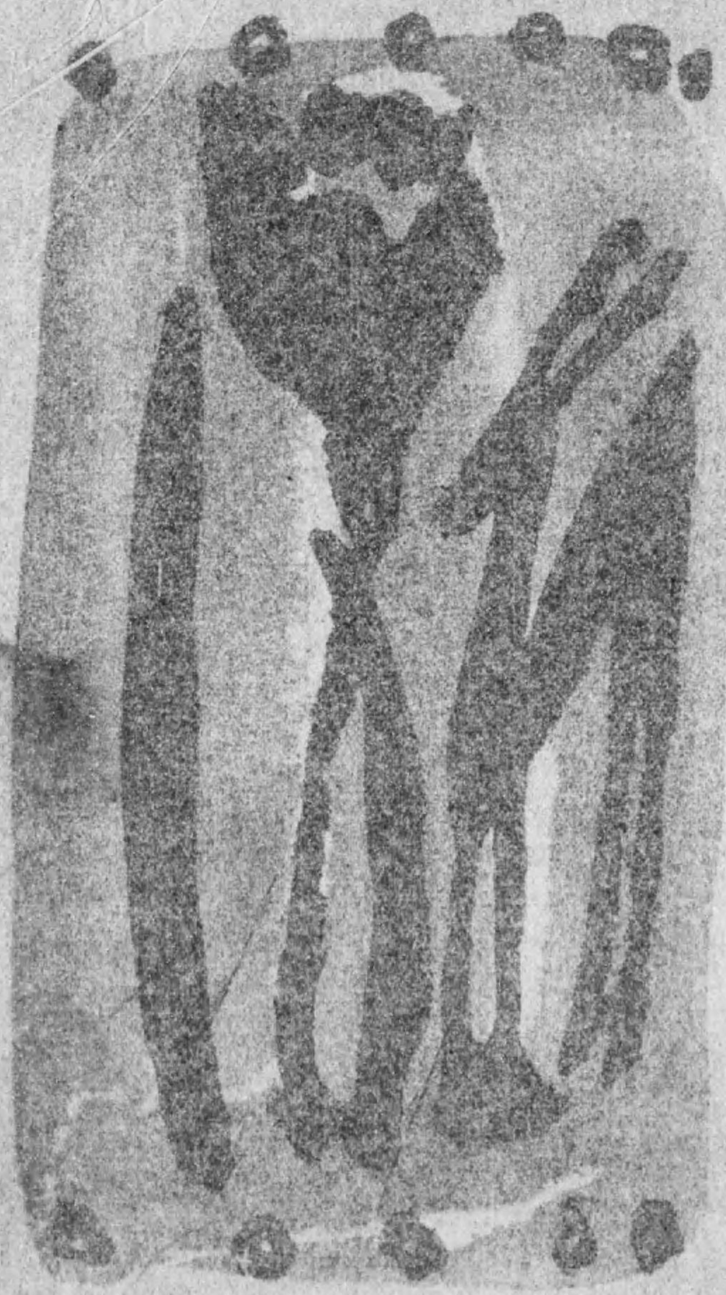


特 109
359





作ゲスフエイトスド・ルードヨフ

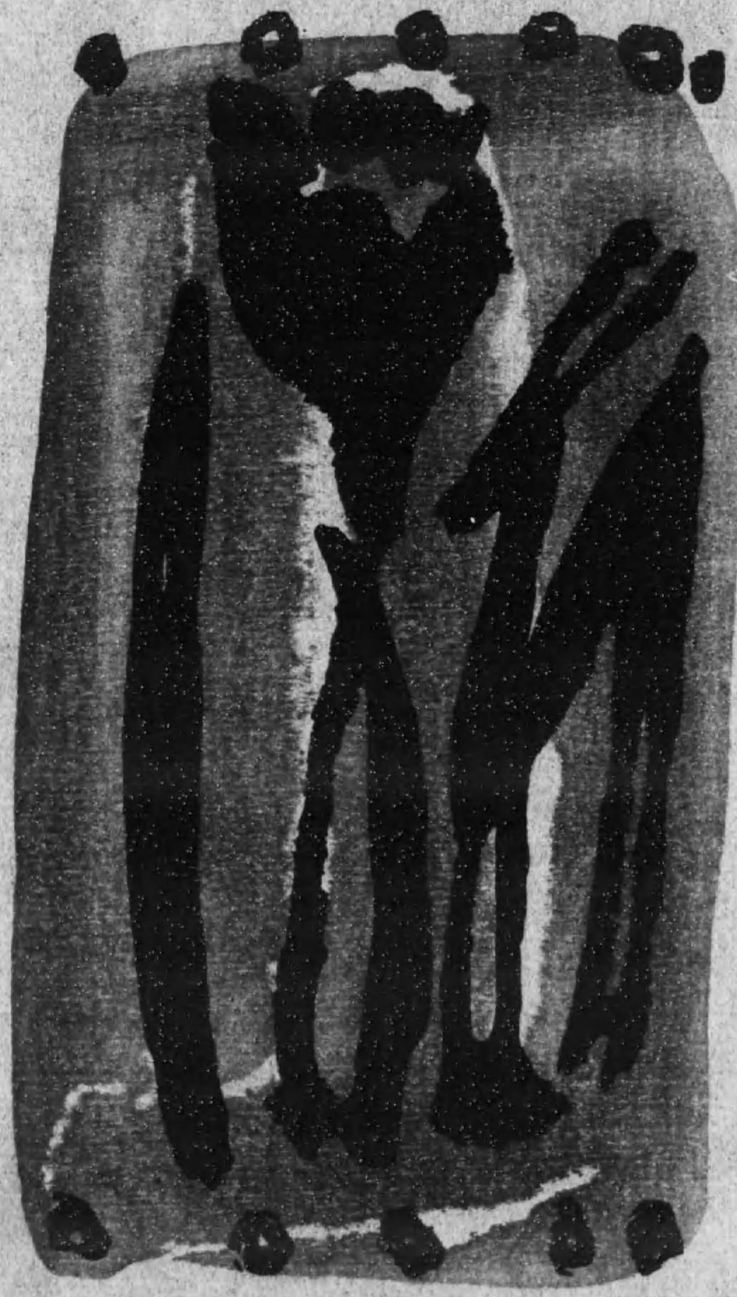
森田草平譯

特109
759

裝幀者　安藤兵一氏

特109
359

カラマゾフ兄弟



作キスフエイトスド・ドストヨフ

澤田草平訳

東京 安藤兵一氏

ドストイエフスキイ小傳

フヨドール・ミハイロギッチ・ドストイエフスキイ、露西亞語では何う綴るか知らないが、英語でも書物に依つていろ〳〵綴字が違ふ。千八百廿一年に生れて千八百八十年、丁度今から三十年前に死んでゐる。父は莫斯科の醫者で聖母慈惠病院に勤め、僅かな給料を取つて居た。生れは貴族で、學問も一通りあつた。ドストィエフスキイは其の次男に生れた。十七歳の時測量師になる爲めに、家兄と彼得斯堡の學校へ入つた。兄は身體が弱いので入學が出來ず、自分だけ其處で勉強して、千八百四十三年に卒業した。そして、一人前の測量師に成つたが、間もなくそれが可厭になると共に、生來の文學的傾向も手傳つて、千八百四十四年、二十四歳位の時には飜譯をして五十四留布貴つてゐた。傍ら『貧乏人』(プア、フォーク)といふやうな創作を初めた。そして急に有名に成つた。それは誰でも知つてゐる通り、學校朋輩のグリゴロギッチが知人のネクラゾフの所へ此の處女作を持つて行つて讀んだ。二人は魅せられたやうに一晩中寢ずに讀んだ。ネ

大正
4 5.18
内交

クラゾフがドストイエフスキイに手紙を遣つて非常に面白いと賞讃した。そして自分の友人で當時文壇の牛耳を執つてゐる批評家ベリンスキイの所へ手紙をやつて、新らしきゴオゴルが生れたと言つた。ベリンスキイも初めは近頃ゴオゴルが雨後の筍のやうに生れるではないかと言つて取合はなかつたが、その作物を讀んで見ると非常に面白いので、直に作者を連れて來いと言つた。かくして此作は出版されない前から評判になつた。その後ドストイエフスキイはネクラゾフやベリンスキイと喧嘩をしたが、兎に角處女作で歡迎されたと言ふことは注目に値する。それから彼は當時の新らしい自由思想家や社會主義者とも交はつた。當時政府では危險思想を抱いてゐる者を一掃して仕舞ふと云ふ意氣組でゐたから、或社會主義者の家に居合はせたといふ廉で、忽ち彼も獄へ下された。そして銃殺されるに極つた。千八百五十年、三十歳の時、頭から衣のやうなものを被せられて、二月の寒空の下に絞首臺に立つて慄へてゐた。その瞬間勅命によつて、死を宥められ西伯利亞へ追放された。トボルスクの獄で四年間苦役についた後、又四五年兵役に服した。ドストイエフスキイは元來宗教心の深い家に

生れたから、獄中でも聖書を離さないで朝夕それを讀んでゐた。そして益々宗教心が強く成つた。一方では年貢の拂へない爲めに西伯利亞へ送られた百姓等と交際して、それ等の下級な人間を觀察し、其の感化によつて極く單純な宗教を信ずるやうに成つた。彼は又前から左樣いふ傾向がないでもなかつたが、いよ〳〵癲癇になつた。四年の獄中生活が終る頃には、明白に其の徴候を呈してゐた。其時代に『死の家の記憶、一名埋められた生活』といふ題で、西伯利亞の生活を書いた。千八百五十年兵役に在る間に結婚した。十年後の千八百五十九年に許されて、初めて本國へ歸ることが出來た。それはドストイエフスキイの三十九歳の時である。だから壯年時代を西伯利亞で送つて仕舞つた譯だ。兄と一緒に雜誌を出して、それに『死人の家』を掲載した。千八百六十一年に書いた『屈辱』といふ小說は面白くないと言ふので評判が好くなかつた。それから五年の後に『罪と罰』を書いた。最初の妻が死んで、二度目の妻を娶つた。その後『痴人』を書いた。此小說は傑作でもあるが、又餘程長たらしいもので、死刑囚の心理を描いた有名な一節がある。それから『永久の夫』といふ短篇を書いた。

千八百七十年時代には、いろ〳〵の短篇を書いた。『伯父の夢』『記者の日記』等である。最後にかの『憑かれた人、一名惡魔』といふ小說を書いた。千八百七十九年には『カラマゾフ兄弟』の初め少し書いて、死ぬ前千八百八十年に書き上げた。『罪と罰』『死人の家』『痴人』『惡魔』『カラマゾフ兄弟』その位讀めは可いだらう。最後に千八百八十年七月プシキン記念像の除幕式に公衆の前で演說をしたが、喝采を博して多大の人望を得た。死んだ時には行列が二哩も續いた、その多くは大學生であつたといふ。

ドストイエフスキイの傳記を讀むよりも、『死人の家』でも讀んだ方が好い、表面の生活等を研究するよりは當人の作物を讀んだ方が好い。露西亞の文學者と言へばトルストイ、ツルゲーネフ、ドストイエフスキイを擧げるやうである。就中フョードル・ミハイロヰッチ・ドストイエフスキイの作が露西亞の民衆を代表してゐる。三人の中でも一人は伯爵、一人は金持、ドストイエフスキイだけが貧乏人の間にあつて知識ある人だつた。日本では知識ある人士と言へば大抵貧乏人だが、露西亞の知識ある人士は皆貴族か金持である。學問をしない貧乏人の中から出たといふことが、前の二者と違つ

てゐる。露西亞の批評家メレシュコフスキイは此の三人を論じて、次のやうに言つてゐる。トルストイは人生に對する執着もあり、自然、肉の方へ傾いて、高架索時代には隨分放蕩もした。何しろ猛烈な人であつた。尤も後年には全然反對な淸淨な生活に入つた。ツルゲネーフは一番藝術家らしい藝術家で、調和され洗練された好文章を遺してゐる。ドストイエフスキイの作はその人自からを見るやうな作である。ドストイエフスキイは人生を苦しんで生きた人である。生きた、苦しんだ、そして泣いた。其の自分の苦しい生涯を藝術として現した人である。啻(たゞ)に藝術として鑑賞するばかりでなく、讀者はその作物を見ると、實際作者の泣いてゐる姿が見える。作者は苦みを訴へてゐる。只讀んでゐるのではなくつて作者と一緒に苦しみ、一緒に生きるのである。心臟の鼓動を共にするやうな心持がする。ドストイエフスキイに同情すると言ふだけでは何うも物足りない。その生活の中へ捲込まれて、主人公と一緒に生活する、ミツトレエベンする心持である。で、かくまで讀者を引きつける特長は何か〻言へば、その主人公の心理を描くことが優れてゐるからである。どんな複雜な、飛離れた心理で

も、明細に、顯微鏡で覗くやうに描いて見せる。人間の內部生活を其儘擴げて見せる。從て何うしても主人公と一緒にして仕舞はなければ置かないやうな所がある。

かく心理描寫といふ中にも、特に異常な、人の知らないワンダフルな危機一髮の心理を描寫することが得意である。それがためにドストイエフスキイの小說はセンセエショナルで探偵小說的に讀者を吊込むと云ふやうな批難も受ける。即ち日常生活にあり得べからざる、飛離れた、例へば殺人とか强盜とか刑場に立つた心持とか云ふやうな、際どい事ばかり覗ふ安ツぽい小說だと言はれる。が、それが左樣容易に書けるものでない。左樣いふ場合の人間の心理が本當に書けたら偉いものである。メレシユコフスキイはドストイエフスキイの小說を指して、人生といふものを試驗管に入れた作物だと言つた。通常の經驗を描いて居ては、左樣いふ作物は得られない、作者の實驗を描いてゐる。手を束ねてボンヤリ人生を觀てゐるのではなくして、科學者が實驗をするやうに、或場合を設け、故らに特定の人生を造つて見て、其の場合に起る反應を見る。科學者の如く嚴密な態度で、目瞬ぎもせずに其の反應を見詰めながら、數學的

正確をもつて其結果を報告する。此點に於てドストイエフスキイの手腕は寧ろ超人間的であると云つても可い。かの傲岸なフリイドリッヒ・ニイチエさへ、若し基督のやうな大夢想家の傍に、ドストイエフスキイのやうな大心理解剖家を着けて置いたら、何んな結果に成つたらうと言つたことがある。一寸面白い言葉である。

で、左樣いふ非常な場合の心理を精密に、獨創的に描いた例は、ドストイエフスキイの作物の隨所に見出されるが、特に危機一髮のクライマックスを描いたものとしては、『カラマゾフ兄弟』の中で、中尉ミチヤがカテリイナの急を救ふ際の心理描寫を擧げることが出來る。それは本文について一讀されたい。

又それと恰度同じやうな場合が『罪と罰』の中にもある。犯罪者ラスコリニコフの妹ヅウニヤといふ娘は、家が貧しいので田舍で女敎師などをしてゐた。地方の金持で、その女を家庭敎師に雇つた男が、非常にその女を慕つて、妻君が死んだ跡へ直さうとしたが、男の品性が下劣なので、去つて首都へ出た。すると、その男も彼得斯堡まで追掛けて來て、兄の爲めに力に成つてやるからと言つて自分の部屋へ連れて來る。そ

して突然室の扉に錠を下して、女に對して自分の心持を察して呉れと言出す。言葉は穏やかだが、逃げる事の出來ないやうにして置いて言ふのだ。女は恰度籠に捕へられた小禽のやうなものだ。最後に女が衣嚢から拳銃を出して見せた。地位は顚倒した。そこで男が脅迫されるのは私だ、然し私の主張は更へない、若し貴女がそれを發したいと思ふならお發しなさいと言ふ。そこで女が發砲すると、男の小鬢を掠めて背後の壁に中つた計りだ、男は默つて立つてゐる。そして最う一度お打ちなさいと、益々威嚇するやうな態度で言ふ。女が引金を引くと、彈丸が何うかなつて發しなかつた。男はニツコリ笑つてそれでは困る、最う一度お遣んなさいと言ふ。二人の間は二歩か三歩しか隔つて居ない。突然女は拳銃を投出した。そこで男が屈從するのかと思つて女の腰に手を纏いて、私の意志に從ふのかと聞くと、女は頭振を掉つた。それならば仕方がないからと言つて歸して仕舞ふ。そして翌朝田舍の霧の深い兵營の前で、その女の殘して行つた拳銃で死んで仕舞ふ。

この人の意表に出でる、非常な場合の心理狀態を描く時に、ドストイエフスキイは

如何なる方法を取つたかと言へば、アブセンス・オブ・マインド、即ちうつけた心と言ふ手段を始終使つてゐる。一番好い例としては、ラスコリニコフが殺人を犯して、發覺を怖れてゐる最中、其の人殺しをした家の前を通つた時、不圖その場所が見度くなつた。左樣いふ事は一寸常人の考へつかない所だが、其の場合には立つて見たら、如何にも見ずには居られないかとも思はれる。兎に角その家の階段を上つて行くと、恰度その場所には大工が這入つて、木を削つたり、釘を打つたりしてゐる。彼は床の上には血が流れ、その飛沫が壁にかゝつて、其中に婆さんが倒れてゐるだらうと思つて上つて來たので、何だか當が外れたやうな氣がした。で、先づ案内のベルを鳴らして見た。あの時婆さんが聾で返辭をしなかつたことを想ひ出して、一寸遣つて見た。「貴方何をしに來たのです」と問ひかける大工に向つて、「血は何うした」と訊ねる。そこで「何だ狂人か」と言つて取合はなくなつた。左樣いふうつけた心持は、われ〳〵にも同感出來るやうな心理描寫である。

又『カラマゾフ兄弟』の中のミチャが人を傷けた後で、自殺の覺悟をしながら、自

分を捨てた女の後を追掛けて行く。その前に友達の許へ行つて、質に置いた拳銃を受出したが、その手には血糊が附いてゐた。友達はそれを洗はせた上で、拳銃を返して呉れた。ミチヤはボンヤリそれを檢めてゐる。そこで「君は何をしてゐるんだ」と訊ねると、「君が拳銃で頭を打つ前には、その武器を一應檢めて見ずには置かないだらう」と答へる。最う一つ奇拔な事を言つてゐる。それは出しぬけに「君は盜みをしたことがあるか」と訊ねかける。實際自分は他人の金を費ひ込んでゐるのだ。友達は「子供の時分母親の金を盜んだことがある」と答へた。かくの如く非常な場合の心持を現はすには、大抵アブセンス・オブ・マインドを慣用してゐる。

偖てドストイエフスキイは好んで何う言ふ人間を主人公にしたかと言ふと、極端な人間を捉へ來つて、これを主人公として取扱つてゐる。大抵は馬鹿か狂人、狂氣になり掛つてゐる者等、アブノーマルな無能力者で、ツルゲーネフ、トルストイの普通の人間を主人公とするに對して、一種のコントラストを成すものである。ドストイエフスキイの考は妙な考へで、馬鹿や狂人、惡人が却て聖人で善人であると言ふのだ。極

端から極端へ飛べると言ふのだが、要するに馬鹿でも狂人でも又惡人でも皆善人で好人物である。他人からも又恐らくは自分自身でも善人と思惟してゐる者に却て眞の惡人が居る。ドストイエフスキイは馬鹿狂人惡人等に同情して、これを主人公とした。ミチヤは人に對して疚しいと言ふ意識がある爲めに、却て惡い事をする。自分が惡人だと言ふことを痛切に感ずる爲めに、却て自暴自棄に陷つて惡い事をする。賢こ過ぎる處女を嫌つて娼婦に迷つた揚句、三千圓の金子を殆んど費して仕舞つた。實は半分だけ費つて半分は密と藏して置いて、娼婦と逃亡の費用に衣類の襟に縫込んである。盜みをすると言ふことも恕すべき事である、他人の金錢を消費すると言ふことも恕すべき事である。けれども左樣いふ場合猶計算を忘れないと言ふことは實に卑しむべき行爲である。彼は左樣考へて非常に良心を苦しめた、そして益々墮落したと言ふことを後に自白する。かういふのが人の好い惡人である。ミチヤは又馬車を驅つて行く途中で、突然馭者の腕を捉へて「勘辨して呉れ、凡ての人類に代つて許して呉れ」と言ふ。彼は地獄へ遣られても、釜の底から猶神を呼ぶことを忘れない。惡といふ意識が

ある爲めに、却て罪惡を襲ねて行くといふ人間の心理を描くことは、ドストイエフスキイが左樣いふ人間であつたと思ふより仕方がない。

馬鹿が賢人であるといふのは、怜悧な人間は自己を欺いて物の正體を見ない、そこで馬鹿の言ふことが最も正しい。『痴人』の主人公は、他人から馬鹿者扱ひにされながら、死刑についての彼の立論には、怜悧な常人の思ひ及ばない所がある。曰く、死刑とは政府が法律の名に依つて殺人以上の罪惡を犯すものである。何故ならば死の恐しいのは、何日の何時に死ぬといふことの定まつてゐるのが一番だ。ギロティンの下に首を差延べてゐると、滑車で大きな刀がカラ〳〵と下りて來る、その瞬間には何んな恐ろしい思ひをするだらう。その間の恐怖及び苦痛は、實に想像以上である。人殺しと言へども、左樣いふ苦痛を與へることはない、殺される人はその命の絶ゆる瞬間までも、未だ或は免がれる事が出來るかも知れないといふ希望が有る、命が絶える間際にも何うかして助かるといふ一縷の希望を抱いてゐる。然るに死刑執行の場合には、一つもそんなものがないと言ふのだ。又ドストイエフスキイが自身癲癇病者であつた

故か、狂人のみ獨り能くスピリチュアルな物を見ることが出來ると主張した。言ふまでもなく妖怪は一種の精神病である。癲癇患者は發作の後で神とか幽靈とかを視る。妖怪といふものは存在し得るが、それを見るには病氣に成らなければならない。健全な人間は瑣末な下らない物に煩はされてマテリアルな物の表面しか見得ない。次の世界を見ようとするには、宜しく病氣に依て肉體の累ひを少くしなければ成らぬ、最後に死に依つて此現實の世界を脱却するので有る。かういふのが彼の論證である。

彼には又超人の考へがある、これは現實の世で自分が人一倍弱く、苦しみに苦しんだ結果から左樣いふ考を得たのであらう。超人の考は強い人間の說くものではない。道德は現在の狀態其儘に維持して行くに都合の好いやうに作つたもので、現在に勢力を得てゐる人には都合の好いものだが、得てゐない者には至つて都合の惡いものである。道德を超越するには勢力を得さへすれば可い。勢力のない者は苦まされる、絶對の勢力を得れば、これを脚下に踏み躪ることが出來る。眞の超人ならば何の拘束をも受けないだらう。自分が生れながらの超人か何うかを試みる爲めに『罪と罰』の主人

公ラスコリニコフは人を殺した。然し自分を超人か否かと疑つてみるのは、明かに超人でない證據である。試みは疑ひがあるからで、疑ふはない證據である。老婆を殺したのはサタンで、彼の手に殺したのは彼自身である。斯ういふ心理を突詰めて書くのが此作者の小說で、ドストイエフキイの作がインテレクレクチュアルだといふのは、主として緻密な、何處迄行つても止まないやうな解剖(アナライズ)にある。尤も只分類したり綜合したりすると言ふ意味ではなく、本當に創造するのである。ドストイエフスキイは單なるインテレクチュアル・マンではない、最そつと眞實に物を見、物を掴まへて來る人である。智的ではあるが、同時にクリエティーヴである。オリヂナルである。

ドストイエフスキイの宗教は露西亞の人民の宗教である。『痴人』『惡魔』『カラマゾフ兄弟』に現はれてゐる宗教は、我國の天理教のやうな原始的の者らしい。ドストイエフスキイが、人民の宗教に何の位深く歸依し、又それを研究して居たか、露西亞の人民の宗教を研究して見なければ判らない。今は只私の話に依つて、一人でもドストイエフスキーの信者、同好者を得たならば、それで滿足である。

上卷

一

フヨドール・パブロヴィッチ・カラマゾフは我々の州の有名な地主で、其惨死は今なほ我々の記憶に殘つてゐる。彼は露西亞に好く見るやうな下劣な、同時に無感覺な男であつた。無感覺とはいふもの〻、金を貯めることは上手で、最初は極めて僅かの地所しか持つてゐなかつたのが、死んだ時は拾萬留布以上の金を殘して置いた。

彼は二度結婚して、三人の息子があつた。最初の妻の腹にドミトリ、二番目の妻にイヴンとアレキセイ。最初の妻はアデレイダ・イヴノフナと云つて、富有な地主の家に生れた。なか〳〵の美人で、何うしてこんな女がこんな男の妻になつたかは、ちよつ

と解らない。何でも大變ロマンティックな氣風の娘で、階級など無視して、フヨドールと一緒に駈落するのが面白かつたらしい。そんな譯だから、愈々夫婦に成つてからは、男の缺點ばかり眼に着いて、始終二人の中に喧嘩が絶えなかつた。男の方では只妻の持參金ばかり目當にしてゐる、然し勝氣な女でなぐられるのは毎も女ぢやない、男の方がなぐられたといふことだ。到頭、良人に愛想を盡かして一人の子供を捨てゝ置いて、或神學書生と一緒に駈落して彼得斯堡へ出奔した。その後でフヨドールは、それを好い話の種にして、男に取つては面目ないやうなことまで、ことこまかに話して廻つた。この男にはそれが嬉しいのだ。

そのうち妻君の居所が知れた。で、彼得斯堡へ追駈けて行かうと云ひながら、實は少しも行かうとしなかつた。間もなく妻君の方で死んで仕舞つた。チブスに罹つた爲めだとも云へば、又、飢えて死んだのだといふやうな噂もあつた。

こんな父親が後に殘された子供を何んな風に育てたかは想像に難くない。併し、彼はその子を虐待したのではない。單に忘れて仕舞つた。誰もかまふ者がないから、グ

リゴリイといふ其家に長く仕へた爺の下男が、三つになるミチヤ(ドミトリ)を引取つて育てた。それを好いことにして、フヨドールは勝手な眞似をしてゐた。他人から子供のことを聞かれて、暫らく何の事か了解し得ない位であつた。

この子はギムナヂュームを終らないうちに學校を引いて、士官學校へ這入つた。高加索斯へ行つた。決鬪をして只の兵隊に落された。それから又士官に昇進した。此頃自分の財産に就て父親と商議するために故郷へ歸つて來た。ミチヤは自分の分け前がまだ餘程有るやうに誇大して考へてゐた。が、此話は後にして置く。

最初の妻を失つてから四年目に、フヨドールは再び結婚した。二度目の妻はソフイヤ・イヴノフナと云つて、牧師の一人娘で早くから兩親を失ひ、隣の州にゐる貴族の富有なお婆さんの厄介になつてゐた。そのお婆さんは大變氣の短いお婆さんで、可愛がつては呉れるけれども、何うも居づらくて堪らない。そこへ持つて來て、フヨドールが好い加減なことを言つて持ちかけたから、つい男の言葉に載せられた。

フヨドールは二度目の妻を娶つてからも身持がをさまらず、いろんな下卑た女を家の中へ引入れたりなぞして、妻君を虐待した。で、妻君は二人の男の子を殘して、間もなく死んで仕舞つた。

その妻君が死んだと聞いた時、前のお婆さんは早速やつて來て、二人の子供を引取つて行つた。そんな男には小さな子供を任せて置かれぬといふ氣であつたらしい。

お婆さんは間もなく死んだ。が、その息子が又親切な人で、二人の子の教育を身に引受けて育てた。上のイヴンといふはだんまりの氣むづかしやで、學問が素張らしく出來た。だん〳〵生長するにつれて、自分が他人の家に世話になつてをる身だと勘附くと、それを可厭がつて、大學にゐるうちから雜誌に投書なぞして、僅かばかりの金を儲うけ、成るたけそれで自活するやうにしてゐた。その宗門法院に關する論文なぞは、世の注意を惹いて、イヴンの名は故郷にまで聞えるやうになつた。その頃彼は不意に故郷へ戻つて來た。そして、お父さんの家に同居した。

これで三人の兄弟が三人ながら故郷へ戻つて來た。一番末のアレキセイといふのは

一年も前から戻つてゐたのだ。アレキセイが廿歳で、イヴンが廿四歳、一番上のドミトリは廿七歳であつた。

このアリヨウシャ(アレキセイ)といふ子は小さい時から人に可愛がられる子で、お婆さんの息子の家でも、殆ど自分の子のやうに可愛がられてゐた。この子の可愛がられやうは、何か人の心に取入る術でも持つてゐるやうに見えるが、その實何もそんなものはない。生れ附きである。學校でもその通りで、外の子供がいぢめても、暫らく經つと、直ぐその子と仲善く話してゐる。それがわざと忘れるのでもなければ、許して遣るのでもない。初めからいぢめられたとも思はぬのである。只一つ此子は極端に丁寧で、潔白で、女の話など出ると直ぐ顏を眞赫にした。それで外の子供達からさんざ弄りものにせられた。此子は又その性癖として、自分が誰の費用で生活してゐるなどといふことは全く氣に懸けない。この點に懸けては兄のイヴンと正反對であつた。小使錢などねだつたことはないが、たとひ貰つても全然氣に止めない。即座に無くして仕舞ふか、五六週間も何らして可いか知らないで、其儘それを持つてゐるといふ性

質だ。

彼はギムナヂユームを卒業する一年前に、不意に國へ歸りたいと言ひ出した。みんな止めたけれども、何うしても行くと云ふ。餞別も澤山貰つたが、汽車は三等で行くからといふので半分かへした。故郷へ歸ると、直ぐに阿母さんの墓へ參りたいと言つた。が、父親のフヨドールは自分で一度も參つたことがないから、何處に母親の墓があるか知らなかつたと云ふことだ。阿母さんの墓へ參つてから間もなく、アリヨウシヤは近隣の僧院へ入りたいと言ひ出した。長い間の願ひだから何卒諾いて呉れと願つた。で、父親も承知した。

アリヨウシヤが僧院へ入りたいと云ふ希望を起したのは、元々この僧院にゐる長老ゾシマの徳を慕つてゐたからで、長老とは何んなものかといふと、長老に從へば弟子は自分の意志を投げ出して、長老の意志の中へ這入つて仕舞はなければならぬ。即ち全然長老に服從し、全然自己を抑制することである。自己を抑制すると云ふのも自ら進んでするので、自己に打勝ち、自己を支配するためである。即ち服從の生活の後に

完全なる自由に到達するのである。

この僧院の長老ゾシマといふのは當年六十五歳で、元は富有な地主の家に生れて、若い時には戰爭にも出た。が、一度僧院へ這入つてからは固く持戒して、多くの歸依者を持つてゐた。人々は皆ゾシマの許へ自分の罪を懺悔しに行き、助言を願ひに出た。彼は一目見ると何も言はないうちから、その男が何しに來た、何んな苦しみを心に抱いてゐるかを言ひ中てたさうだ。で、恐しい顔付をしてゐるかといふと左樣でない。柔和な相を備へて、百姓共までみんなそれに懷附いた。悲しみと勞働とに疲れ、不斷の罪業に惱まされた露西亞の百姓にとつては、始終何ものかの前にひざまづいて、拜むものを持つてゐるといふことが、非常な必要でもあれば、又、慰藉でもあるのだ。アリヨウシヤはそれらの百姓共と共にこの長老が生きながらの神である。その心の中に萬物再生の秘密を懷いてをる。地上に眞理を打立てゝ萬人が互に相愛し、富めるも貧しきも、貴きも賤しきも、一樣に神の子である。神の王國を齎らす力を懷いてゐると信じてゐた。

で、二人の兄弟がこの町へ着いた時、彼は眞實の兄弟のイヴンよりも、腹がはりの兄弟のドミトリと早く仲善しに成つた。イヴンに對しても非常に興味を持つてゐたけれども、何ういふものか親しくなれない。向うでも自分を輕蔑してゐるやうな氣がする。かくイヴンに同情心がなく冷淡に見えるのは、屹度何か自分には解らない或事を考へてゐるからだと思つて居た。

この時に當つて、長老ゾシマは病氣で困つてゐたのだけれど、強いて其許(もと)でカラマゾフ一家の者が親子兄弟四人會合しやうといふ相談が持ち上つた。それはフヨドールとドミトリとの間に財產爭ひが、何方も後へ引かないのでなか〳〵決着しない。で、德望の高い長老の許で相談したら、割合に早く決着するだらうと云ふのだ。アリヨウシヤはこの話を聞いて大變驚いた。あんな亂暴な連中がやつて來たら何を仕出かすか知れたものでない。師も定めて迷惑だらうと一時は當惑したが、又思ひ返して其儘にして置いた。

二

長老ゾシマの庵室に於けるカラマゾフ一家の會合は、いはゞ親類會議のやうなもので、折柄この町へ來てゐたフヨドールの先妻の從兄に當るミューソフと云ふ巴里仕込みのハイカラの小父さんや、その遠緣に當るカルガノフと云ふ若い士官も出席した。で、又二三の僧侶に、ラキチンといふ神學生も居合せた。長老の出席を待つ間、フヨードルは清淨な僧院をも顧みず、此處を酒場か料理店(ふちやく)と間違へたやうな駄洒落や阿呆口を叩いて仕樣がない。いよ〳〵長老が其處へ出てからも尙止めない。餘りのことに高襟(ハイカラ)のミューソフが口を出すと、今度はミューソフに喰つて掛る。

「俺(わし)の腹の中には惡魔が栖んでゐるんぢよ。何(なに)ちつぽけな奴だがね。大きな奴は最つと好い宿を求めるよ。君の腹の中だつて碌な奴は居やしないさ。長老樣、俺がこんなことを言つて馬鹿な眞似ばかりしてゐるのは眞個(まつたく)辱かしいからですよ。自分でも自分が辱かしいから尙更馬鹿な眞似がしたくなる。そんなことでもして胡魔化さずにはゐ

られない、眞個俺は墮落した人間だ。長老樣、何うしたら可いでせう。何うして可いか何卒敎へて下さい。」

長老は微笑んで、「何うして可いか、貴君はよく御存じの筈ですよ。貴君は何でも知つていらつしやる。知つて居て、そんな眞似をしてゐるのだ。つまり嘘を遣つてゐるのだ。嘘をついては成りません。就中自分自身に對して嘘をついては成りません。自分自身に嘘をついて、其嘘に耳を傾ける人は、終ひには自分でも嘘か眞實かわからなく成り、自分自身をも他人をも輕蔑するやうに成るものですよ。それは惡い事です。又、無闇に腹を立てゝ見るのは面白いことてせうが、何卒腹を立てないやうにして下さい。」

長老の諭し方は何時でもこんな風だ。今日もこの一家の外にいろんな百姓の男や女が遣つて來て、自分の苦痛を訴へ、長老の助言と慰藉とを求める。中に一人三つに成る子供を失くした母親があつて、非常に泣き悲しみ、長老が、

「そんなに泣くものでない。お前の子は今天國に在つて、神樣のお膝元に遊んでゐる

んだよ」と諭しても、

「いえ、そんなことは亭主も申して呉れます。そして泣くなと言ひますが、自分でも泣いてゐるのですよ。子供は天國にゐるかも知れませぬが、妾達の傍にはゐない。妾は只子供が一目見たい。一目で好いから覗いて見たい。」

かう云つておい〳〵泣く。

長老は淋しげに微笑して、「それはお前ばかりぢやない、大抵の母の運命は皆左樣だよ。ぢやア、最う慰められるな。慰められるのはお前の望みぢやなからう。泣け〳〵、慰むな、只泣いてゐるが可い。併かし、お前が泣く時には、何時でもお前の子は神樣のお膝元にあつて、お前の泣き悲しんでゐるのを上から見てゐるのだと云ふことを想ひ出すが可い。」

かう言つて其女を歸した。

又一人の女が來た。其女は年若くして年寄の良人に添ひ、非常に虐待されて暮して來たが、或時其良人が病氣に罹つた。女も最初は親切に看護したが、此の病氣がよく

成つたら又虐待されるだらうと思ふと氣が氣でない。到頭思ひ切つて其良人を殺して仕舞つた。其後で女は悔悟の念に責められて仕様がない。二百里を遠しとせずして長老に救ひを求めに來たと言ふのだ。

「そりや何時のことだ」と長老が訊いた。

「三年前のことです。初めは何とも思はなかつたが、だん〳〵苦しくなつて、今は日も夜も其の惱みが去らない。」

「お寺へ行つて懺悔したか。」

「えゝ懺悔しましたとも。併し神様は許して下さいません。」

長老は聲を和らげて、「心配するな、神様は何も彼も宥して下さるよ。此世に、本當に悔い改めた者を神様が許して下さらないやうな罪はない。人間は神様の廣大無邊の慈悲を汲み乾すやうな、大きな罪を犯すことは出來ない。只懺悔せよ、絶えず懺悔せよ、そして恐れるな。神様は到底お前などが想像も出來ない程深くお前を愛してゐて下さるのだといふことを忘れぬが可い。神様は罪あるお前を罪と一緒に愛して下さる

のだ。昔から云ふ通り十人の正しい人があるよりも、一人の罪ある者が悔い改めた方が、天國では大きな喜びがあるのぢやぞや。」

又一人富有な貴夫人がリザといふ跛の娘を連れて遣つて來た。此女は自分が信仰の缺乏のために惱んでゐると訴へた。「他人のために盡さうとしても、相手に感謝の念がなければ何うしても盡す氣に成れない。私は善行の出來ぬ女で御座いませうか。」

「私の友達にも貴方のやうな事を言ふ醫者が有つた」と、長老は徐かに答へた。「其醫者は常々言つて居ましたよ、『自分は人類を愛する。が、何ういふものか一般に人類を愛すれば愛する程、個人としての人間を愛しなく成る』と。」

「でも、私達は如何したら可いでせう?」

「兎に角、貴方が苦しんで居られるだけで澤山ぢや。出來るだけの事をして、成るだけ自分自身をも、他人をも悔らない樣になさい。私は貴方の惱みを慰めて上げるやうなことが云へないのを悲しむ。が、實行に於ける愛といふものは空想に於ける愛ほど美しいものぢやない。若し拷問といふものが芝居で見るやうに、大勢の眼の前で喝采

されながら、濟んで仕舞ふものなら、誰も拷問を恐がるものはあるまい。實行の愛といふものは勞働であり、忍耐である。時としては又一つの修業である。私も疲れた。何卒これ位にしておいて下さい。」

最後によい〳〵カラマゾフ一家の親類會議が始まつた。それまでにフヨドールもイヴンも來てゐる。アリヨウシヤはもとより長老の傍に隨いてゐる。たゞ肝心のドミトリだけが何ういふものか出て來なかつた。あまり遲いので、これは最う來ないのぢやないかと思つてゐる處へ、ミチヤが遽しく戸を開けて這入いつて來た。

「や、何うも遲くなりました。使の者に二度迄聞き直しましたけれども、二度とも一時からだと云ふので、その心算でゐましたが、急に十一時だと聞いて遽てゝ飛んで參りました。」

かう言つて彼は再びお叩頭をした。ドミトリの顏を見ると皆急に改つた。フヨドールも急に眞面目になつた。此男は眞面目になると一層人の惡いやうな顏附になる。

座中の人々は又前からの談話を續けた。ドミトリは一人默つて片隅に聞いてゐた。

が、急に、

「一寸、御免なさい」と言ひ出した。「では、何ですか。不信者の罪と云ふものは宥されないばかりでなく、其身の避け難い必然の結果だと仰有るのですか。」

「左樣ぢや」と、一人の僧侶が答へた。

「私も好く記憶えておきませう。」

彼は突然に喋舌り出したと同樣に　突然默つて仕舞つた。人々は彼の顏を眺めた。

「ぢや、貴方は本當に靈魂不死の信仰の消滅に關して、左樣いふ確信を持つてゐられるのですか」、長老は急にイヴンに向つて訊いた。

「え。左樣です不死のない所に道德はありません。」

「左樣信じていらつしやるなら、貴方の幸福だ。或は又貴方の不幸かも知れない。」

「何故不幸です」、とイヴンが微笑みながら訊いた。

「何故と言ふとね、貴方は恐らく自分の靈魂の不滅を信じてゐないでせうから——左樣でせう。」

「左樣かも知れません……併し私は戯談を云つたのではありません」と、イヅンは妙に顔を赫らめた。

「勿論戯談を言つてゐられるのぢやなからう。問題は猶貴方の頭の中にこだわつて、未だ解答を得ずにゐる。併し左樣いふ殉教者は時として失望自身を悞しむやうになるものだから御用心なさい。」

長老は愈々一家の相談を聽きにかゝつた。先づフヨドールが自分の不平を述べにかかつたが、矢張り駄洒落ばかり言つて、少しも眞面目にならない。ドミトリは齒噛みをした

「いや、お前達は皆な俺ばかりが惡いやうに云つて責める」と、フヨドールが叫んだ。

「長老樣、聽いて下さい。此男は軍隊に居る時、自分の屬してゐる隊長の娘を誑かして、自分と婚約を結ばせたのですよ。其娘は孤兒で、目下此町へ來てゐますが、此男は左樣いふ關係があるにもかゝはらず、その娘の眼の前で、又他の莫連女に引つかゝりましてな。いや、それが又却々しつかり者で、何うして此男の言ふことなど聞くんぢやない。だから愈々血眼になつて、その女を攻め落さうと騒いでゐるんですがね。私と財産爭ひをして金を引き出さうとするのも、みんな其女に注ぎ込まうとするためですよ。」

「默れ！」と、ドミトリが叫んだ。「私の前で、あの淑德高い娘の名を凌辱すると承知しませんぞ。」

「あれ、聞いて下さい。親に向つてあんなことを言ひますよ。親に對つてさへあゝだから、他人には何をするか知れない。此男は何日かも中央料理店の前で澤山の子供を抱へた貧乏な退職大尉の髯をつかんで、曳きずり廻して打擲しましたよ。」

「嘘です。他所から見たら本當ですが、內實は嘘です、成程私は大尉を擲りました。けれども此大尉は此親爺の吩咐で例の女の許へ行き、親爺から私の借りてゐる借金の證文を因にして、私を監獄へ陷すやうに惡智慧をつけに行つたのですよ。此親爺も其女に心があつて、私を嫉妬んでゐるのです。女は笑つて何も彼も私に話しました。實際、私は今日此處で親爺の前に謝罪して許して貰ひに來ました。それが何うです、こ

の有様は。私は最う親爺だとて許して置く譯にはいきません……」

彼は最う言葉が次げなかつた。眼は輝き息も忙しくなつた。皆な驚いて立上つた。長老ゾシマだけは、さも疲れたやうに眼を瞑つて聞いてゐた。

「こんな事に成つたのは、私ども二人ながら惡い」と、ドミトリは又言つた。「然しこんな事に成らうとは夢にも知りませんでしたよ。併し考へても見て下さい。現在親が息子を嫉んで、不仕末な女を横取りして、監獄へまで其子を入れやうとする。こんな親と穏かに相談しようたつて出來ますか。私は瞞されました。」

「決闘だ。これが我子でなけれや決闘だ」と、フヨドールは足踏み鳴らした。

「あゝ間違つた、私は間違つた」と、ドミトリはさも輕蔑したやうに、親爺を睨みながら低い聲で言つた。「私は許嫁の女と一緒に老親に孝養をするつもりで故郷へ歸つて來た。所が、こんなやくざな親の外に親はない。」

「ふゝん、お前がその許嫁を捨てゝあの莫連女を選んだ所を見ると、お前の許嫁はあの女よりも劣つてゐると見えるね。」

「いや酷い、あんまりだ」といふやうな聲々が傍に立合つた人々の口から出た。

「何うしてこんな人間が生きてるのでせうね」と、ドミトリは我を忘れて、かすれた聲で呻いた。彼の顏は憤怒に歪んでゐた。「皆さん、こんな人間がこの世に生きてゐても可いのでせうかね」と、父親を指しながら皆なの顏を見廻した。

「お聽き下さい、みなさん、親殺しだ、此處に親殺しがゐます」と、フヨドールは叫んだ。

「これは最う我慢が出來ない」と、座中の一人が言つた。ざわ〳〵と總立ちに成つて、一寸何うなるか分らなかつた。處が、思ひがけないことで此の始末がついた。長老ゾシマは急に自分の座から立上つた。そしてドミトリの前へ行つて、其前に跪きながら頭を下げた。アリヨウシヤは長老が倒れたのだと思つた。が、本當に而も叮重に頭を下げたので、面喰つて、長老を扶け起すために手を貸すことさへ忘れてゐた。

「左樣なら、皆さん御免下さい」と、長老はすべての客に對して挨拶をしながら、アリヨウシヤに扶けられて行つた。

ドミトリは少時あつ氣に取られて立つてゐた。長老が自分の前に額づく――何の意ぞ。彼は「あゝ神樣！」と、急に呻きながら兩手に顏を抑へて、其の部屋から駈け出した。

一時他の客も喫驚して默つてゐたが、又ぼそ〳〵と呟き出した。そこへ一人の僧侶が來て、別室で午餐の饗應があるから、此方へ來て呉れと言ひ出した。フヨドールはさすがに自分だけは辭退して家へ歸ると言つた。其他はイヴンを始め一同僧院の客間の方へ移つた。

一方アリヨウシヤは長老を扶けて居間に伴れ行き休息させたが、長老は少し落着くと、すぐにアリヨウシヤに向つて、「俺は最う可いから彼方へ行かつしやい。饗應の座で皆んなが待つてゐるよ」と、すゝめた。

「何卒此處に置いて下さい」と、アリヨウシは願つた。

「いや、こゝに用はない。此處は將來お前のゐる處ぢやアない。神樣の思召に從つて僧院を去るがよい。」

アリヨウシヤは吃驚した。

「何をそんなに驚く。お前は世の中へ出て最つと世間を見て來なければならぬ。お前は妻をも娶るだらう。世の中でお前のしなければならぬ事は澤山ある。俺はお前を信じてゐるから、お前を世の中へ歸すのだ。お前は澤山悲しい目にも遇ふだらう。併し其の悲しみの中にあつても、お前は幸福だよ。これがお前の使命だよ。」

アリヨウシヤの顏は苦しげに見えた。唇の隅がふるえた。

「何を又そんなに慨く」と、長老は優しく言つた。「何處へ行つても神樣を忘れるな。お前の兄弟の前にゐて遣れ。一人の味方に成るのではない、二人の味方に成つてゐるのぢやぞ。さらばぢや。」

アリヨウシヤは、一旦左樣言はれたら言ひ返しても詮ないと思つたので、しほ〳〵と長老の許を辭した。戸外へ出た時、前に長老の助言を聞きに來た富裕な貴夫人が待つてゐて、アリヨウシヤを片蔭へ聘んだ。そしてカテリイナから言傳かつて來たと言つて一封の書を手渡した。カテリイナといふのはドミトリの許嫁の女である。アリヨ

ウシャはそんな女から手紙を貰はうとは思つてゐなかつたので、急に心が騒付き出した。見ると、是非一度お目にかゝつて、大切な事について御相談したいから、一度訪ねて呉れといふ文言である。彼はいよ〳〵當惑した。が、例の優しい心から貴夫人に向つて承諾の旨を答へた。そして饗應の場に急いだ。

小徑の曲り角で、彼は又神學生のラキチンに迫ひ附いた。

「おい、長老は何と思つてあんな眞似をしたんだらうね」と、ラキチンは皮肉な笑みを泛べながら訊いた。アリヨウシャは知らないから、只知らないと答へた。

「あれは何だよ。あの長老は鼻が利くから、何か罪惡を嗅ぎ出したんだね。で、此後君の家に何が事が起つた時、豫言者の名譽を博さうと云ふんだよ。それだから人殺しの足許に跪いたのだよ。」

「人殺し？　君は何を言ふんだ」と、アリヨウシャは眞蒼に成つた。

「如何して？　君だつて、そんな事位前から氣が附いて居さうなものだね。」

「そりやア氣が附かんでもないが……」

「ふゝん、氣が附いて居たのか。そりやア不思議だ」と、ラキチンは意地惡く出た。

「兎に角君の家は皆色慾の徒だよ。君が今迄純潔にして來られたのが不思議な位だね。親子兄弟三人、互に牙を研いで、他人の隙を窺がつて居る。」

かう言つて、彼はなほドミトリがグシルエンカといふ魔女を蔑視しながら、何うしても離れ得ない所以を說いた。色慾を解するものは、女の身體の一部、例へば足だけにも惚れ得ると云ふのだ。彼はなほイヴンがカテリイナを誘拐しやうとして居る、加之ドミトリの方でもグルシエンカに走るために、却つてそれを便宜にして居ると告げた。「何しろ一文なしのイヴンが持參金附の女を手に入れりや、都合は好いからね。女の方でも近頃は大分心がぐらついて居るやうだよ。」

「如何して、そんなに委しく知つて居るんだ」と、アリヨウシャは訊き返した。

「はゝ、君が氣を揉む所を見ると、僕の言つたことは當つてるね」と、ラキチンはせせら笑つた。畢竟自分もカテリイナに氣が有つて、イヴンを戀敵にして居るらしい。

「あゝ、君はグルシエンカの親類だといふから、それで何彼の話を聞き出すんだね」

と、アリヨウシヤは何氣なく言つた。

ラキチンは僻んだ心からそれを侮辱と取つた。「あの女なら、今に君の兄さんか、でなきや阿父さんが、僕よりも君の親類にして呉れるよ。」

此時、不意に食堂の邊りで騷々しい物音がした。二人は其方へ駈け附けた。

話もとへ返る。饗應の場では親類のミユーソフが一同に代つて挨拶しに。そして、折角お招きにあづかつたフヨドールが此席へ出られないのは、誠に申譯ないなぞと表向きな挨拶をしてゐた。其處へ今來られないと言つた當人のフヨドールがひよつこり顏を出した。彼は一旦歸るといつたものゝ、何うしても家へ歸る氣になれないので、馬車を待たしておいて又やつて來たのだ。

「諸君！」と、彼は閾の上に突立ちながら言つた。「貴方がたは私が歸つたと思つたのでせうね。私は又來ましたよ。」

高襟(はいから)のミユーソフはこんな仕業に堪えられないやうな氣がして呶鳴つた。呶鳴られれば呶鳴られる程フヨドールは一層調子づいて聲高に喚(わめ)いた。彼は滅茶苦茶を喋舌り

ながら、同時に聽手に對しても自分に對しても、自分が滅茶苦茶を饒舌つて居ないことを證據立てやうと思つた。其結果愈々以て盲目滅法に滅茶苦茶を饒舌つた。終ひには寺院や僧侶の惡口まで言ひ出して、

「へゝ、寺院が何だ、坊樣が何だ、露西亞の百姓どもが汗水たらして儲けた金子を家族どもの手から捻ぢ取るやうにして持つて來るのだ。お前達は人民の汗で肥大つて居るのだ。人民の血を啜つて居るのだ。」

かう言つて、皿小鉢の載つた食卓を引つくり返した。一同又總立ちに成つた。フヨドールは愈々狂氣のやうに成つた。そして遠くからアリヨウシヤの顏を見ると、いきなり呼びかけて、

「こりやアリヨウシヤ、お前も今日は家へ歸るのだ。枕も布團も持つて來い。塵つ端一つ跡に殘して置くな。」

到頭今迄頑固に默つて居たイヴンが立ち上つた。そして親爺の手を持ちながら引き摺るやうにして、馬車の側へ連れて行つた。

「さア走らせろ」と、彼は馭者に向つてぷん〳〵怒りながら叫んだ。フョドールは馬車の中でも未だぐづ〳〵言つて居る。「お前ぢやアないか。今度の相談會はお前が仕組んで、お前が思ひ立つたんだよ。それに今は――」

「貴方は最う大分饒舌つた。最う默つても可いでせう。」

から言つたまゝ、イヴンは家へ歸るまで一口も物を言はなかつた。

三

カラマゾフ家にはグリゴリイといふ老僕が有つた。彼は主人の先妻を憎んで居たけれど、後妻に來たソフイヤには晶負した。齡の若い優しい女が主人や主人の情婦どもから虐待されるのを見兼ねたので有らう。彼は今でもソフイヤの惡口を言ふ者を唯許しては置かない。彼は表面冷やかな、むつつりした男で、一言づゝ言葉を句切つて、重々しい物の言ひ方をした。大變妻君のマルフアを愛して居た。マルフアも人の言ふやうに莫迦な女ではなかつた。家政の遣り繰りも却々上手で有つた。

此夫婦は前にも云つたやうに主人の長男ドミトリを自分の手鹽にかけてゐた。垢丸けにして打捨つて有るのを、自分で水を浴びさせて、自分の家に有る襤褸を着せて育てた。次には次男のイヴンと三男のアリヨウシヤとを引取つて育てた。夫婦の間に自分の子とて一人もない。只一人有つたが、指を六本持つて生れた。グリゴリイはそれを神樣の罰のやうに思つて、見るのさへ可厭がつた。が、十四日目に死んだ時には泣いて自分で墓場へ埋めに行つた。

恰度其子を埋めた晩である。物置の方で赤ん坊の泣く聲がした。マルフアは怖がつて良人を起した。何だか女の呻くやうな聲も聞える。グリゴリイは着物を着て、提灯を持つて出て行つた。マルフアは自分の子が泣くのだと思つて、お念佛を申しながら隨いて行つた。物置の戸を開けて見ると驚いた。町の中を乞食して廻つて居る綽名リザベタ・スメルヂヤツチヤ(臭い女)といふ莫迦女がお產をして居たのである。其女は自分の傍に赤ん坊を置いて死んで居た。何にも物を言はなかつた、言へなかつたからで有る。

此のリザベタに就いては一條の話が有る。此女は冬でも夏でも布子一枚身體に着けたまゝ、町中を彷徨つた。髪は羊の毛のやうに亂れて、始終泥に塗みれて居た。阿母さんは早く死んで無い。親父は有つても飲んだくれで傍へ寄せ附けない。此女は莫迦だといふ處から、皆んなが可哀相に思つた。町の人が氣の毒に思つて綺麗な着物を着せて遣ると、明くる日には直ぐ何處かへ脱いで來た。矢張元の布子を着て居る。其間に親父が死んだ。孤兒だといふので、町の人は一層可愛がつて遣つた。學校へ行く子供でも、此女ばかりは虐めない。が、錢を呉れても、直ぐお寺の賽錢箱へ投げ入れて仕舞ふ。不味い麪包ばかり食つて水を飲んで生きて居た。

或夜醉拂ひが五六人がやく騒ぎながら、村の道を歩いて來た。見ると向うの垣根の下にリザベタがしどけない風をして寢て居る。醉つ拂ひどもはそれを見て笑ひながら淫らな事を言ひ合つた。其中の一人が「何うだい、何んな物好きでも此の獣物を女にして遣るだけの醉興が有る奴はなからうね」と言つた。其處にフョドールも交つて居たが、それを聞くと例の癖として、「うんにや有る。斯ういふ女を手に掛けるといふことは、又格別變つた味のするものだよ」と言ひ張つた。皆んな顔を背向けた。そして、そんな事が出來るものか、出來るなら遣つて見ろ」と、笑つて其場を立去つた。フョドールも其時皆んなと一緒に其處を立去つたと、後では言ひ張つたが、兎に角五六ヶ月經つと其女の腹が膨れ出した、勿論女に訊いた處で、相手は誰だか判らない。が、村の評定では皆フョドールを目指して居た。

今やマルフアが其子を拾ひ上げて育てることに成つた。パベルといふ名も附けた。が、村の者は其後へ持つて行つて、フョドロヰツチ(フョドールの息子といふ意味)と附け加へることを忘れなかつた。此兒は最う一人前の男に成つて、フョドールの二代目の家僕と成つた。そして、グリゴリイやマルフアと一緒に住んで居る。彼は料理番の役を勤めて居た。

話變つて、アリヨウシヤは父親に招ばれた後で、饗應の場へ行つて見たが、其の亂暴狼藉はお話に成らない。が、兎に角父親の家へ行つて見やうと思つた。途中で又カテリイナから招ばれて居ることを想ひ出した。が、彼は何う云ふものか、此女を恐れ

て居た。女だから怖がると云ふ譯ではない。彼は小さい時から女の中に育つて來た。カテリイナは美くしい、氣位の高い、激しい氣象の女で有つた。が、美くしいからとて怖がるのでもない。何だか解らなかつた、解らないだけに一層怖がつた。彼は此女が自身に對して濟まない事をして居るドミトリをば、單に寛大な心から救はうとして居ることも知つて居た。で、かう云ふ美くしい、優しい心も認めながら、何ういふものかカテリイナの前へ出ると身が顫(ふる)えた。

兎に角彼は父の許へ行つてからカテリイナの家を訪ねやうと決心した。小さい町だから道の隅々迄よく知つて居る。で、彼は裏道を通つて父の家に近づいた。將に裏門を這入らうとした時、隣の貧乏な寡婦の家の垣根の中から、ドミトリが手招きして居るのを見かけた。「や、恰度好い處で逢つた。俺はお前の事を考へて居た處だよ」と、ドミトリは内密話のやうに低い聲で言つた。「何卒其垣根を越して、此處へ來て呉れ。」

かう言つて、彼はアリヨウシヤを引張り上げて遣つた。そして庭の隅の方へ伴れて行つた。

「誰も居ないぢや有りませんか」と、アリヨウシヤは訊いた。

「いや俺は此處に隠れて見張つて居るんだよ。何れ其譯は後で話をするがね。なに、お前は又俺(わし)が酒を飲むと言ふんだね。これは飲むのぢやアない、飲まれるんだよ。兎に角お前が來て呉れたのは嬉しい。實際俺はお前が所好だねえ。抱き締めて、潰して仕舞つて遣りたい程に思つて居るんだよ。」

彼は本當に嬉しさうに言つた。

「俺(わし)はお前とあの女しか愛しない。あの俺が惚れて居る女だよ。併し惚れて居るといふのは愛することぢやない。惚れて居ても、其女を憎むことが有るんだよ。俺は今崖から淵の中へ眞ッ倒さまに落ちやうとして居る。それが夢ぢやない、實際だよ。併し俺は怖いとも思はない。いや、怖がつて居るかも知れないが、又それを樂しんで居るよ。樂しむどころか法悦の境に這入つて居るよ。一體お前は何處へ行くんだい？」

「私は阿父さんの許へ行きます。それからカテリイナの許へも始めて伺はうとして居るんですよ。」

「なに、あの女の許へ、又親父の許へ。そりやア好い、恰度俺も其處へ使に行つて貰はうと思つて居た處だ。」

「私を使に遣るのですか。」

「あゝ、お前だよ。俺は最うお前の外に手頼に思ふ者はない。何卒聞いて呉れ、俺の話を聞いてお呉れよ。」

かう言つて、彼は不意に軍隊で習つた感傷的な歌を唄ひ出した。唄ひながら手に持つた罎の酒を飲んだ。

「最う歌は可い、充分だ。俺は泣くよ、泣かして呉れ、莫迦な話だねえ、皆衆笑ふだらうよ。併しお前だけは笑はないねえ。なに、お前も泣いて呉れるのか、最う可い、最う可い。」

やゝ有つて彼は語り出した。

「あの時分俺は乱暴な生活を送つて居た。今親父は俺があの女を騙すとて澤山な金を使つたやうに言つたが、あれは嘘だ。俺は何もそんな事に金は使はない。金を使ふの

は附錄だよ。俺は音樂や酒宴やヂプシイの女に金を投げ出したんだよ。俺は罪惡が所好だ、罪惡の汚ない處が所好だ。慘酷な處が所好だ。俺は南京虫のやうな男だね、虫けら同樣の男だね。眞個カラマゾフ家に生れたゞけあるよ。俺は曾て仲間の者大勢と一緒に橇で遊山に出掛けたことが有つた。戻りには暗く成つた。冬の寒い頃でね、俺は一人の女の子の手を握つて無理に接吻させて遣つた。其子は士官の娘でね、溫順しい好く云ふことを諾く子だつたよ。暗がりだから、俺のするが儘にさせて居た。可哀相に、向うぢや俺が明くる日其娘の家へ結婚を申込むもんだと思つて居たんだよ。處が、俺は幾月經つても何とも言出さない。好く舞踊會などで會ふと、恐ろしい眼をしてぢろ〳〵俺を見て居たよ。餘程怒つて居たんだね。處が、怒られゝば怒られるだけ俺の腹の虫は嬉しがつて居るんだから仕方がない。五ケ月ばかりの後、其娘は或士官と結婚して其町を去つたよ。何でも今は幸福に暮して居るといふ話だ。併し私は此事を誰にも言はない。他人に自慢なぞしない。俺も卑しい男だが、そんな不名譽な事はしないよ。なに、お前は赫い顔をしたれ、お前などがこんな話を聞いたら定めて可厭

で堪らないだらうね。」

「いえ、私は貴方のなすつた事で赫い顔をしたのでは有りません、私も貴方と同じ樣だと思つたからですよ。」

「お前が？　そりやア餘(あん)まりだね。」

「いえ、餘まりぢやアない。梯子は一つですよ。貴方は頂上に居る、私は一番下に居るだけだ。」

「お默り、そんな事を言ふもんぢやア無い。何卒お前の手を接吻させて呉れ。嘗てグルシェンカが言つたがね、あゝ、あの莫蓮者だよ。彼奴がお前を見て本當に喰べて仕舞ひたい程可愛らしい人だと言つたが、本當に彼奴も男を見る眼が有るねえ。それは何うでも何い、今度が肝心の話だ。俺は誰にも此話をしたことがない。唯イヴンにだけ話したよ。」

「イヴンに？　へえ。」

アリヨウシヤは懸命に耳を傾けた。

「俺は其頃歩兵隊の中尉をして居た。其町ぢやア恐ろしく俺を歡迎して呉れたよ。何しろ滅茶苦茶に金を使つたからね。俺は金持だと思つて居た。自分でも左樣思つて居たよ。併し聯隊長の大佐殿には嫌はれた。俺の方で其爺さんに對して適當な尊敬を拂はなかつたからね。俺は傲慢だつた。其爺さんも頑固だつたが、內實氣の好い人でね。二人妻君が有つて、先妻の娘が一緒に其町へ來て居た。餘まり顏は美(よ)くなかつたが、氣質の優しい、能く働く娘(こ)で、其家でも女中だか娘だか分らないやうに追ひ使はれて居た。俺などが洗濯を賴んでも快く遣つて呉れたよ。後妻の娘(こ)は彼得斯堡(ペテルスブルグ)の女學校に寄宿して居たんだが、今度卒業して其町へ遣つて來ることに成つたんだよ。それがカテリーナ・イヴノフナだ。何でも都から聯隊長のお孃さんが來るといふので、若い士官どもは大騒ぎをした。併し豫々氣の高い女だと聞いて居たから、俺は氣に喰はなかつた。で、其娘が歸つて來てからも、故と聯隊長の邸(やしき)へ寄り附かなかつた。「恰度其頃俺は親父から六千留布(ルーブル)の金を送つて貰つた。何ういふ譯だか知らないが、親父は最うこれでお前の財產はお終ひだ、此後あてにしても駄目だといふ條件で送つて來たんだが

ね。何でも關はない、金が手に入つた方が好いから貰つて置いた。

「處が、或日俺は友人から妙な事を耳にした、内の聯隊長が大分聯隊の金を使ひ込んで、それが陸軍省へ聞え、近々聯隊長の更任を見ることに成つたと云ふんだよ。尤も大分敵の策略も有つたやうだがね。其噂が立つと、町の者を始めとして、士官どもまでが聯隊長と其一族に對して急に冷淡に成つたよ。俺は何うも面白くて堪らない。直に聯隊長の邸へ出掛けて行つた。上の娘とは仲が好かつたから、其女に會つて、『貴女は阿父さんの責任にある政府の金が四千五百留布(ルーブル)許り失く成つて居ることを御存じかい』と訊いて遣つた。『何を言ふのです、誰がそんな事を言ひました』と女は喫驚した。『いや、そんなに心配するに及びませんよ、私は誰にも言はない。私は親切から言つて上げるのだが、若し其四千五百留布の金が愈々出ない節には、貴女の阿父さんはあんな齢に成つてから一兵卒に落されるのですよ。ですがね、若し貴女の妹さんが一人でこつそり私の宿へお入來(いで)なすつたら、私は四千五百留布の金をあの方に上げますよ。そして誰にも何とも言ひますまい。』『まア貴方は酷い人ですね。そんな事が能く言はれましたね』と言ひながら、娘はぷん〳〵怒つて其場を去つた。俺は後から最一度『屹度内密だよ』と、呼び掛けて遣つた。

「處が急に新任の聯隊長が赴任して來た。前の聯隊長は病氣だと稱して隊へ出ず、幾日經つても事務の引繼ぎをしない。何しろ人の好い爺さんだから惡い商人どもに騙されて、聯隊の金庫から金を出して遣つたんだが、左樣なると商人どもは固(もと)より返さう筈がない。愈々切迫詰つた揚句、聯隊長は一間に引籠つたまゝ短銃を咽喉に當てがつて一發ズドンと遣つた。幸に彈丸は外れて聯隊長は助かつた。助かるには助かつても金は出ない。一家は周章狼狽した。其晩だよ。俺は例に依つて何處かへ飲みに出掛ける積りで、髪を梳き、半帛に香水を振りかけ、帽を持つて將に出掛けやうとして居た。が、戸口の處でばつたりカテリイナに出會つたんだね。何うして此女が誰にも知られずに町を通つて來たか、それは解らない。下宿の婆さんどもは聾だから何も知れる筈がない。勿論俺は此の好機會を逸(のが)さなかつたよ。カテリイナは俺の言ふが儘に部屋の中へ這入つた。眞直に俺を見上げて立つて居たよ。其顏は決心の色が溢れて、俺に突

蒐つて來るやうにも見えた。が、唇の隅にはどつか不安らしい影も見えるんだね。

「姉が私に申しました、私が自身で此方へ參りますれば、四千五百留布のお金を下さると。私は來ました……何卒其お金を下さい。」女は其場に堪えないやうにも見えた。息が切れて、言葉も途切れ〳〵だ。唇の隅も顫えて居る。アリヨウシヤ、聽いて居るかい、眠つて居やせんか。」

「兄さん、貴方は本當の話をして居るんですか」と、アリヨウシヤは昂奮しながら言つた。

「本當だとも。で、第一俺の心に泛んだのは、矢張カラマゾフ式だ。俺は百足虫が私の腹を咬んでゐるやうな氣がしたよ。俺はあの女を見上げ見下ろした。お前も知つてるだらう、あの女は美人だよ。而も其時は父の爲めに犧牲に成るといふ精神から、何處か神々しい所さへ見えたよ。それに俺は何だ。俺は南京虫ぢやアないか。あの女は其南京虫の掌中に有る。俺の心の儘に何うにでも出來る。俺は隱さず言ふがね、腹の中から込み上げて來る卑しい心の爲に息が詰まるやうな氣がしたよ。何うだ

い、俺は明日の朝此女の家へ行つて結婚を申込みさへすれば、誰にも知れずに、誰にも疵が附かずに濟むぢやアないか。が、同時に別の聲が俺の耳に囁いた。若し明日結婚を申込んだ時、此女が拒絶したら何うだらう。戸口から馭者に私を追ひ出させて、『さア叮寧に觸れ廻すなら觸れ廻しなさい、私は貴方など怖れては居らぬ』と言つたら何うする？　俺は女の顏をぢいつゝ眺めた。此女のことだからそんな事位遣り兼ねない。俺は又むら〳〵と腹が立つた。一つ自分も車夫馬丁のやうな態度に出て、かう言つて遣つたら何うだ。『なに、四千五百留布ですつて！　御戯談ものでせう。切めて二百留布位なら何うにかしませうがね。今時四千五百留布の金子を氣紛れで捨てる男は有りませんよ。何が聞き違ひぢや有りませんか。』

「かう言つて遣りやア、それでお終ひだ。女は逃げ出すだらう。が、復讐としては、これ位痛快なものもないね。俺は此戯談のために一生涯後悔しても關はない。實際、其時は心から女が憎かつたよ。二三秒間其女の顏を睨めて居て遣つた。が、其の憎みは狂氣のやうな愛から髮の毛一筋しか離れてゐない。

「俺は窓の傍へ行つて冷たい硝子に額を押附けながら默つて居た。今でも火のやうな額に緊着いた氷のやうな硝子の冷たさを覺えて居る。が、心配するな、俺は永く其女を放つて置かなかつた。ぐるりと向き直ると、机の傍へ行つて、抽斗から五千留布の銀行手形を取出した。それから默つてそれを女に見せて、二つに折つて女の手に渡した。そして廊下の戸を明けて一歩後へ退りながら、女の前に叮嚀な叩頭をした。可いかい、本當に叮嚀な叩頭をした。女は身體中顫えて一秒時間私を見詰めて居たが、見る〳〵眞蒼に成つた。實際紙の樣に蒼くなつた。そして、徐々と俺の足許に跪いた。そんな生意氣な女學生流のお叩頭ぢやない、本當に露西亞式のお叩頭だよ。と見ると、急に起上つて、駈け出して行つて仕舞つた。俺は腰に劍を附けて居たがね。何と思つたか其場で自分を刺さうとした。何ういふ譯だか自分でも知らない。考へて見れば、勿論莫迦な事さね。だが思ふに、それは嬉しかつたからだよ。人間は嬉しくつても死るものだが解るかい。併し俺は死なゝかつたさ。唯、拔いた劍先に接吻して、又元の鞘に納めたよ。時に俺は餘まり自分の豪らさうな話ばかりしたやうだね。が、そんな事は何うでも可い。俺とカテリイナとの關係は、ま、そんなやうな次第さ。そして、イヴンとお前との外には誰も知らないのだよ。」

から言つて彼は額の汗を拭つた。

「で、前半は解りました」と、アリヨウシヤが言つた。

「前半は喜劇で彼處に演ぜられ、後半は悲劇で此處に演ぜられた。」

「後半に就いては私は何にも知りませんよ。」

「俺もさ。あの事件が有つて以來、六週間といふもの俺はカテリイナに就いては熟んだとも潰れたとも聞かなかつた。或日一人の女中があの女からの手紙を持つて來た。封じ袋の中には二百五十留布（他の二百五十留布は手形の割引に取られた）の剩錢が這入つて居たばかりで、一言の文句も書いてない。俺は其二百五十留布を又酒屋で使つて仕舞つたよ。

「元の聯隊長が使ひ込みの四千五百留布を提供したので、皆んな驚いた。が、間もなく大佐は腦病に罹つて亡く成つた。葬式が濟んで十日經つと、カテリイナは姉と食客

の叔母とを伴れて莫斯科へ立つた。立つ時にカテリイナは鉛筆の走り書で『向ふから手紙を出します』とだけ書き遺して行つた。莫斯科に着いてから、あの女の運命は走馬燈のやうで有つた。近い親類の或將官の寡婦の後嗣の姪が死んだので、急にカテリイナの處へお鉢が廻つて來た。寡婦さんはあの女を後嗣にすると同時に、先づ十萬留布を隨意に使ふやうに呉れた。

「俺は急に五千留布を送られたので喫驚した。あとから約束通り手紙が來た。あの女が俺の妻に成らうと言ふんだよ。『私は狂人のやうに貴方を愛する』と言ふんだ。『貴方が私を愛しなくとも關はない。私の良人に成つて下さい。私は貴方を妨げやうとは思はない。私は貴方の足の下の毛氈に成りたい。私は一生貴方を愛して、貴方を墮落の淵から救つて上げたい。』俺は承知した。が、俺にはそんな値打は無いのだ。俺は一伍一什をイヴンの許へ知らせて遣つた。なに、お前は變な顔をするね。そりやアイヴンはあの女を戀するやうに成つたさ。あの女もイヴンを尊敬して居るよ。成程俺は莫迦な事をした。併し其の莫迦な事が俺を救つて呉れるよ。」

「併しあの女は貴方のやうな男が所好て、イヴンのやうな男は嫌ひでせう。」

「なに、あの女はあの女自身の貞操を愛するのだ、俺を愛するのぢやア無い。」此言葉は吾にもなく殆んど惡意を有つてドミトリの口から漏れた。彼は呵々と笑つた。が、直ぐに又顔を眞赫にした。「俺はこんな事を言つて、あの女の高い情操を嗤つた。併しあの女の情操は眞個天使のやうに眞面目だよ。其處に悲劇が有るのだ。併し俺は許嫁だとはいふものゝ、俺のやうな者が選ばれて、イヴンのやうな男が拒絶されるとは何事だ、あの女が感謝の念から一生を犠牲にして居るからだよ。併し結局の詰りは、俺は淵の底へ落ちて、あの女はイヴンと結婚するのでせう、女の方で別れないと言へば仕方がないぢや有りませんか。」

「そりやア婚約は立派にして有る。又あの女も無理に俺の精神を改めさせやうとして居る。が、何を言つたとて最う駄目だ。俺は今日お前をカテリイナの許へ使に遣つて

――」

「何ですと？」

「俺は再びあの女に會はない。何卒御機嫌好くと言つて貰ふのだ。」

「それで貴方は何處へいらつしやる積りです？」

「澗（どぶ）の中へさ。俺は最初グルシエンカを毆りに行つたんだよ。親父があの大尉を使にして、グルシエンカに借金の證文を渡して俺を告訴させやうとした時、俺は彼奴を毆りに行つた。俺は彼奴と今病氣で寢てゐる金持の爺との關係も知つて居る。又彼奴が慾張で高利の金を貸したりする無非道な女だといふことも知つて居る。併し一目あの女を見た時、俺は最う厄病に取憑かれたやうな氣がした。何も彼も最うお終ひだ。今こそ俺も一文無しだが、其時は或關係で三千留布の金を懷中に持つて居た。俺はグルシエンカを伴れて、此處から五里程隔つたモクロウの町へ行つた。其處で飲んだり騷いだり、デプシイの女に金を遣つたり、百姓に三鞭酒を飲ませたりして、三日の間に持つて居た金を皆んなふいにした。併し何れだけの報酬を得たか、俺は唯あの女の踵（かゝと）に接吻させて貰つたゞけだよ。」

「貴方は本當にあの女と結婚するつもりですか」と、アリョウシヤが訊いた。

「向うで承知して呉れりや直ぐにでも承知するさ。承知して呉れなくとも同じ事だ。俺はあの女の門番にでも成るよ。アリョウシヤ！」と、ドミトリは相手の肩を捕まへて振りながら叫んだ「お前は無邪氣だから何にも知るまい。全く狂人だよ。狂人のやうな病氣だよ。俺があの女を毆りに行つた朝、カテリイナは內密で俺に三千留布の金子を渡して、莫斯科に居る姉の許へ爲替を組んで來て呉れと頼んだ。俺は其金子をモクロウで使つて仕舞つたのだ。俺は今お前を使にしてカテリイナの處へ再びお目に懸らないと言つて遣るが、肝腎の金は返せない。」

「貴方は不幸な人だ。そんなに心を惱まして、貴方は終ひに自殺しますよ。」

「いや、俺は最う自殺するだけの勇氣もない。俺は唯グルシエンカの傍へ行けば可いのだ。あとは如何成つても構はない。」

「そんな事を言つて如何するのです？」

「あの女が承知して呉れるなら、俺はあの女の亭主に成るさ。そして情夫が遣つて來

た時には、次の間に這入つて居る。靴を磨けと言へば磨かうし、走り歩きにも行くよ。兎に角お前は今日中にカテリイナの許へ行つて呉れ。其前に先づ親父の許へ行つて呉れよ。」

「親父の許へ？」

「あゝ親父の許へ三千留布を貰ひに行くのだよ。そりやア親父は迚も呉れやアしないさ。併し親父は俺の母の持參金二萬八千留布を資本にして十萬留布にしたのだ。其中の三千留布位呉れたつて可い。」

「何と言つたつて、あの人は迚も呉れやアしませんよ。」

「そりやア俺も知つてるさ。それに親父もあの女に夢中に成つて居るのだから、俺があの女に接近する爲の金と知つたら、猶更呉れやアしなからうよ。そればかりぢやない、俺は親父が五日も前から三千留布の金を大きな封筒に入れて封印をして居るのを知つて居るよ。其上には『戀しきグルシエンカよ、お前が此處へ來て呉れた時に』と書いてあるさうだ。其金の在處は下男のスメルヂヤコフの外に誰も知らない。で、親

父は最う三四日あの女の來るのを待つて居るんだよ。あの女も大抵來ると言つたさうだ。で、お前も俺がかうして隱れて見張つて居る譯が解つたらう。」

「ぢやア斯うして被坐しやることはスメルヂアコフの外に誰も知らないのですね。お金のことも矢張あれからお聞きなすつたのですね？」

「左樣さ。そりやア大秘密だよ。イヅンでさへそんな事は知らない。それに親父は林の材木を賣る爲に、イヅンをチエルマシニヤの町へ使に遣らうとして居るんだよ。詰り其留守にあの女を引き入れやうといふんだね。兎に角、お前は親父から金を貰つて來て呉れよ。」

「えゝ、行くには行きます。が、貴方は此處に待つて被坐しやるのですか。」

「俺は四時間でも五時間でも六時間でも、乃至七時間でも待つて居るよ。」

「其間に若しグルシエンカが來たら何うなさいますか？」

「グルシエンカが來たら、俺は飛び出して家の中へ入れんやうにするさ。」

「で、若し——」

「若しも糞もない。そんな事に成りや殺して仕舞ふさ。」

「誰を殺すのです？」

「そりやア親父さ。俺はあの女を殺さうとは思はないからね。」

アリヨウシヤは不圖兄が狂氣に成つたやうな氣がして、其顏を見遣つた。そして、心を遣しながら家の中へ這入つて行つた。

アリヨウシヤが這入つて行つた時は、晝飯が濟んで、皆んな珈琲を飲んで居た。フヨドールは飯の後で毎もブランデーを飲むことにして居た。部屋の外まで親父の高笑ひが聞えた。

「やア遂々來たね」と、フヨドールは嬉しさうに叫んだ。「何うだ一杯飲まんか。」

アリヨウシヤは酒を謝した。

「やア心配するな、お前が飲まなけりや此方で飲む。」

スメルヂヤコフは傍に立つて給仕をして居た。此男は今年二十四歳に成つた。沈默で、全然他人と交際はない男だ。が、臆病なのではない。却々傲慢で他人を蔑視して

居る。前にも云つたやうに、グリゴリイ夫婦の手に育てられたが、夫婦は毎も此兒は恩知らずだと言つて居た。小さい時から友達がなく、疑ひ深い眼で世間を見て居た。そして遊ぶにも猫の首を絞めた後で、お葬ひをして遣ることが所好で有つた。一度グリゴリイが見附けて散々毆つたら、彼は一間へ籠つたまゝ一週間も飯を食はずに蹋んで居た。十二歳の時から聖書を敎えにかゝつたが、何うしても莫迦にして記臆えない。此時もグリゴリイは横ツ面を擲り飛ばした。それが爲めに、此子は癲癇の發作に陷つた。醫者を聘んで診せたが何うしても癒らない。其後、毎月一度位時を定めずに發作が起るやうに成つた。病氣に成つてから、今迄放棄つて置いたフヨドールも急に此の子に身を入れ出した。スメルヂヤコフは子供の時から食物を一々眼の前へ持つて行つて、好く透かして見てからでなければ食はない。グリゴリイはそれを怒つた。が、フヨドールは寧そ料理番にしたら好からうといふので、莫斯科の町へ修業に遣つた。彼は莫斯科に數年間居た。其間も他人と交際ないで、殆ど物を言はずに暮した。が、此町へ歸つて來た時は淸洒と身綺麗な服裝をして居た。唯、癲癇の發作は愈々頻繁に成

つた。始終默つて考込んで居るので、何か一物ありげに他人から憚られた。

がや〳〵と食後の會話は騷々しかつた。フヨドールは一人ブランデーを舐めてにこ〳〵して居た。そして色んな話の末に、終ひには矢張女の話を持ち出して、「俺は未だ生れてから何んな女でも醜いと思つたことはない。解るかい。お前達の血管の中には血が有るんぢやなくて、乳が流れて居るんだよ。未だ尻ッ邊に卵の殼が附いて居るんだよ。俺は何んな女にでも他の女に無い面白味を發見する。これも一種の才能だよ。俺に言はせれば、此世に醜い女といふものは無い。相手が女だと言ふ事で澤山だね。俺は腰の曲つた婆にだつて一種の味ひを見出すよ。乞食の女でも構はない。」

こんな話から、二人の子供の前で生みの母親の話を仕出した。母親の話が出てからアリヨウシヤの顏色は段々變つて來た。彼は眞赫に成つて、眼は輝き、唇は顫えた。親父はそんな事には氣が附かないで、馬鹿話を續けた。あの狂氣じみた阿母さんがあした、からしたと云ふやうな話を一々繰返した。彼は手を絞つた。顏を兩手に隱した。ヒステリイ性の激しい發作に顫へながら、椅子の脊に倒れ込んだ。

で、水を持つて來たり、顏を冷やしたりして、家中大騷ぎをして居る時、戸の外で喧ましい物音が聞えた。ドミトリが部屋の中へ躍り込んだので有る。

「彼奴が俺を殺しに來た！　殺しに來た！」とフヨドールは顫へ上つた。

ドミトリは自分を支へるグリゴリイや、スメルヂヤコフを突き飛ばしながら、「あの女は此處に居るのだ。確かに此方へ來るのを見掛けた。女は何處に居る？　さア女を出せ」と吼鳴つた。

女が此家に居ると聞いた時、フヨドールは急に元氣附いた。

「なに、女が此家に居る」と叫びながら、よた〳〵ドミトリの後から隨いて廻る。ドミトリは此の有樣を見ると、「えい邪魔な」と言ひながら老人を蹴飛ばした。老人が倒れた上を幾度も足で踏み附けた。

「狂人！　お前は親父を殺すのか」とイヴンが叫んだ。

「當り前だい。今度死なきや、又來て殺して遣る」と、ドミトリは息も切れ〳〵に叫喚いたが、アリヨウシヤから、確かに女が此處へ來なつかつたと聞いて、やつと我

に復つたやうに、「それぢや、最う親父に金子のことは頼んで貰はなくとも可い。只カテリイナの許へ行つて呉れよ。屹度今日中に行つて呉れよ」と言ひながら、其部屋を驅け出して行つた。グルシエンカの許へ行くので有る。

後に兄弟は息が絶えたやうに成つて倒れて居る親父を寝間へ連れ込んで、下男に指圖しながら、それ〴〵手當をした。

「莫迦な、俺が止めなかつたら、彼奴は親父を殺す處だよ。こんな爺を殺すなア雑作ないからね」とイヴンが低い聲で囁いた。

「そんな事を仰有るもんでない」とアリョウシャが叫んだ。

「何故ない」とイヴンは恐ろしい顔をしながら續けた。「蝮が蝮を殺すのさ、恰度好いんだよ。」

アリョウシャは顔え上つた。が、兎に角親父も落着いて寝て居るやうなので、カテリイナの許へ出掛けることにした。彼は今や心の蝶番がばら〳〵に離れたやうな、哀れな心持がした、今朝カテリイナの許へ行かうとした時は、何だか行くのが可厭な氣

がしたが、不思議なことに、今はカテリイナに會つたら、何か父や兄を救ふ見當が附くやうな氣がして、勇み立つて入口の呼鈴を鳴らした。カテリイナの家でも彼を待つて居たと見え、直ぐに客室に通された。間もなくカテリイナが急ぎ足に遣つて來た。そして、兩手をアリョウシャに差出しながら、

「到頭貴方も來て下さいましたね。私は貴方にお目に懸れば、何も彼も解るやうな氣がして、本當に貴方を待つて居ましたよ。」

「私は――私は兄の使に參りました。」

から言つて、アリョウシャは、「再び貴方のお目に掛りません、御機嫌好く」といふ兄の言傳を傳へた。が、カテリイナはドミトリが亢奮してそんな事を言ふのだと言つて、眞面目に取らない。そしてドミトリが金子の事で心配して居ると聞いた時は、「他人に知られたら恥かしいとも思ふが可い、義理が惡いとも思ふが可い。併し許嫁の私に何うして隱立をするのだらう」と、大變口惜しがつた。が、アリョウシャからドミトリが例の女の許へ會ひに行つたと聞いた時は、急に神經質らしく笑ひ出した。

「いゝえ、あの人は迚もあの女と結婚出來ませんよ。あの人が結婚しやうと思つても、女の方で承知しない。あの女は好い人です。私はあの女と仲直りをしました。アリョウシヤさん、私は貴方に見せるものがありますよ。」

かう言つて、彼女は次の間へ手招ぎした。

「私は帷幄(カーテン)の後ろで呼んで頂くのをやつと待つて居ましたよ」と、砂糖のやうな甘い聲がして、一人の女が次の間から出て來た。誰でもない、それがグルシエンカ自身である。アリョウシヤは眼を睜つて、凝乎と女の顏を見詰めた。あの獸のやうに言はれる女がこれか、普通の美しい單純な女といふ外に變つた所はない。身丈はカテリイナより稍低かつた。カテリイナが亦圖拔けて高いのだ。併し豊かな髮といひ、眉といひ、灰色の綠の眼といひ、途中不圖群集の中で出會つても、永い間忘られないやうな顏であつた。特に其特長は身體の擧動(こなし)の柔らか味と、色氣の有ることと、猫の樣に音のしないことで有る。非常に美しい女では有つたが、其の美しさは三十歳迄は保つまい。三十に成る前に額や眼の周りに皺が寄つて、顏色も粗く成る。つまり瞬間の美、飛ぶ

やうな美しさなのだ。

「アリョウシヤさん」と、カテリイナは言出した。「私どもは始めて會ひました。私が會ひたいと言つて遣つたら、先方から直ぐに來て下さいました。此の方は何も彼も話して下すつて、私は漸つと安心が出來ました。」

「貴方は私のやうな者を輕蔑もなさらないで、有難う御座いました」と、グルシエンカは矢張甘へたやうな聲で言つた。

「貴方を輕蔑する？　そんな事が出來ますものか。貴方は天使だ。私は最う一度貴方の下唇に接吻したい。此の方はね、矢張婚約の男の爲に苦勞爲すつたのですよ。其男は此の方を捨てゝ、他の女と結婚したのですが、今では後悔して、妻も亡く成つたので、近々歸つて來るのださうです。左樣すれば、此の方も幸福に成るのですよ。世間では、此の方ばかりを惡い樣に言ひますが、事情を伺つて見れば無理もない。さア御覽なさい、私は此の方に接吻しますよ。」

かう言つて、カテリイナは三たびグルシエンカの手に接吻した。アリョウシヤはそ

れを見ながら、何だか故とらしい、餘りに歡びが過ぎるやうな氣がして、一種の不安を感じた。

「そんな事をして下すつては、私は顏が赫くなりますよ。私は好けない女です」と、グルシエンカは顏を赫らめながら言つた。「私は戯談にドミトリを迷はしたのですよ。」

「でも、貴方はドミトリを救つて下さるのでせう。貴方は私に左樣お約束したのですよ。」

「そりや約束したかも知れません。併し私の心は變るのです。そら、私は斯んなに好けない女でせう。ねえ、私は最う一度ドミトリを迷はせますよ。實際、私はあの人を好いたのでした。ほんの一時間ばかり好いたのでした。」

「併し、前に仰有つた御言葉とは違ひますね。私もそんな事とは知らなかつた。」

「えゝ、私は好けない女ですよ。最う解つたでせう。何卒貴方のお手を貸して下さいな。貴方に三度接吻して頂いた代りにするには、妾は百遍も接吻しなければ成りませんね。」

かう言ひながら、グルシエンカは相手の手を取上げた。カテリイナは其儘に手を取られて居た。で、グルシエンカは其手を唇の傍へ持つて行つたが、急にそれを唇から離して、

「ねえ貴方、私は寧そ貴方の手を接吻せずに止めましやうか。」

「御隨意に。でも、如何したのです」と、カテリイナは吃驚して訊いた。

「あのね、貴方だけ私の手に接吻して、私は貴方の手に接吻しなかつたといふことを永く記憶(おぼ)えて被坐ーやる樣にしたいからですよ。」

「無禮者！」とカテリイナは眞赫に成つて、座から立上つた。

グルシエンカは悠々と立上つて、「今日の事を好くミチヤ(ドミトリ)に話して遣りませうね。あの人は屹度笑ふでせうよ。」

「往つて仕舞へ、賣女(ばいた)め！」

「え、私は賣女ですよ。が、貴方も暗がりに男の許(ところ)へ一度金子を借りに被往(いら)したさうですね。」

カテリイナは聲を上げて、相手に摑み懸らうとした。が、アリョウシャが仲を隔てて、漸く事無きを得た。彼は押出すやうにして、グルシエンカに其場を去らせた。後で色々カテリイナを慰めたが、カテリイナは、

「餘りだ、餘りだ！　あの人はあんな女に迄話したのですよ。能くも〳〵――貴方の兄さんは人非人ですね」と叫喚めきながら、正體もなく泣き沈んだ。

少時して、アリョウシャは其家を出た。後から一人の女中が追懸けて來て、「ホーラコフのお嬢さんから手紙が預つて有るのですよ。最う午后中置いて有つたのでした」と言ひながら一封の書を手渡した。

アリョウシャは其手紙を衣嚢へ突込んだまゝ、僧院へ歸る途を辿つた。夕暮で人顔も定かに見えなかつた。四辻へ出た時、

「金子を出すか、命を出すか」と言ひながら、途の上へ一人の男が躍り出した。

「あゝ、ミチヤか」とアリョウシャは吃驚して叫んだ。

「はゝゝゝ、俺はお前が來るのを先刻から待つて居たんだよ。で、カテリイナに會つ

て來て呉れたかい。」

「え、あの女にも、グルシエンカにも。」

ミチヤはグルシエンカがカテリイナの家に居たと聞いて吃驚した。が、二人の女の爭ひの始終を聞いて、「ねえ、お前はあの女が何か考へが有つて、グルシエンカの手を最初に接吻したと思ふかい。いや、彼女もグルシエンカに迷はされたのだよ。と云ふのは、グルシエンカにぢやない、彼女自身の空想に迷はされたのだよ。それがあの女の夢だよ。」

「でも、兄さんがあの事までグルシエンカに話したのは不可ないでせう。」

「成程！」とミチヤは、今漸つと其事に氣が附いたやうな聲を出した。「成程あの女に話すには話した。が、それはあの時だよ、モクロウで騒いだ晩だよ。俺は醉拂つて、ヂプシイの女は唄つて居た……俺は泣いて居た。俺は泣きながらカチヤ（カテリイナ）の肖像の前に跪いて祈つて居たよ。グルシエンカは其時の俺の心持を能く了解して居て呉れた筈だ。」

で、ミチヤはアリヨウシヤに別れて、五六間行つたが、急に振返つて、「おい、アリヨウシヤ！　俺は最う一つだけお前に白狀することが有るよ」と叫んだ。「此處を見て呉れ、此處を好く見て呉れ。此處に未だ一つ恐しい罪惡が藏つて有る。」ミチヤは此處にと言ひながら、本當に胸の咽喉の邊に罪惡が藏つて有るやうな、妙な手附で指示した。）此罪惡に較べては、今迄の罪は何でもない。而も俺はそれを止めやうと思へば、何時でも止められるんだよ。だが、俺は何うしても止めない。此儘暗黑の中へ、渦の底へ落ちて行くのだ。左樣なら。俺の爲に祈つて呉れるな。俺にはそんな値打がない。要らないよ。要らないよ。最う往け、左樣なら。」

彼は今度こそ到頭往つて仕舞つた。アリヨウシヤも僧院へ歸つた。長老ゾシマの庵室へ近づくと、彼の胸は急に動悸した。

「何故長老は私を世間へ出すと仰有るのだらう？　此處には平和が有る。彼處には暗黑と混亂ばかりだ。私は道に迷はずには居られない。」

庵室へ這入つたが、長老の病氣は段々重く成つたと聞いて、アリヨウシヤは愈々吃

驚した。何うも長老の御命は玆二日か三日しか保たないらしい。彼は明日も町へ出ると、人々に約束したが、其約束を破つても一日庵室に閉ぢ籠つて居やうと決心した。彼は床に就く前に跪いて熱心な祈禱を凝らした。が、其時不圖衣嚢の手紙に手が障つた。取出して讀んで見ると、可愛らしい戀の手紙である。其中に、「紙は顏を赧らめないと、皆が言ふけれど、それは本當ぢやない。私は今眞赫に成つて居ます。アリヨウシヤさん、私は貴方を愛する。子供の時から愛して居た。私は一生涯貴方を愛して居たい。何卒一生一緒に生きられるやうにして下さいな。私はいろんな事を考て見たけれど、只一つ貴方が此手紙を讀んで、何う思ふかといふことは考へられない。神の秘密は最う貴方の手に有る。何卒私を輕蔑して呉れるな。二伸、明日は屹度私の家へ來て下さい。屹度、屹度」なぞといふ文句が有つた。アリヨウシヤは吃驚しながら、それを讀んだ。二度讀み直した時、不意に我知　ず笑ひ出した。笑ふのは罪だと思ひながら、又微かに嬉し相に笑つた。

「神よ、すべての心穩やかならぬ人々を護らせ給へ」と祈禱しながら寢に就いた。

四

次の朝アリヨウシヤは夜の明ける前に起きた。長老ゾシマは大分病氣が好くなかつたが、それでも床を離れて、椅子に坐つた。顏は窶れて居たが、尙晴れやかに、殆ど嬉しさうに見えた。

「俺は長年の間人に敎へて來た、長年の間饒舌りつゞけて來たから、それが癖に成つて、こんなに弱く成つてからでも默つて居るのが却て苦しいのだよ」などゝ、周圍の人々に向つて戯談を言つた。

アリヨウシヤは後に成つて、此時長老が言つたことを想ひ出した、長老ははつきり物を言つて、聲も碇りして居たけれど、話には何處か連絡がなかつた。「お前達は相互に愛するやうになさい、そして神樣の子供達を愛せよ。吾々が僧院の壁の中に閉籠つて居るからとて、外に居る人達よりも一層神聖であるといふ道理はない。却て吾々の此處へ來たといふ事實が、世間の人達よりも一層惡い人間だと云ふことを告白して居

るのだ。自分が他の人よりも惡い人間だといふ事を自覺するばかりでなく、自分があらゆる人類の罪惡に對して責任が有るといふ事を自覺した時、始めて吾々が孤獨の生活をして居るといふ目的が達せられるのだ。此自覺が僧侶に取つても、又俗人に取つても、又何人に取つても生活の冠である、何となれば僧侶とて特種な人間ではない。あらゆる人間と同じだからで有る。」

長老ゾシマには同じ僧院中でも多くの敵が有つた。中にも斷食や無言の行を最も嚴格に修じて居る老僧などは、盛にゾシマを排斥した。ゾシマが女子供を集めて衆人の心を誑かすのだと、口では言はないけれど、心の中では妬んで居たらしい。其方にも可成多くの味方が有つた。

が、長老はそれ等の人々の事を忘れて居た。暫く談話をして居た後で、又寢間へ戻つて眼を閉ぢやうとしたが、其前にアリヨウシヤを喚びに遣つた。アリヨウシヤは直ぐに馳せ參じた、長老は重たい瞼を擧げながら、ぢつとアリヨウシヤを見詰めて居たが、急に「彼處の人達はお前を待つて居りはせぬかい」と訊いた。

アリョウシャは躊躇した。

「彼處の人達はお前を待つて居やせぬか、お前は今日行くと約束したのぢやないか。」

「はい、約束しました」

それぢや行つて遣るが可い。心配するな、俺は最後の言葉をお前に告げてからでなければ死にはせぬよ。俺はお前に最後の言葉を殘して置く。それがお前への遺品だ。さア安心して行つて來るが可い。」

アリョウシャは行くのが辛かつたけれど、即座に長老の言葉に從つた。此世の遺品に最後の言葉を自分に殘して置くと言はれたのが、心の底から嬉しかつた。

彼は先づ最初に父の家へ行つた。途中何うして父が昨日イヴンにも見られない樣にして來いなぞと内密で言つたものかと不思議に思つた、何かの間違ひだろうとも考へた。が、父の家に着いた時、マルファの婆さんに聞くと、イヴンは二時間前に出立したさうな。で、直ぐに父に會ひに行つた。フョドールは珈琲を飲んで居たが、アリョウシャを見ると、突然「何しに來た」と訊いた。「あゝ左樣だつたね、俺がお前に來て

呉れと言つて置いたね、併し何うでも可かつたんだよ。で、長老の加減は如何だい？」

「大變お惡う御座ります、今日にも亡く成りましやう。」

併し親父は相手の返辭を聞いて居なかつた。自分が何を訊ねたかも忘れて居た。「イヴンは行つて仕舞つたよ。彼奴は一生懸命にミチャの許嫁を連れ出さうとしたんだがね、彼奴は其爲めに此町へも來たんだよ。」

アリョウシャは默つて居た。

「彼奴は俺に金を呉れとは言はなかつたがね」と、フョドールは續けて言つた。「又俺も遣りはしないさ、俺は年とれば年とる程金が入るからね。女どもは金でも遣らねば年寄の傍へは來ないよ。なに、俺は死ぬ迄かういふ罪惡の生活を送るつもりだ。罪惡は甘いものだからね。皆がそれを罵る癖に罪惡の中に生きて居る奴さ。唯外の奴は皆内密でする。俺はそれを大つ平でするばかりさ。アリョウシャや、お前の方の極樂は俺の口に合はぬからね。なに、イヴンは俺にグルシエンカを手に入れさせないやうにして、ミチャとあの女とを結婚させやうとして居るんだよ。ミチャがあの女と結婚すり

や、あの金持の許嫁は自然イヴンのものに成るからね。が、俺も左樣はさせない。俺は昨日ミチヤを捕まへて監獄へ入れて遣らうかと思つたよ。」

「阿父さん、貴方は本當にそんな事を爲さるのですか。」

「いや、俺も考へ直して止めたよ」と言ひながら、一層低聲に成つて、「彼奴を監獄へ遣ればあの女が直ぐに訪ねて行くからね。併し彼奴が餘命幾許もない年寄の親を毆つたと聞いたら、俺の方に遣つて來るよ。何でもあの女のする事は逆樣だからね。」

かう言つて、彼はブランデーを出して來て飲んだ。

「うむ、俺は眞個人非人だよ、併しイヴンといふ奴は眞個解らないね。彼奴は此家の誰とも似て居ないよ。眞個、此家の人間ぢやないね。ミチヤは俺が甲蟲の樣に踏み潰して遣るさ。なに、お前はミチヤが所好だつたね。所好でも構はないさ。併しイヴンは何人も愛しないよ。昨日俺はミチヤに金子の一二千留布も呉れて遣つたら、五年位此町を去つて呉れはしないかと、お前に訊いて貰はうかと思つたんだがね。」

「えゝ、訊いて見ましやう」と、アリヨウシヤは呟いた「貴方が本當に金子を三千留布

遣つて下さるなら——」

「いや、最う止せ〳〵、俺は最うそんな事するのは止めだ。時にあのカテリイナといふ女は本當に彼奴と結婚するつもりで居るのかい。」

「何んな事が有つても彼の女は、兄さんを捨てやうとはしないでせう。」

「何うして彼奴はそんなに女から可愛がられるのかね。女の氣が解らないよ。が、俺も彼奴位の年であの時分だけの顏をして居たら、(俺も元は彼奴よりも美しかつたからね)あんな奴に負けて居ないさ。何うして彼奴にグリシエンカを渡して堪るものか。」

彼は腹立たしげに罵つた。「お前は最う歸つても可い、今日は最う用はないよ。」

アリヨウシヤは親父の手に接吻して、靜に其場を立ち去らうとした。

「又明日來て呉れよ」と、親父は後ろから呼び掛けた。

アリヨウシヤは父の家を出て、ホーラコフ夫人の家の方へ歩いて行つた。不意に途中で或出來事が起つた。或町の角を曲つた時、彼は九歳から十二歳位の學校子供の群が橋の傍で何やらがや〳〵喋舌つて居るのを見た。元來子供の所好なアリヨウシヤは

何氣なく其方に近づいて行つた。子供は手に手に石投を持つて居る。溝の向側には、最一人の子供が垣を脊にして立つて居た。其子も矢張手に石投を持つて居る。年の頃は十歳位で顏色蒼白く、何處か弱さうに見えた。彼は始終相手の五六人の子供を心配さうに見詰めて居た。何うも學校の歸途に喧嘩をしたものらしい。

アリョウシャは一人の子の傍に近寄つて、「君は左の手に石投を持つて居るね。僕等は元右の手に持つたものだよ、可笑しいぢやないか」と、眞面目くさつて言つた。何でもこんな子供らしいことを眞地目くさつて話すのが、子供に接近する第一の捷徑で有る。アリョウシャは求めずしてそれを心得て居た。

「此子は左利きだよ」と、他の一人が言つた。

其瞬間、一つの石が飛んで來て、左利きの子の肩をかすつた。溝の向側の子が投げたものらしい。

「打ち返して遣れ、おい、打ち返して遣れよ」と、皆が叫んだ。が、左利きの子は左樣言はれるのを待たないで、直ぐ打ち返した。併し向側の子供には當らなかつた。其

子は衣囊に一杯小石を入れて居たが、又群を目蒐けて一つの石を投げた。今度はアリョウシャの肩に適中した。

「あの子はお前さんを覗つて投げたんだよ。お前さんはカラマゾフの家の人だらう」と、皆笑ひながら叫んだ。そして、「おい、皆投げろよ」と、子供達は一勢に彼方の子供を目蒐けて石を投げた。

「お前さん方、何をするんだ。一人に六人でかゝるなんて卑怯でないか」と、アリョウシャは叫んだ。

「向うから先に投げたんだよ」と、一人の子供が叫んだ。「彼奴は畜生だ、先達ても小刀で同級の子の股を刺したんだよ。」

「でも、お前さん方、あの子をいぢめたんだらう。」

「そら、彼奴は又お前さんの脊中を目蒐けて石を投げた」と、子供達は皆叫んだ。アリョウシャはそれを不思議に思つた。で、兎に角、向側に渡つて、眞直に其子の傍に行からとした。

「氣をお附けよ。彼奴は又お前さんを刺すかも知れないよ」と、子供達は口々に叫んだ。

其子は目じろぎもせずアリョウシャが橋を渡つて來るのを待つて居た。近づいて見ると、其子は年よりも小さい弱さうな子供で、蒼い顏をして、大きな黑い眼を見開きながら、凝乎と復讐的に彼を見詰めて居た。其子はぼろ〳〵の外套を着て、足は跣足で有る。アリョウシャは其子の前二歩の所に止つて、物問ひたげに眺め遣つた。

「私は一人だ、向うは六人だ」と、子供は不意に言ひ出した。

「お前さんは私を知つて居て、故と私に石を投げたといふが、左樣かい」と、アリョウシャが訊いた。

子供は暗い顏をして默つて居た。

「私はお前を知らない、お前は私を知つて居るのか」と、アリョウシャは又訊いた。

「はふつて置いて呉れ」と、子供は苛々しながら叫んだ。其眼には復讐的な光が閃めいた。

「ちゃア、私は行くがね。あの子達はお前をいぢめても、私はお前をいぢめに來たんちやないよ。左樣なら」と、アリョウシャは踵を回した。

「地主の弱蟲め」と、子供は後から呼びかけた。が、アリョウシャは一寸振返つたまま行からとした。三歩とも行かない間に、其子の投げた大きな石が彼の脊中に當つた。

「お前さんは背後から人を打つんだね」と、アリョウシャは再び振返つて言つた。子供は又アリョウシャの顏を目蒐けて石を投げた。が、アリョウシャは手を擧げて受け止めたので、石は肘に當つた。

「お前は卑怯ぢやないか、私が何をしたかい」と、彼は叫んだ。子供は相手が飛びかかつて來るだらうと思つて、默つて、挑戰の態度で待つて居た。が、相手が左樣しないのを見ると、彼は狂氣の獸の樣に憤つて、アリョウシャに飛びかゝつた。そして、彼の小指に喰ひ附いた。アリョウシャは「あ、痛た！」と叫びながら、やつとの事で其手を放した。齒は骨まで徹つて、たら〳〵と血が流れた。アリョウシは半帛を取出して其傷を包んだ、殆ど一分間もそれにかゝつた。子供は其間立つて待つて居た。やがてアリョウシャは優しい目を上げて、「お前は、ひどく私の手を嚙んだゝ、最うと

れで可いだらう。さ、私が何をしたか、話してお呉れ。」

子供は吃驚して顏を見詰めた。

「私はお前に會つたのは始めてだけれど」と、アリョウシヤは同じ樣に朗らかな調子で續けた。「併し私は何かお前にしたに違ひない。お前も何もしないものを斯んなに傷つけることはなからうからね。さ、私が何をしたか、何惡いことをしたか、話してお呉れ。」

子供は返辭をしないで、わアと泣き出しながら逃げ出した。アリョウシヤは靜かに其後から町の方へ行つた、子供の泣き〳〵駈けて行くのが、長い間遠方から見えて居た。彼は閑の有り次第子供を搜し出して、其理由を訊いて見やうと決心した。

ホーラコフ夫人の家は此町でも目立つ建物で有つた。アリョウシヤが玄關を登つて行くと、夫人は直ぐ客間へ迎へて、「長老の御機嫌は？」と訊いた。

「師匠は今死にかゝつて居られます。」

「えゝ、それも聞きました。町中は大騒ぎですね。皆心配してますよ。が、今カテリ

ーナさんが此處へ來て被坐しやるが御存じですか。」

「左樣、それは都合が可い。私も彼處へ行くつもりでした。」

「えゝ、それも皆知つて居ますよ。昨日のことも皆聞きました。何といふ酷い女でせうね。時に貴方の兄さんも此處へ來て被坐しやいますよ。なに、あの狂人じみた兄さんぢやない、中の兄さんですよ。今カテリーナと二人で何やら話して居るんですがね。そりやア大變ですよ。いや、それよりも大變なのは、リザが貴方の姿を見ると、まるで氣違ひの樣に成りましてね。」

「そりやア皆嘘よ、阿母さんの言ふことなど皆嘘だわ」と、リザは隣の間から叫んだ。「リザはぼん〳〵怒つて病氣に成るやら、應接間では、兄さんとカテリーイとの間に諍ひが始まるやら、長老は病氣に成られるやら、本當に私は何うしたら可からう。私は一分間毎に目を閉ぐが、開いて見ると、別段何でも有りませんわね。」

「一寸御願ひですが私に布片を下さいませんか、指を負傷しましたから」と、アリョウシヤは言葉を挾んだ。

半帛は血でぐつしよりに成つて居た。夫人は聲を上げた。リザも次の間から飛び出して來た。水で冷やすやら、布片を捲くやら、母子は女中と一緒に大騒ぎをして呉れた。一寸母親の次の間へ行つた隙を見て、リザは男の負傷した理由を糺したが、

「貴方は本當に子供だわね。それから何卒、私が昨日上げた手紙を返して下さい。阿母さんが來ない間に早くして下さいよ。私は一晩中あんな冗談をしたのを後悔して居ました。」

「私は手紙を持つて居ません。」

「そりやア嘘よ、貴方は屹度左樣言ふだらうと思つて居たわ。屹度其の衣嚢に持つて居るんだね。」

が、いよ〳〵アリョウシヤがそれを持つて來なかつたと聞いて、「貴方はあれを見て笑つたでせうね」と訊く。

「いや、そんな事はない、私も近々僧院を出るから勉强を終つた曉には、本當に貴方の言ふ通りに成るだらうと思ひますよ。長老は私に結婚せよと仰有いました。」

「でも、私は跛足なんだもの、」

「だが、それ迄には屹度癒りますよ。」

そんな會話が有つた後、アリョウシヤはカテリーナに會ひに行かうとした。其時夫人も出て來て、

「そりやア應接室は喜劇ですよ、あの女は貴方の兄さんを愛して居るんです。それだのに一生懸命それを隠すやうにして、ドミトリを愛して居るやうな顔をしてるんですからね」と告げた。

アリョウシヤとホーラコフ夫人とが這入つて來た時、イヴンは別れを告げて去らうとして居た、アリョウシヤはこれ迄度々イヴンがカテリーナを愛して居るのだと勘附いたことは有つた。そればかりではない、ドミトリの手から女を奪ひ去らうとして居るのぢやないかとも思つた。ドミトリの方では、却てそれを好都合だと思つて居るらしい。で、女と別れて何うする積りか、グルシエンカと結婚する？　が、アリョウシヤは最つと惡いことに成りはせぬかと心配した。

アリヨウシヤを見てカテリイナは、「一寸待つて下さい」とイヴンを止めた。「貴方がたは私が此世に持つて居る友達の總てですよ。アリヨウシヤは昨日のあの見苦しい事件の目擊者です。イヴンはそれを見ない、見たら何と仰有るだらう。けれども、私は今日あの樣な事件が起つたとしても、昨日のやうに振舞ふことしか出來ない。私は未だあの人を愛して居るか何うか知らない。縱しや愛して居るとしても、今あの人を氣の毒とは思はない、寧ろあの人を憎むのです。」

彼女の聲は震えた、涙は睫毛の中に光つた。

「私はやつと決心した。イヴンは其の決心を讃めて呉れました、ねえイヴンさん、左樣でしたね。」

「左樣です」と、イヴンは低い聲で言つた。

「ですが、私は最一度アリヨウシヤの意見が伺ひたい、私はねえ」と、カテリイナは自分の熱い手の中にアリヨウシヤの冷たい手を取りながら、「私は貴方の一言が私に平和を齎すだらうといふやうな氣がして居ますよ。貴方の外に私の運命を決して呉れるものはない。」

「貴方は何を訊いて被坐しやるのか、私には解らない」と、アリヨウシヤは顏を赫らめながら言つた。

「私は決心しました、縱令あの人があの畜生と一緒に成つたとしても、私は何んな事が有つてもあの人を捨てない。いえ〳〵、私はあの人達の後を跟けて、あの人達の邪魔をするやうなことはしない、私はひとり遠い〳〵町へ行く。けれども、あの人が一旦不幸に成つた時、何時でもあの人は私を終生の友として、姉妹として手賴ることが出來ませう。私は先方で反古にしても一旦誓つた約束は破らない。私の一生はあの人の犧牲に成るのです、これが私の決心ですよ。」

彼女は息も途絕え勝ちで有つた。恐らく彼女は最つと平氣で、威嚴を保つて、此の考へを述べたかつたに違ひない。併し彼女の言葉は餘りに急いで、又餘りに生硬で有つた。

「併しそれは一瞬間の事でせう」と、ホーラコフ夫人が言つた。

「左樣、此の決心は昨日の侮辱に會つた影響には違ひない。そして瞬間的のものでも有らう。併しカテリイナさんの性格としては、其瞬間が一生の間續きませう」と、イヴンが傍から言つた。

「アリヨウシヤさん、貴方のお考へを言つて下さい」と言ひながら、カテリイナはわつと泣き出した。「いえ〳〵、何でもないのですよ。貴方がたのやうなお友達が傍に居て下さるから、私も心丈夫です。貴方がたは私を見捨てゝは下さらないでせうね。」

「處が、殘念な事には、私は明日莫斯科へ參ります。恐らくは當分歸らないでせう、私も殘念ですが止むを得ません」と、イヴンが不意に言ひ出した。

「明日？　莫斯科へ？」と言ひながら、彼女の顏は引釣るやうに見えた。「まア好いこと」と、彼女の聲は急に又變つた。「いえ、貴方にお別れするのが嬉しいといふ譯では有りません。彼方に居る姉や叔母に此方の事情を傳へて頂くことが出來るので嬉しいのです」と言譯をしながら、いそ〳〵と立つて手紙を書きにかゝつた。

「私には解らない、何うも信じられない」と、アリヨウシヤは苦しさうに言つた。「貴

方は何うも舞臺で芝居をして……或役に紛して被坐しやるやうで御座いますね。」

「舞臺で？　何を仰有るのです」と、カテリイナは眞赫に成つて眉を顰めながら言つた。「貴方は何を仰有るのか私には解らない。」

「私にも解らない」と、アリヨウシヤは途切れ〳〵の震え聲で續けた。「私には何と言つて可いか解らない。併し貴方は恐らくドミトリを愛して被坐しやるのではない、始めから一度も愛した事はないのでせう。ドミトリの方でも左樣です。只、貴方を尊敬して居る。あゝ、私は何と言つて可いか解らない。併し誰も此處で眞實の事を言はないから、誰か一人は眞實の事を言はなければ成らぬと思つて言ふのです。」

「それが眞實ですつて」と、カテリイナは叫んだ。

「貴方に言ひます」と、アリヨウシヤは屋根の頂上から飛び降りるやうな聲で言つた。「ドミトリを喚んでらつしやい、彼を此處へ連れて來て、貴方の手を取り又イヴンの手を取つて、二人の手を繫がせて下さい。」

「アリョウシヤ、お前は間違つて居るよ」と、イヅンは平氣な顔をして言つた。「此人は私を愛して居るのではない、矢張ドミトリを愛して居るのだ。ドミトリが侮辱すればする程、此人は彼を愛するのです。貴方はドミトリがあゝいふ人間だから愛するのです、貴方を侮辱するから愛するのです。貴方は絶えず自分の烈婦らしい貞操を考へて、あの男の不信を責めて居なければ成らない。私もこんな事をいふ必要はない、默つて何にも言はずに此處を去つて、永久に歸つて來ない方が私としては可いのだ。が、私は何も彼も言つて仕舞つた、左樣なら、カテリイナさん」と、强ひて作り笑ひをしながら部屋を出て行つた。

カテリイナは不意に次の間へ行つて、百留布の紙幣を二枚持つて出て來た。

「アリョウシヤ、私は貴方にお願ひが有りますがね。一週間前ドミトリは　變惡い事を致しました。それは外でもない、貴方のお父さんが內密事に使つて居られる一人の退職大尉を中央旅館で捕まへて、大勢の前で蹴つたり蹈んだり、揚句の果に鬚を持つて引摺り廻したさうです。何でも其大尉の子供が見て居て、泣いて謝罪つたさうだけれど、皆衆が笑つて構ひ附けなかつたさうです。其大尉の名はスネギリョフと言つて、家には病人の妻君や子供も有つて、大變困つておいでだと云ふこと、何卒貴方一つ私の使に成つて行つて下さいな。ドミトリからではない、ドミトリの許嫁の女からだと左樣言つて受取るやうに勸めて下さい。私が自分で行くとこだけれど、かういふ事には貴方の方が良いと思ふからお願ひします。あゝ私は疲れた、左樣なら。」

から言つて、彼女は次の間へ這入つて仕舞つた。アリョウシヤは何とか言ひたいと思つたが、物を言ふ暇もなかつた。彼は自分が相手の心持を傷けたやうな氣がして、詫びがしたかつた。けれどもホーラコフ夫人は、それを宥めて、

「女の涙なぞ信用するものでない。こんな場合に私は何時でも女の味方ではない、男の味方だ。それよりも早くカテリイナさんの使命を果してお上げなさい」と勸めた。

アリョウシヤは氣を取直して出て行つた。途中彼は兄弟の仲を直さうとしてあんな事を言ひ出したものゝ、却て反對の結果を齎したので、つく〴〵自分が惡いやうな氣がした。退職大尉の住んで居る街の近くへ來たが、近所にドミトリの下宿があるのを

想ひ出した。で、大抵留守だらうと思ひながら立ち寄つた。果して留守であつた。

彼はカテリイナの使を引受けた時、特に一つだけ彼の興味を惹いたものが有つた。彼女が泣きながら阿父さんの詫びをしたといふ子供の事を話した時、屹度それは自分の指を嚙んだ生徒に違ひないと思つた。何といふ理由はないけれど、確かにそれに違ひないと信じた。で、或汚ならしい街へ來て、やつと尋ねる家を搜し出した。ほとほとと戸を敲いた時、「誰だ？」と、家の中から怒つたやうな大きな聲がした。

アリヨウシヤは戸を開けて閾を跨いた。家の中は百姓家も同然に汚ならしかつた。上品な一人の女が左手の寢臺の側に腰かけて居た。痩せて顏色が惡るく、一と眼で病人と知れた。其側に赤ちやけた薄い髮の活潑さうな娘が居た。最一人顏色のわるい跛足の娘が居た。

「坊さんか物乞ひに御座つた。こんな所へ來ても仕方が有りませんよ」と、隅の方の娘が呶鳴つた。

「そんな事を言ふな」と、主人はアリヨウシヤの方へ向いて、「お前樣、何用でおいで

なすつた」と訊いた。彼の顏には恐ろしく傲慢なところが有つた。と同時に、不思議な事には何かきよと〳〵恐れて居るらしかつた。

「私はアレキセイ・カラマゾフです」と、アリヨウシヤは答へた。

「それは解つてます」と、主人は前から知つてるやうに言つた。「私はスネギリヨフ大尉です。」

「私は一寸用事が有つて來ましたが——」

「何んな用です」と、大尉は苛々しながら訊いた。

「貴方は私の兄のドミトリと會はれたさうだが」と、アリヨウシヤは下手な口振りで言ひ出した。

「あゝ、麻の籠ですか」と、大尉は突然アリヨウシヤの所へ詰め寄せた。

「此人は僕のことを言ひ告げに來たんですよ」と、アリヨウシヤには聞き覺えの有る聲が幕の後ろから叫んだ。「僕は今此人の指を嚙んで來たんだよ。」

幕が引かれた。アリヨウシヤは川の緣で見た子供が外套に包まつて寢て居るのを見

た。眼も充血して、明らかに病氣らしい。彼は自宅だといふので、恐れ一樣もなくアリョウシャを見遣つた。

「なに、此子が貴方の指を嚙んだと？」

「左樣です。此子は他の子供達と石を投げ合つて居た。先方は六人、此方は一人だ。私は此子の側へ行つた。此子は突然私に石を投げた。それから私に飛び掛つて來て指を嚙んだ、私にも理由は解らない。」

「私は唯今此奴を毆つて遣ります」と、大尉は椅子から飛び上つた。

「私は決して不平を述べに來たのではない、それに此子は病氣ぢや有りませんか。」

「貴方は私が此子を打つと思つたのですか、貴方の滿足の爲めに此子を打つ——そんな事をさせたいのですか」と、大尉はアリョウシャに飛び掛つてでも來るやうに詰め寄せた。「お氣の毒だが、そんな事はしませんよ、此子を打つ程なら、貴方のお心を安める爲めに、何卒私の指を四本ながらちよん切つて下さい。それで可いでせう？貴方は五本目の指まで切れと言ふんですか。」

大尉は殆んど怒つて居るやうに見えた。

「いや、好く解りました」と、アリョウシャは優しく言つた。「此子は好い子です。阿父さんを愛すればこそ、阿父さんを虐待した敵の兄弟に飛び掛つて來たのだ。處で、私の兄弟はあの時の事を後悔して、貴方に謝罪つて呉れと言ふのですよ。」

「他人の鬚を引拔いて置いて、後で謝罪れば濟むと思つて居るのですか。」

「いや左樣でない、貴方の言はれることなら何でもすると言つて居るのです。」

「ぢや、公衆の前で、私を毆つたあの料理屋ででも、私の前に跪いて詫びをしやうと言ふのですか。」

「左樣です、喜んで跪きませう。」

それを聞くと、大尉の心は全然解けて、涙さへ差含まれるやうな心持に成つた。そして、未だいろ〳〵話したい事が有るといふので、アリョウシャを誘つて戸外へ出た。

「あの時子供は學校の歸りでしたがね、私が鬚を持つて引摺られて居るのを見ると、相手の腕に縋つて泣きながら、何卒離して下さい、阿父さんを勘辨して遣つて下さい

と頼んだものですよ。私は其時の子供の顔が忘られない、一生忘られない。」

「いや」と、アリヨウシヤは叫んだ。「誓つて兄に謝罪らせます、同じ料理屋で跪いて謝罪らせます。それを爲ないやうなら私の兄ぢやない。」

「いや、貴方の兄さんもなか〳〵俠氣に富んだ人だ。私の鬚を離した時あの人は、貴方も軍人ぢやないか、俺も士官だ。若し介添を連れて來るなら何時でも決鬪に應じて遣ると言つたんですよ。立派な武士の魂ぢや有りませんか。併し私は其決鬪を申込まなかつた。私には家族が有る、私の腕一本で養つて行く家族が有る。私が若し死んだら、片輪にでも成つたら、彼等は如何しませう。」

大尉はアリヨウシヤと一緒に野中の細道を歩きながら、頭の變に成つた後妻たの、跛足の娘だの、弱い男の子だのと、慘めな一家の有樣を語つた。特に、男の子には親の愛と希望とを集めて居るらしい。

「私は實は使に來たのです」と、アリヨウシヤは到頭言ひ出した。「私の兄は許嫁の娘を侮辱して居るのですがね、其人が貴方の話を聞いて、大層同情して、私に此の金子を

持つて使に行つて呉れと言ひ出した。これは私の兄が言つたのぢやない、許嫁の娘が言つたのですよ、貴方と同じ樣に兄から侮辱されて居る娘が言つたのですよ。何卒、姉妹が呉れたのだと思つて、此の金子を受けて遣つて下さい。私と其娘との外に誰も知つて居る者はない。四海は同胞です、貴方も此世が敵ばかりだと思はなかつたら、何卒この二百留布を取つて下さい。」

かう言つて、アリヨウシヤは虹の色をした百留布の紙幣を二枚差出した。此の金子は大尉に非常な感動を與へたらしい。こんな結果に成らうとは、彼は夢にも思はなかつた。他人から補助を受けやうなどゝは夢にも思つたことがない。彼は紙幣を受け取つたまゝ、少時物が言へなかつた。が、やがて全く新しい表情が彼の顏に現れた。

「これを私に？　こんなに澤山の金子を——二百留布も！　私は此の四年といふものこんな澤山な金子を見た事がない。其の方はこんな金子を私に下さつて、而も姉妹からだと思へと仰有るのですか。……併し貴方はこんな金子を私に押附けて置いて、心の中で輕蔑して居られるのではないでせうか。」

「そんな事は斷じてない、神に誓つてない。」

「ねえ、聽いて下さい。此の二百留布が今の私に取つては何れだけに當ると思つて下さいますか」と、哀れな大尉は皆言ひ盡す事を許されないかと心配でもするやうに、早口に語り出した。「醫者は妻に鑛泉を飲めと言つて呉れました、併し二た瓶は飲まなくちゃ成らんでせう、私にはそれが出來ない。又醫者は溫泉へ連れて行けと言ひました、そんな事は到底出來ない。私どもは犬に呉れるやうなものを喰べて居る、其結果子供まで營養不良に成つて居る。あゝ、それが皆救はれるのだ」と、こんな話を有頂天に成つて長々と續けた。アリヨウシヤも其の金子が相手に左樣した幸福を齎したのを喜んだ。そして、其の幸福を受けて呉れたのを喜んだ。

「アレキセイさん、私は……貴方に」と、大尉は不意に絶望的な決心の色を面に表して、凝乎と相手の顏を見詰めながら言ひ出した。ぎり〳〵と齒ぎしりをして居るらしい。「私は……貴方に一寸した手品をお眼に掛けるが宜しいでせうか。」

「何んな手品です?」

「面白い手品です」と、大尉は咳いた。唇は歪んで、左の眼は飛び出すやうにアリヨウシヤを睨めて居た。「御覽なさい」と、大尉は二枚の紙幣を指先に摘んで「くる〳〵と掌の中に捲めながら地面へ打ち附けて、其上から足で蹈み躙つた。「解りましたか」と、彼は再び叫んだ。「これを御覽なさい。」

彼は又憤怒に驅られたやうに、其紙幣を蹈み躙つた。

「貴方を使に寄越した方に言つて下さい、麻の帷は未だ名譽迄は賣らないとね」と、彼は腕を空中に振廻しながら言つた。そして、アリヨウシヤから逃げるやうに駈け出したが、五六歩行くと再び振り返つた。彼の顏は涙で一杯滿れて居た。

「そんな金子を取つて、私は何うして子供に顏が會はされる?」

彼は再び振向かずに行つて仕舞つた。アリヨウシヤは何とも言へない物悲しい心持を味ひながら、小山の上に大尉の姿が消えるまで見送つて居た。やがて砂の上に落ち散つた紙幣を拾つて衣嚢へ突っ込みながら、其旨をカテリイナへ報告するとて戻つて行つた。

五

アリヨウシヤは又最初にホーラコフ夫人と出會つた。彼女は全く顫動して居た。其話に依ると、カテリイナはヒステリイ性發作の結果氣を失つた。醫者を呼びに遣つたが、未だ來ない。二人の叔母さんが駈け附けた處ださうな。

「それは大變ですよ、眞個大變ですよ」と、彼女は駈け出して行つた。

アリヨウシヤはそれからリザの部屋へ行つた。そして、二百留布の金子を屆けに行つた顛末を話した。「あの男は眞面目な、善良な人です。それが一等困るのです。私が金子を渡さうとすると、あの人は心から喜びました。見て居ても氣の毒な位喜びました。が、心の中を曝け出した時は、あんまり内輪の事まで喋舌つたのが恥しいやうな氣がしたらしい。それだからあの人は急に私を憎み出したのです。零落れたものに取つては、他人から恩惠者として臨まれる程苦しいことはないと聞きました。併しこれが一番好いのです。」

「何故一番好いのです」と、リザは直ぐ訊き返した。

「若しあの時あの人が金子を取つたら、家へ歸つて、屹度後悔したでせう。そして、散々思ひ惱んだ揚句、明日の朝は屹度其の金子を持つて來て、今投げ返したと同じ樣に投げ返したに相違ない。併しあの人は今や高慢な心持で歸つて行きました。が、夜に成つたら思ひ返すでせう、明日の朝に成つたら一層馬鹿な事をしたやうな氣がするに違ひない。そこへ私が此の金子を持つて行つたら如何です、あの人は大抵受取るでせう」と、アリヨウシヤは愉快に堪へられないやうな面持で語つた。

「えゝ、屹度受取るでせう」と、リザも手を打つて喜んだ。

それから二人は、夫婦に成つてから一緒にする慈善事業の空想など語つて居たが、アリヨウシヤはやがて夫人に挨拶をしないで、こつそり歸らうとした。が、戸を開けると、其處にホーラコフ夫人が立つて居た。二人の談話を何も彼も立ち聞きしたものらしい。夫人は飽迄リザからアリヨウシヤに送つた手紙を見せて呉れと迫つた。

「私はあの子の母親ですよ。私に手渡しするのが可厭なら、そこに持つて居てでも好

いから見せて下さいな。」

「いえ、見せますまい。縱令リザが許しても私は見せたく有りません、左樣なら」と言ひながら、階段を駈け降りるやうにして街へ出た。

彼は一刻も空費し難いやうな氣がした。ホーラコフ夫人と話をして居る間も、如何かして一刻も早くドミトリを搜し出さねば成らぬと思つた。最う三時に近かつた。彼は斯うして居る間も、一つの避け難い大破綻が起るやうな氣がした。「たとへ師の長老が私の居ない間に死なれたとしても、私はドミトリを搜し出さずには置くまい。若し此儘歸つたら私は一生、救へば救はれた不幸を打捨てゝ置いたといふ後悔を感ぜずには居られまい。」

アリヨウシヤは再び昨日ドミトリに會つた庭園の四阿へ忍び込んで行かうとした。今日もドミトリはグルシエンカを待ち伏せして、其處に隱れて居るに違ひない。彼は垣根を匐ひ上つた。が、行つて見ると、四阿には誰も居なかつた。アリヨウシヤは腰掛けて待つことにした。

不意に、樹の茂みの後ろから好い歌の聲が聞えて來た。

止むに止まれぬ力でわしは
お前の方へ引き寄せられる
神よ二人を、二人の緣を
結ばせ給へ神樣よ

歌の聲は止んだ。やがて女の聲として、

「貴方は永く會ひに來て呉れなかつたのねえ、私達を馬鹿にしてるのぢや有りませんか。」

「いや、そんな事はない」と、重々しい男の聲がした。

「何うもあの聲はスメルヂヤコフに違ひない」と、アリヨウシヤは考へた。「女も近頃莫斯科から歸つたといふ此家の娘だらう。」

「貴方は悧巧だわねえ～本當に貴方は何でも好く知つてらつしやるよ」と、女の聲はいよ～甘えるやうで有つた。

「俺は子供の時からこんな風に育てられさへしなければ、最つと悧巧に成つて居た筈なのだ。俺を乞食の子だの父なし子だのといふ奴が有つらた、誰でも決闘で殺して遣る！　莫斯科でも散々苛められたよ、グリゴリイの爺奴が喋舌つたからだ。俺は世の中の奴が皆んな嫌ひだ、露西亞を憎む！」

「でも貴方は外國人のやうだわね。眞個外國の紳士のやうに見えるのよ。」

其時、アリヨウシヤは不意に嚔をした。二人は默つて仕舞つた。アリヨウシヤは立ち上つて二人の側へ出て行つた。

「私の兄のドミトリは直ぐ又此處へ來るかね」と、出來るだけ平氣で訊いた。

スメルヂヤコフは靜かに立ち上つた。「私はドミトリのことなぞ存じませんよ、あの人の番人では有りませんからね。」

「私は只お前が知つて居るか何うか訊いたんだよ。」

「あの人のことなぞ何も知りません、又知らうとも思はない。」

「併し私は兄さんから聞いたが、お前は此家の出入りを見張つて居て、グルシエンカが來たら早速知らせに行く筈に成つて居ると云ふぢやないか。」

スメルヂヤコフは由ありげに、ぢろりとアリヨウシヤを見返した。「それはね、あの人が私を殺すと言つて脅かすのですからね。」

「なに、殺すんだつて？」

「あの人のことだから、何だつて遣り兼ねませんや。若しグルシエンカが此處を通つて、一晩此家の中で過したら、一番先きに酷い目に會ふのは私だと、あの人が言ふんですよ。」

スメルヂヤコフは、なほ續いて、自分は何にも知らないけれど、今日イヴンとドミトリとが料理屋で一緒に飯を喰ふことに成つて居る。今朝自分は其の使ひに行つた。が、それも自分が話したとはくれ〴〵も言つて呉れるなと頼んだ。

「なに、イヴンが今日ドミトリを料理屋へ招待したと云ふのか。」

「左樣です。」

「通りの中央料理店かい。何うも有難う。私は直ぐに其處へ行つて見るのだ」と言ひ

ながら、アリョウシャは駈け出して行つた。僧服を着て料理屋へ這入るといふことが何となく躊らはれた。が、此際仕方がない。料理屋の前まで行くと、窓の戸を開けてイヴンが首を出した。

「アリョウヤぢやアないか、此處へ這入つて來ないか。私はお前に是非話したいことが有るんだがね。」

「ですが、此服では何うも……」

「なに、私は別室に居るんだよ。待つといで、私が階段まで迎ひに行くから。」

イヴンとアリョウシャは食卓に對して坐つた。アリョウシャは、イヴンが何時も料理屋なぞへは來ない、寧ろそれを嫌つて居るのを知つて居た。して見ると、只彼はドミトリに會ふ約束が有つて來たものらしい。が、ドミトリは未だ其處に居なかつた。

「何を取らうかね、肉汁(スープ)が可いか、お茶が可いか、お前は幼ない時ジャムが所好だつたよ。」

「そんな事記臆(おぼ)えておいでですか。」

「記臆(おぼ)えて居るとも。あの頃お前は十一で私は十五に成つて居た。十五と十一と違ふと、最う一緒にも遊ばない。あの頃私はお前が所好で有つたか何うかも知らない。それから後も私はお前を知つたとは言はれない。が、明日(あした)私は此處(ここ)を立つのだ。立つ前に一度會ひたいと思つて居た。」

「そんなに會ひたいと思つて下さいましたか。」

「左樣だ、會つて一度にお前を知りたいと思つた。又私もお前に知つて貰ひたいと思つた。此の三ケ月といふもの、お前の眼がぢろ〳〵私を見張つて居るのが煩さかつた。が、近頃漸やくお前が解つて來た。想ふに、此の小さい人は碇かりした地盤の上に立つて居るんだね。私は笑つて言ふが大眞面目だよ。お前は碇かり立つて居る、左樣ぢやないか。私は何の上でも可いから、其樣に碇かり立つて居る人間が所好だよ、美しいんだよ。」

「私は貴方を謎だと思つて居ました。が、今朝に成つて漸つと少し解つたやうな氣がしました。」

「何う解つたんだい。」

「怒つちゃ不可ませんよ」と、アリョウシャは笑つた。「私は貴方が先程ホーラコフ夫人の家から飛び出された時、貴方にも矢張り生な處がある、私と同じ様に子供だと思ひましたよ。」

「左様か、それぢや偶然一致した」と、イヴンは叫んだ。「私もつく〴〵自分が生な子供だと思つて居た處だ。私は縱令愛する女に信仰を失つても、幻滅の恐怖に打たれても、飽迄生きやうと思つて居る。盃の底を乾す迄は、それに背を向けまいと思つて居る。私は何度も考へた、此の氣違ひ染みた、私の生活に對する渇望を克服するやうな絶望が此世に有るだらうかと。何も彼も忘れて生活に憧憬するといふのがカラマゾフ家の特徴である。お前も屹度それを持つて居る筈だ。それが何うして卑しむべきものだらうか。私は蒼空を愛する、人間を愛する、時としては何故とも知らないで人間を愛するのだ。それは知識や論理の問題ではない、人間の内部をもつて愛するのだ、胃の腑で愛するのだ。お前に私の言ふことが少しでも解るかい。」

「えゝ、解りますとも、私は貴方がそんなに生活に　する思慕を持つて居て下さつたのを喜びます」と、アリョウシャは叫んだ。「人間は世界の何者よりも生活を愛しなければ成らぬ。私は左様思ひますよ。」

「生活の意識よりもより多く生活を愛せよと云ふのか。」

「私は實に愉快だ」と、アリョウシャは叫んだ。「長老は私に僧院から出よと仰有つたのですよ。」

「左様だつてね。私も三十に成つたら、其の盃に脊を向けやうと思つて居る。阿父さんは七十に成つても盃を離さない積りで居るらしいんだね。あの人も碇かりした巖の上に立つて居る、肉慾といふ巖の上に立つて居る。」

「時に兄さん、貴方は本當に明日お立ちに成るのですか。」

「左様だ。」

「あとでドミトリや阿父さんが如何成るでせうね」と、アリョウシャは心配さうに訊ねた。

「お前は何時もそんな事ばかり心配して居るんだね。私は知らないよ、私は何もドミトリの番人ぢやないからね」と、イヴンは苛々しながら言ひ切つた。そして、急に苦いやうな微笑を浮べた。「これはカインが殺された兄弟について答へた返辭と同じだね、お前は今左樣思つたのだらう。併し私は何時迄も此處に番人と成つて居る譯には行かない。お前は私がドミトリを妬んで此處を去るのだとお思ひかい。馬鹿な。私は私の用事が濟んだから去るんだよ。」

「カテリイナの許で用事が濟んだのでせう？」

「左樣さ、兎に角私は最早や解放されたのだ。私は自由の身に成つた。アリヨウシヤや、私が今何んな輕い心持に成つて居るか、お前には解るかい。私は殆んど六ケ月の間も捕虜に成つて居た。それがこんなに容易く解放されやうとは昨日までも解らなかつたよ。」

「貴方は貴方の戀のことを言つてらつしやるのですか。」

「さア、戀といふなら言つても可い、私はあの若い婦人を戀した。私はあの女の爲めに心を惱ませた、あの女は私を惱ませた。が、それが急に過去の夢と成つた。」

「恐らくそれは戀といふものぢやないでせうね。」

「アリヨウシヤ」と、イヴンは笑つた。「お前は戀のことなぞ議論するなよ。お前には似合はないからね。あの女は私があの女を愛してるのを知つて居た、あの女も又私を愛して居た、ドミトリぢやアない。あの女のドミトリに對する感情は、只好んで自ら苦しむに過ぎないのだよ。併しあの女がドミトリを思はないで私を愛して居るのだと、自分で承知する迄には二十年もかゝるだらうよ。それが可いのさ、私は只此土地を去るのだよ。」

アリヨウシヤは、カリリイナがヒステリイ性の發作に陷ちて、氣を失つたと告げた。

「併しヒステリイで死んだ女はないからね。まア私が行くにも及ばないさ。」

「併し貴方は今朝あの方が些とも貴方を思つて居ないと仰有つたでせう？」

「それは故意と言つたのさ。アリヨウシヤ、一緒に三鞭を飲まうぢやないか、ちつと浮き立つたら如何だい？」

「兄さん、貴方は本當に明日の朝お立ちに成るのですか。」

「朝？　朝とは言やしないさ。何故又お前はそんなに私が立つことを氣に掛けるのだい？　未だ時間は澤山有るさ、永遠のやうに有るさ。」

永遠といふ言葉から、二人は又永遠の問題について語り出した。他の國の人々は知らない、露西亞の青年は何を措いても先づ最初に永遠の問題を解決しやうとするもので有る。獨創的な露西亞の青年の多數は永遠の問題より外には何物をも語らない。

「で、何うだい、私は又神を信じて居るんだよ」と、イヴンは笑つた。「斯う言つたらお前は吃驚するだらうね。」

「えゝ、貴方が戯談を言つてらつしやるのでなけりや。」

「戯談だと？　昔の人も言つた通り、若し神といふものがなけりや、人間の方で神を造るよ。又、實際人間が神を造つた。不思議なのは、神秘なのは神樣が此世に有ると云ふことではない、神樣を必要とする人間の心だよ。が、私は最う人間が神を造つたか、神が人間を造つたかなぞといふ問題は考へないことにした。只想ふにだね、神が

有つて、實際神が此世界を造つたものだとすれば、神はユークリッドの幾何の方則に從つて造つたのだよ、人間の方則に從つて造つたのだよ。」

イヴンはこんな事を言つた後で、「お前も神の議論なぞ聞きたくは有るまい。併しお前の兄が何を手頼りにして生きて居るかといふことは知りたいだらう。それだから私はこんな話をしたんだよ」と結んだ。

「私は最う一つお前に告白しなければ成らぬ」と、イヴンは續けた。「人間といふものは遠方に居る人を愛することは出來るけれども、近くに居るものを愛することは出來ない。人を愛する爲めには、其人が隱れて居ることを必要とする。顏を出すや否や愛は消えて仕舞ふ。」

「師の長老も仰有いました、心の練れてない人は、顏を見ると往々愛することが出來ないものだと。併し世の中には基督のやうな愛も有りますよ。」

「私の見たところぢや、そんな愛は此世の中には無いよ。基督は神だつた。我々は神ぢやないからね。例へば、私が大いに苦しんで居るとせよ、私が何んなに苦しいか

は他人には解らない、他人は他人で、私ぢやないからね。更に甚だしいのは、人間は他人が苦しんで居るといふことを承知しないものだよ。最も饑餓といふやうな苦痛なら、たまに同情もされるがね。最つと高尚な苦痛、例へば、思想の爲めの苦痛といふやうなものを考へて御覽なさい。誰も私が思想の爲めに苦しんでると言つたとて承知しないよ。私の顏は其人が思想の爲めに苦しむやうな人間の顏として想像して居るものとは違ふからね。こんな譯で、乞食をするんだつて成るたけなら顏を見せないで强請つた方が効果が有るね。」

イヴンは又斯んな話をした。「人間は時々畜生の殘酷などといふことを言ふ。が、それは得手勝手で畜生を侮辱して居るものだね。畜生は決して人間の樣に殘酷なものではない、人間の樣に技巧的に殘酷ではない。虎は只嚙んだり引裂いたりする計りだ。人間の樣に同類を十字架へ釘附けにしたりなぞは、縱令出來てもしないよ。私は土耳古人が母親から赤ン坊を奪つて、空へ投り上げて、銃劍で受け止めるといふ話を聞いた。又、四つ五つの子供を拳銃で慊して、笑はせて、子供が拳銃の方へ手を差出して

摑まうとする時、ズトンと頭蓋骨を打ち碎くといふ話を聞いた。」

「兄さん、貴方は如何してそんな事を言ひ出したのです」と、アリヨウシヤは訊いた。

「私は此世に惡魔といふものがなけりや、人間がそれを造つた、自分の姿に似せてそれを造つたらうと思ふのだよ。」

「恰度人間が神樣を造つた樣に？」と、アリヨウシヤが言つた。

「お前は本當に言葉を引繰り反すことが旨いよ。が、私は又こんな話も聞いた。或る夫婦が子供を瑞西の山上の牧羊者に呉れて遣つた、牧羊者は只自分達の用に立てる爲めに子供を育てた。子供は野獸の樣に育つた。牧羊者は其子に何も敎へなかつた。其子は賣る爲めに肥らせられる豚の餌食を盜んで喰ふやうに成つた。これは外國の話だが、露西亞の作家ネクラゾフでも私はこんな話を讀んだ。如何にも露西亞人らしい話だ。一疋の仔馬が重い荷車を引かされた處、車の輪が泥へ喰ひ込んだまゝ動かない。百姓は仔馬を打つた、野蠻に打つた。終ひには殘酷の醉ひ心地に、自分が何を爲て居るかも忘れて打ちに打つた。『弱虫め、動かないかい、死んでも可いから動かないかい』

と呶鳴つて、自分もおい〳〵泣きながら鞭で打ち續けた。馬は身體中慄えて喘ぎながら彼方へよろ〳〵此方へよろ〳〵した。又私はこんな話を聞いた。現在の生みの父や母に依つて憎まれた女の子の話だがね。親達は世の中に名も聞えた、教育のある立派な人で有る。而も自分の子なるが故に其子を憎むのだ。兩親は身體中黑にじに成る程其子を打つたり蹴つたりした。泣き聲が喧ましいと言つては、母親が其子の糞を口の中へ押し込んだりした。併しアリヨウシヤ、お前はこんな話を聞いて苦しんで居るやうだね。最う止さうかね。」

「いえ、好う御座んす。私も苦しみ度いのですからね」と、アリヨウシヤは呟いた。

「お前に言つて置くがね、此世は矛盾だらけだよ。矛盾が必要なんだからね。矛盾なしには此世の中に何一つ起るまいよ。あゝ私には解らない。何にも解らない。私は最う永い以前から何にも理解しないことに極めて仕舞つた。何か理解しやうとすれば、事實に不忠實に成るからね。私は飽く迄事實にこべり着かうと決心したのだ。」

「兄さん、貴方は私を試すのですか」と、アリヨウシヤは苦しげに叫んだ。「一體貴方

は何を言ふ積りなんですかね。」

「勿論、私は斯う言ふ積りなのさ、私はお前が所好だ。所好なお前を手離して、あの長老ゾシマのやうな處へ遣り度くないんだよ。」

彼は又苛々として語り續けた。「私は近頃一つの詩を書いたよ。いや、書いたといふ譯ぢやない、只想ひ附いたんだがね。一つそれを話して聞かせるが、聞いて呉れないかね。」

「えゝ、承りませう」と、アリヨウシヤは言つた。

「私の詩は『大審判官』と言ふのだよ。詰らないものだが聞いてお呉れよ。」

斯くてイヴンは所謂『大審判官』と題する詩の腹稿を語り始めた。其中には、「人類は昔から同じ信仰と同じ愛とをもつて彼の出現を待つて居る」といふやうな句も有つた。「群集の中に子供の時から盲目の老人が飛び出して、おゝ神よ、我が眼を癒せ、我汝を見む！」と叫ぶやうな句も有つた。「神よ、汝は昔言つた事に何物をも附け加へる權利はない」といふやうな句も有つた。「世の中には犯罪もない罪惡もない、只饑餓

が有るばかりだ。人々に糧を與へよ、然る後彼等に道德を問へ！」といふやうな句も有つた。「人間といふものは本來何物かを崇拜する必要が有るのだ。而も、是非の議論を超絶して打ち建てられたものを崇拜しやうと欲するのだ。甲は或る者を崇拜し乙は或る者を崇拜するだけでは堪へられない、皆が一緒に成つて崇拜し信仰することの出來る何物かを見出さうとするのだ。一番必要なのは、皆が一緒だといふことで有る。此の崇拜の共通にこべり着いて居るといふことが、有らゆる人間の、個人として有らゆる人間の、又、時が始まつて以來有らゆる人類の一番大きな不幸で有る」といふやうな句も有つた。

「其の詩のお終ひは何うです」と、アリヨウシヤは不意にイヴンを見返しながら訊いた。「今のがお終ひでしたか。」

「斯ういふ風に結末を附けやうと思つて居るのさ。審判官が話を止めた時、彼は少時囚人基督の返辭を待つて居た。囚人は始めから終ひまで熱心に聽いて居た。が、優しく相手の顏を見返したまゝ、返辭をしやうとは思はない。審判官の方では何とか彼に

言つて貰ひたかつた、何んな怖しい事でも可いから言つて貰ひたかつた。が、囚人は不意に審判官の側へ近附いて、默つて其額に接吻した。それが返辭なのだ。老人は顚へ上つた。彼は表の戸口へ行つて、其戸を開きながら囚人に言つた。『去れ、最早や二度と來て呉れるな、斷じて、斷じて來て呉れるな！』彼は相手が街の暗がりの中へ出て行くのを見送つた。囚人は行つて仕舞つた。」

「で、其老人は　」

「接吻は彼の心の中に燃えた、併し彼は何時迄も自分の思想にこべり着いて居た。」

「そして貴方も彼と一緒にでせう」と、アリヨウシヤは物悲しげに叫んだ。

イヴンは笑つた。「なに、そりや皆何でもないんだよ。そりや馬鹿な書生の寢言さ、何故お前はそんなものを眞面目に取るんだい。私は前にも言つた通り、三十に成る迄は何うしても生きるんだよ、三十に成つたら盃を地面(ちめん)へ打ち附ける！」

「何うして貴方に生きられるものか」と、アリヨウシヤは悲しげに叫んだ。「貴方のやうな頭で、貴方の樣に胸の中に地獄をもつて何うして生きられませう。貴方が此處を

去るのは、やがて貴方自から殺すことで有る。貴方には迚も耐へられない。」

「私には有らゆるものに耐へる力があるさ」と、イヴンは冷めたい笑ひを浮べながら言つた。

「何んな力です?」

「カラマゾフ一家の力さ、カラマゾフ一家の肉の力さ。」

「肉慾に墮ちて、それに依つて精神の息を塞めるといふのですか。」

「それにしても……だが、私も三十に成るまでは滅多な事は爲ないよ。」

「併し貴方のやうなお考へぢや、如何ですかね。」

「カラマゾフ家の生き方で生きるのさ。」

「有らゆる事が正しいといふお考へですか。」

イヴンは顏を顰めて、急に眞蒼に成つた。

「私は此の土地を去るにしても、お前だけは、お前の胸の中にだけは住めると思つたが、それも駄目かね」と、イヴンは急に感情深く言つた。「併し有らゆる事が正しいと

いふ公式は、私は捨てたくないね。それだからお前は私を捨てるかい。」

アリヨウシヤは立ち上つて、優しくイヴンの唇に接吻した。

「そりやア剽窃だよ」と、イヴンは非常に喜びながら言つた。「お前は私の詩の中から盜んだのぢやないか。けれども有難いね。アリヨウシヤ、さア最う歸らうよ。」

二人は立ち上つて、料理屋の入口まで出た。

「ねえ、アリヨウシヤ」と、イヴンは決心した聲音で言つた。「これから私が本當に立つ迄には、未だ一度位は會ふだらうがね、こんな話は二度と言ひ出して呉れるなよ。又ドミトリについても左樣だ。碇かり賴んだぞ。だか、其のお禮には私も一つお前に約束する。三十に成つて私が盃を地に打ち附けやうとする時には、何處に居ても、縱令亞米利加に居ても、最一度お前と話をしに來るよ。これは眞面目に約束するんだぜ。ぢやア、最うお前は死にかゝつて居る長老の側へ行つて遣るが可い、左樣なら。」

イヴンは急に道を轉じて、後をも見ずに駈け出した。それが昨日ドミトリがアリヨウシヤと別れた別れ方と非常に好く似て居た。此の似て居ることが矢の樣にアリヨウ

シヤの胸を貫いた。彼はうら悲しい心持で、イヴンの後姿を見守つて居た。が、彼も又急に踵をかへして、僧院の方へ殆んど走るやうにして行つた。

彼は其後、一時間前にはあれ程ドミトリを捜し出さねば置かぬと決心しながら、何うしてあゝ忘れて仕舞つたものだらうと、幾度(いくたび)も不思議に思つた。

アリヨウシヤと別れてから、イヴンは父の家へ戻りながら、段々心が陰欝に成つた。陰欝に成るのは不思議でない、只其原因が解らないのだ。此町へ來た目的を遂げないで、新たに知られざる未來へ這入つて行くのが怖ろしいのか。まさか左樣でも有るまい。父の家が可厭なのか。可厭には可厭だ。最後にあの閾を跨ぐのさへ可厭で耐らないが、まさかそれでも有るまい。アリヨウシヤと別れる爲めか、彼と取り交した會話の爲めか。成程アリヨウシヤのやうな人間の前で、自分を正當に表現することが出來なかつたのは、經驗の淺い、虚榮心のある若者に取つては苦痛に違ひない。が、まさかそれでも有るまい。彼は寧ろ考へまいとした。

到頭不機嫌の儘家に戻つた。が、家の庭から十五歩ばかり離れた處で、今迄心を苦

しめて居たものが不意に解つた。玄關の前のベンチの上に、給仕のスメルヂヤコフが夕涼を納れながら腰掛けて居た。一と眼此男を見る、今迄自分の心を苦しめたものはスメルヂヤコフだ、此の可厭な男だといふことが解つた。「こんな憐れな、つまらない男が、こんなに自分の心を惱ませるのか」と、イヴンは苛々しながら、自分でも驚いた。

近頃イヴンは人間といふものが非常に嫌ひに成つて居た。が、何ういふ譯かスメルヂヤコフには一種の興味を持つた。彼を獨創的だとまで考へた。そして、思想問題などについて語り合つた。が、最初此男が嫌ひに成つたのは、非常に虚榮心を、傷付けられた虚榮心を表はに見せて來たからだ。スメルヂヤコフは何時も質問をした。それも、前から考へて置いたやうな質問をした。それで居ながら途中で話を切つて默り込んだりした。殊にイヴンが此男を嫌ひに成つたのは、スメルヂヤコフが段々可厭な馴れ〳〵しさを見せて來たからだ。尤も、此男が身分を忘れて粗暴な言葉を使ふといふ譯ではない。寧ろ其態度は慇懃に過ぎる位で有つた。が、彼とイヴンとの間には、一

種の獣契が有るとでも思つて居るらしい。彼は何時も二人の間に何か共謀した秘密が有つて、二人だけには解つても、他人には解らないといふやうな話振りをした。それが耐らなく可厭なのだ。

イヴンは苛々しながら其側を通り抜けやうとした。スメルヂヤコフはベンチから立ち上つた。それだけでも、イヴンには、特に彼が自分だけに何か話さうとして居るのだといふことが解つた。イヴンは顫へた。「失せやがれ、馬鹿。お前なぞに關係はないぞ」と、舌の先きまで出かゝつた。が、實際は我にもなく、「阿父さんは寢て被坐しやるか、起きてかい」と言つて居た。

「且那樣は未だお寢みですよ」と、スメルヂヤコフは背後で手を組んだまゝ、靜かに言つた。「私は吃驚しましたよ」と、少時してから又附け加へた。

「何うして吃驚したんだ」と、イヴンは一生懸命に憤怒を抑へながら訊いた。スメルヂヤコフは返辭をしなかつた。

「何故貴方はイエル・マシニヤへ被往しやらないのですか」と、彼は不意に眼を擧げた。

そして、にや〳〵と笑つた。「何故私が笑ふか、貴方には解つて居るでせう」と、其の飛び出した左の眼が言ふやうに見えた。

「何故私がチエルマシニヤへ行くんだい？」と、イヴンは吃驚して訊いた。スメルヂヤコフは又默つて居た。

「貴方の阿父さんが、御自分で貴方にお賴みに成りやしませんか」と、彼は最後に言つた。

「馬鹿な。何でも可いから思つてる事を眞直に言へ」と、イヴンは不意に吼鳴つた。

「何にも思つてやしません」と、スメルヂヤコフは物臭さ相に答へた。やがて彼は又溜息を吐きながら言ひ出した。「私は眞個怖ろしい境遇に居ますよ。私は自分でも何うして可いか解らない。あの人達は眞個氣違ひですね。私は貴方の父親と兄さんのドミトリのことを言つてるんですがね。阿父さんは私の顏さへ見れば、あの女は來ぬか來ぬかと、女の來ないのが私の所爲のやうにお訊きなさる。又兄さんは兄さんで、好く張番をしてろ、あの女が來たのを見逃すと承知しないぞと仰有る。それが兩方ながら

日に〳〵烈しく成つて行く。私も最う本當に耐りませんよ。」

「何故お前はそんな事に關係したんだい。ドミトリの爲めに張番なぞして遣るのが惡るいさ」と、イヴンは苛々しながら言つた。

「關係せずに居られますものか。あの女を見逃したら貴樣を殺して仕舞ふと脅かすんですものね。それに私は明日(あした)永い發作にかゝりさうなんですよ。」

「永い發作とは何だ?」

「少時續く發作ですよ、數時間も、恐らくは一日か二日も。一度は三日續いたことも有りました。」

「併し癲癇の發作は前以て解らんといふぢやないか。何うしてお前は明日(あした)迄になぞと言へるんだい」と、イヴンは好奇心を唆られながら苛々して言つた。

「私は毎日屋根裏へ上る、明日は屋根裏から落ちるかも知れません。でなけりや窖の梯子から落ちるかも知れない、私は毎日窖へ下りて行きますからね。」

「馬鹿な、お前の言ふことは些(ちつ)とも解らないよ」と、イヴンは詰(な)ぢるやうに言つた。

「お前は明日から三日の間病氣の振りをして寢る積りかい。」

スメルヂヤコフはそれ迄下を向いて、足の親指で地面を弄つて居たが、急に足を縮めて齒嚙みをしながら言つた。「縱令私が左樣いふ手品をする事が出來るとしても——そんな事は慣れた人には譯は有りませんがね——私は自分を死から救ふ爲めに、左樣いふ手品を用ひる權利が有りますよ。病氣の間にあの女が阿父さんの許へ會ひに來たとしても、私は貴方の兄さんから咎められる譯は有りませんからね。」

「馬鹿な」と、イヴンは叫んだ。「兄がそんな事を言つたとて、そりや脅かしだよ。誰が本當にお前を殺すものか。」

「えゝ、あの人なら殺しますとも。それよりも、私は兄さんが阿父さんに對して氣違ひ染みた事を爲さつた時、私が共犯者だと思はれるんだい?」

「何うしてお前が共犯者と思はれるのを恐れて居るんですよ。」

「それは私が大秘密の合圖をあの人に敎へたからですよ。」

斯う言つてスメルヂヤコフの語るところに依れば、父のフヨドールは大層ドミトリ

を恐れて居る。で、折角女が來たとしても、途中で邪魔をされては仕方がない。又女の居る處へ暴れ込まれても困る。その爲め女の來た時には、戸を早目に五つ叩く。又、他に何か急用の起つた時は――例へば女の來て居ることをドミトリが嗅ぎつけた時なぞ――ゆる〳〵と三つ叩く。左樣すればフヨドールの方で中から戸を開けると云ふ手筈に成つて居るさうな。

「それをあの方に知られて居るんですよ」と、スメルヂヤコフは話を結んだ。

「何うして知つて居るんだ。お前が話したのかい。」

「私は恐ろしいから話したのですよ。ドミトリは始終お前は何か隱して居る、言へ言へと迫るんですものね。私は何でもあの人の吩咐(いひつけ)に從つて居るといふ證據に、それを話したんですよ。」

「ぢや、お前が其場に居て、兄にそんな合圖を用ひさせない樣にしたら可からう。」

「併し私は明日病氣に成りますからね。」

「お前は俺を調戯(からか)つて居るのか。何だかお前が仕組を立てゝ、皆お前の言ふ通りに成

るやうだよ。」

「何う致しまして。ドミトリ次第ですよ、ドミトリの心一つですよ。」

「併しそんな事には成りはせんさ。私の考へぢやア、あの女は決して此處へ來やせんからね。女が來て居ないものを、ドミトリが暴れ込むもことなからうよ。」

「いや、あの方は怒つただけでも、私の病氣の爲めに生ずる猜疑の念からでも暴れ込みますよ。現に昨日も左樣だつたぢや有りませんか。それにあの方は、阿父さんが三千留布を大きな封筒に入れて、其上に『我が天使グルシエンカへ、若しあの女が來て呉れるならば』と書いて、紅いリボンで縛つて、部屋の中に持つてらつしやるのを能く御存知ですよ。阿父さんは三日後に其封筒へもつて行つて、又『わが雛子のために』と附け足されました。」

「何を言ふんだ」と、イヴンは我を忘れて叫んだ。「ドミトリは金子を盗むために親爺を殺しなどはしない。あの男はあゝいふ氣違ひだから、グルシエンカの爲めなら親爺を殺すかも知れない。併し泥棒はしないよ。」

「だが、あの方は今非常に金子に困つておいでですよ」と、スメルヂヤコフは妙に落着いて判然言つた。「それにあの方は其の三千留布を當然自分に屬するものだと思つておいでですからね。又グルシェンカがあの方を強ひて阿父さんを殺させるかも知れませんよ。と云ふのはグルシェンカだつて三千留布の爲めに阿父さんと結婚するやうな事はしないでせう。結婚する位なら財産を皆奪つて仕舞ひまさアね。あの女も怜悧ですからね。又、一文なしのドミトリとは結婚しないでせう。處で、若しフョドールが今失く成れば、貴方がた御三人は少くとも四萬留布づゝ位は分けられる。グルシェンカと結婚してからぢや、何一つ殘らぬ譯ですからね。」

一種の戰慄がイヴンの身體中を通つた。彼は急に顏を赫らめた。

「ぢや、お前は何うしてチェルマシニャへ行けなぞと言ふのだい」と、彼はスメルヂャコフの言葉を遮つた。「私が此處を去つたら、大變な事が起りさうだとお前は豫想して居るのぢやないか。」

「其通りです」と、スメルヂヤコフはイヴンの顏を見返しながら言つた。

「何が其通りだ」と、イヴンは恐ろしい眼附をして訊いた。

「私は貴方がお氣の毒だから言つたのですよ。私なら何も彼も打捨つて行つて仕舞ひますからね。」

「お前は本當に愚物で、おまけに惡黨だよ」と、イヴンは急に立ち上つた。そして玄關に這入つて行かうとしたが、急に振り向いた。イヴンは何うかしたらスメルヂヤコフに飛びかゝつて、毆り附けて遣らうかとも思つた。

「私は明日の朝早く莫斯科へ行くよ。それだけだ」と、イヴンは我にもなく不意に言ひ出した。其後も彼は何うしてそんな事を言つたものかと、永い間自分でも不思議に思つた。

「それが可いでせう」と、スメルヂヤコフは恰も其返辭を待ち設けて居たやうに言つた。「只此處で何事か起れば、莫斯科からでも何うせ電報で呼び返されますよ。」

イヴンは返辭をしないで、ぷり〳〵しながら這入つて行つた。廣間で親爺のフョドールを見たが、「私は二階へ行くんですよ。貴方と話しに來たのぢやない、左樣なら」

と言つたまゝ、振り向きもしないで這入つて行つた。

フヨドールは後から這入つて來たスメルヂヤコフを見て、「一體如何したんだい」と訊いた。

「何か怒つてらつしやるやうですよ」と、給仕は傍見をしながら答へた。

其夜、イヴンは遲くまで寐つかれなかつた。何だか譯は解らないけれども、小舍へ行つてスメルヂヤコフの奴を毆りつけて遣らなければ濟まぬやうな氣がした。あんな憎い奴は此世に又と一人ないやうな氣もした。カテリイナのことは今迄忘れて居た。が、あの女に威張つて言つたやうに、迚も明日莫斯科へ行くことは出來ないやうにも思はれた。

イヴンは急に寢臺から下りて、こつそり階下のフヨドールの樣子を見に行つた。彼は其後も幾度か階段のところへ出て、凝乎と階下の樣子に耳を傾けた。後でそれを想ひ出す度に、彼は可厭な心持がした。

二時を打つた。彼は再び寢床に這入つた。今度はぐつすり寢入つた。朝の七時に眼

を覺ました。眼を覺ますと、直ぐに鞄を取り寄せて出立の用意にかゝつた。襯衣も昨日洗濯屋から持つて來た。何も彼も自分の出立を促すものらしい。

階下へ降りて、彼はフヨドールに、今から莫斯科へ行くと告げた。親爺は少しも驚かなかつた、悔みもしなかつた。それ處か、序に頼む事があると言つて大變喜んだ。

「序にチエルマシニヤへ一つ寄つて呉れないか、ボロヂヤから二十露里這入るばかりだよ。」

「そりやア出來ませんね、鐵道の停車場へは八十露里有る。そして莫斯科行きの汽車は、夕方七時に出るんですからね。」

「汽車に乘るのは明日にしても可いぢやないか、何卒阿父さんのお願ひだから、一つ私の言ふ事を聞いてお呉れよ。」

で、フヨドールの用事といふのは、其處に大きな林を二つ持つて居る。其立樹を、商人の方では九千留布と言ふのを一萬一千留布に賣りたいから、かけ合つて取引きして呉れといふのだ。

「そんな暇は有りません。それに私にはそんな事は出來ませんからね」と、イヴンは強ひて斷つた。が、フヨドールは飽く迄それを押し附けやうとした。

「それぢや、貴方まで私をチエルマシニヤへ遣らうとするんですね？」と、イヴンは皮肉な冷笑を浮べながら言つた。

併しフヨドールは行つて貰ひさへすれば可かつた。朝飯にも馳走をした。馬車も立場から呼び寄せた。家内中玄關まで送つて出た。

イヴンが馬車へ乘り込んだ時、スメルヂヤコフも荷物を持つて這入つて來た。「おい、俺は到頭チエルマシニヤへ行く事に成つたよ」と、イヴンは我知らず言つた。

「では、昔らか怜悧な人と話をするのは話し甲斐の有るものだと云ふが、本當ですね」と、スメルヂヤコフはイヴンを見返しながら意味有りげに言つた。

馬車は駈け出した。イヴンは何が何だか解らなかつた。四邊の山や野や空の色を眺めたり、又は馭者に話し掛けたりして、努めて氣を紛らさうとした。アリヨウシヤやカテリイナの面影が心に浮んだ。何と思つてスメルヂヤコフは、怜悧な人と話をする

のは話し甲斐のあるものだなぞと言つたのだらう？　それよりも彼は何と思つて、到頭チエルマシニヤへ行くなぞと彼奴に告げたらう？　幾許考へても解らなかつた。

やがて、ボロヂヤの驛へ着いた。彼は馬車を降りて驛長の家へ這入つて行つたが、直ぐに又出て來て、「私は最うチエルマシニヤへ行くのは止めにしたよ。七時迄に鐵道へは着かれないだらうかね。」

「えゝ行かれますとも。」

「ぢやア直ぐに出して呉れ。それからお前方の一人が明日親爺の處へ行つて、私は眞直に莫斯科へ行つたと告げて呉れ。」

イヴンは七時に汽車へ乘り込んだ。「過去を葬れ、俺は古い世界と關係を絶つたのだ。新しい世界だ、新しい生活だ」と、言ひ續けにして居た。が、彼の心は少しも引き立たなかつた。明くる朝、汽車が莫斯科へ近づいた時、彼は思はず、「あゝ俺は惡人だ」と叫んだ。

イヴンが立つた後で、フヨドールは非常に愉快にして居た。が、二時間計りして思

ひ掛けない事が起つた。スメルヂヤコフは窖へ行つて、梯子の頂上から落ちた。幸ひにも母のマルフアが居て、其物音を聞いて駈け着けた。彼は梯子から落ちた爲めに癲癇を起したのか、癲癇を起した爲めに梯子から落ちたのか、それは解らない。兎に角梯子の下に口から泡を噴きながら唸つて倒れて居た。ヘルチエンスツーベといふ町の醫者を喚んで來たが、これは餘程重體だと言つた。實は此醫者にも解らないのだ。

其晩、フヨドールはマルフアの作つた不味い肉汁(スープ)を飲んだ。未だ困つたのはマルフアの亭主のグリゴリイまでが寢附いたといふのだ。彼は苛々しながら廊下を往き交ひした。今朝スメルヂヤコフの談に據ると、あの女は今夜是非行くと言つた相で有る。

中巻

一

アリヨウシヤは胸を痛めながら長老の庵室へ這入つて行つた時、又吃驚した。恐らくは息も絶えゞに臨終の床に就いて居るだらうと思つた長老は、椅子に掛けて四五人の侍者に取巻かれながら、寂やかな、とは云へ樂しげな談話を取交して居た。長老は今朝侍者に向つて、最一度お前方に最後の話をして別れを告げた後でなければ死なないと約束した。侍者達は固くそれを信じて居た。恐らく長老が眼を瞑つて固く成つて居ても、最一度起上つて話をして下さるに違ひないと信じて居たらしい。座に侍つた者は皆幾年となく長老に隨つて、師の信用を受けた者ばかりで有つた。

四邊は最う暗くなつて、室の中には燈火が點されて居た。長老はアリョウシャの顏を見ると、嬉しげに微笑して手を擡げながら「よく來て呉れた、私はお前が屹度來て呉れるだらうと思つて居たよ。」

アリョウシャは側へ行つて、長老の前に跪きながら、さめ〴〵と泣き出した。

「お前が俺の爲に泣いて呉れるのは未だ早いよ」と、長老は右の手を彼の頭に加へながら微笑んだ。「さア立つて、お前の顏を見せてお呉れ。今日は彼の兄さんに會つて來たのかい。」

「一人の兄さんに會つて來ました。」

「俺の言ふのは長上の兄さんだよ。俺が其前に跪いた人だ。」

「あの人には昨日會ひましたが、今日は未だ會ひません」と、アリョウシャが答へた。

「ぢやア明日は急いで行つて會つて來るが好い、何事を差措いてもあの人に會ふんだよ。未だお前が行つて、或恐ろしい出來事を喰止める時間が有るだらう。私はあの人の前に貯へられてゐる大きな苦痛の前に跪いたのだよ。」

「長老樣」と、アリョウシャは動悸つく胸を抑へながら訊いた。「貴方のお言葉は餘り漠然として解りませぬ。兄の前に何んな苦痛が貯へられて居るので御座いませう！」

「それは訊いて呉れるな。俺は只昨日恐しいものを見たやうな氣がしたのだよ、あの人の眼にあの人の全未來が表れて居るやうな——俺は彼の樣な眼附を一生の間に二度しか見たことがない。それだから俺はお前をあの人の許へ送つて遣つたのだ、お前の優しい顏があの人の助けになるだらうと思つてな。が、何事も神樣の御心の儘にする外ない。アレキセイや、私は今迄默つてお前の顏を祝福して居た」と、長老は優しい微笑を湛えながら座中を見廻した。「俺は今日迄何故此子の顏が俺に氣に入つて居るか當人にも話さなかつた。今言ふが、俺には一つの追憶が有るんだよ。俺の兄は俺が未だ子供の時分十七歳で死んだ。其後私は段々此兄が俺の一生の案内者であるやうな氣がして來た。此兄がなければ俺は僧侶にも成らず、此の尊い教の道も知らずに仕舞つたらう。兄は一度俺が子供の時に現れたやうな氣がする。アレキセイが兄の顏に似て居るのは不思議な位だ。今日の集

りは俺に取つて此上もなく尊い集りだから、此兄の話が一同に向つてして見たい。あ俺は何だか此の瞬間に俺の全生涯を最一度繰返して見るやうな氣がする。」

斯う言つて彼はぼつ〳〵一生の間の長い話を始めた。アレキセイ・フエドロヰツチは長老が亡くなつてから、其時の話を心覺えに留めて置いた。其中には以前に聞いた話も大分交つて居るやうだが、便宜の爲に其儘これを轉載して置く。

長老ゾシマの傳

皆さん方よ、私は北方の都離れた片田舎の町で生れました。父は二歳の時に亡くなつたから私は何一つ覺えて居ない。後には母と兄弟二人が殘つた。木造の家と、財產も多くはないが、三人が樂に暮して行かれるだけは有りました。兄は私よりも八つ年上で、學校でも默り者だと云ふことでした。死ぬ六箇月前に、莫斯科から追放されて其町に寂しい生活を送つて居た、或政治上の罪人と懇意に成りました。此人の感化を受けて、兄は自由思想の傾向を帶びて來た。四旬祭が來ても敢て精進しやうとしない。

母はそれを悲しんで、いろ〳〵言つたけれど、一言の下に笑つて應じない、其間彼は風邪にかゝりました。尤も以前から肺の氣は有つたけれど、醫者は却々重態だと宣告した。母は泣き出した。そして、兄を驚かせぬやうに氣を揉みながら、教會へ行つて懺悔をして、聖晩餐も受けて呉れと賴んだ。が、兄は直に餘命幾許もないのだなと悟つて仕舞つた。

二三日後、彼は教會へ行き出した。「阿母さん、これは只貴方の爲に行つて上げるんですよ」と言ひ〳〵した。が、教會へも永くは行かれなかつた。どつと床に就いたまゝ、聖晩餐も自宅で受けた。其頃から彼は誰に對しても大變優しく成つた。天氣の好い麗かな日など、私は好く彼が安樂椅子に坐つて、優しい顏をしながら、嬉しげにこ〳〵して居るのを見かけた。彼の性格は全然一變したらしい。

「阿母さん、そんなにお泣きなさるな、私は未だ永く生きて居ますよ、この世は眞個樂しいものですからね」なぞと言ひ〳〵した。

「お前さんのやうに夜中骨身も碎ける程咳をしながら、能く樂しいなぞと言つて居ら

れるね」と、母は溜息を吐いた。

「えゝ、この世は天國ですよ」と、兄は答へたものだ。「私達は皆天國に居るんですよ、只私達がそれを悟らないばかりですよ。私達は左様したいと思へば、明日にも天國を地上に齎すことが出來るのですよ。」

皆彼の言葉を聞いて驚いた。中には感動して泣く者も有つた。友達なぞが見舞ひに來ると、「私は如何したら斯うして皆に好くして貰へるのでせうね。私は幸福だ、昨日迄はそれが解らなかつたのだ」なぞと言つた。

召使などが側へ來ても、兄は絶えず言ひ〳〵した。「お前さん方は親切だねえ、何うして私をそんなに好くして呉れるのか、私はこんなにして貰ふ値打が有るかい。私も好くなつたら、又お前さん方の面倒を見て上げるよ、人間は互ひに面倒を見合はなければ成らないからね。」

「お前さんは病氣だからそんなことを言ふんだよ」と、母は頭を振つた。

「阿母さん、この世には主人と召使が有りますね。が、私が召使で先方が主人でも同

じことぢや有りませんか。それに私達は何人でもあらゆる人間に對して罪を犯して居るのですよ、中にも私は餘計に罪を犯して居るのですよ。」

母親は涙を一杯溜めた眼で笑つた。「だつて、此世には盜人も人殺しも有るぢやないか、お前さんが他人よりも餘計に罪が深いと云ふのは解らないね。」

「阿母さん、實際何んな人でも有らゆる人類に對して責任が有るのですよ。何と言つて可いか私には解らないけれど、私はそれを感じて居る、慘ましい程感じて居る。」

醫者が來ると、彼は又戯談のやうに、「私は未だ一日位生きて居られませうかね」と訊いた。

「えゝ、生きられますとも」と、醫者は答へた。「一日でも、一月でも一年でも。」

「一月でも一年でもか」と、彼は笑つた。「人間があらゆる幸福を知るには一日で澤山ですよ。」

兄の寢て居る室の窓からは庭園が見えた。小鳥が木の枝を飛び交ひながら囀つて居た。兄は嬉し相にそれを眺めて居たが、急に又、「小鳥よ、幸福な小鳥よ、私を許して

くれ。私は又お前に對しても罪を犯した」と叫びながら喜びの涙を流した。「私の周圍には到る所に神の光榮が有る、鳥にも木にも牧場にも空にも。私は只それを知らずに汚(けが)して居たのだ、その美と光榮とに氣が附かなかつたのだ。」

或日、私が兄の室へ這入つて行くと、夕日が海のやうに室中を照して居た。兄は私を手招ぎした。私が側へ行くと、肩に手をかけながら優しく私の顏を見入つて居た。何にも言はずに只私の顏を見入つて居た。やがて、

「ふむ、最う好いから彼方(あちら)へ行つて遊んでおいで、私の代りにも遊んで呉れるんだよ」と言つて手を離した。私は直に駈け出して遊びに行つた。が、其後私は一生の間何度も其時の兄の言葉を想ひ出して涙にくれた。

三週間後、兄は眠るやうに死にました。

私は一人母とともに殘された。母の友達が好く母の處へ來て、「お宅のやうに澤山の收入も有りながら、斯うして此子を側に引籠けてばかりお置きになるのは、此子の末の出世を妨げるやうなものですよ」と言ひ〳〵した。そして、近衛の士官と成る爲に、

彼得斯堡(ペテルスブルグ)の幼年學校へ入れたら好からうと進めた。母は一人の子と別れるが辛さに、永い間躊躇したが、到頭思ひ切つて、私を連れて彼得斯堡(ペテルスブルグ)へ出て、幼年學校へ入れて置いて涙ながらに歸つて行つた。其後私は一度も母を見なかつた。母は三年後二人の兒を思ひ死にに死んだのである。

私は殆ど八年間を幼年學校で送つた。周圍の物珍しさに、子供の時の印象は段々薄く成つた。私は又いろんな新しい習慣や言說にかぶれて、全然(まるで)新しい人間に成つた。而も殘酷な非道な、野蠻な人間に出來上つた。尤も表面上の禮儀や社會上の作法のやうなものは、佛蘭西語とともにすつかり會得した。

私達は皆、私も左樣だが、兵卒を自分達の用に立てる獸のやうに思つて居た。名譽、名譽とは口にしたけれど、名譽の眞意義は解つて居なかつた。飲酒と墮落だけが私達の自慢する凡てゞ有つた。勿論私達は生れ付き惡い人間と云ふのではない、只惡い振舞をするだけだ。中にも私は不好(いけな)かつた。特に金子が自由に成り出してから一層不好く成つた。

私は本を讀むことだけは所好ぢやつた。が、聖書だけは何處へ行くにも持つて歩いたけれど、一度も明けて見なかつた。

四年の間こんな生活を送つた後、私は少時所屬聯隊の駐屯して居た或町に居た。其町の人は好く我々を歡待して呉れた。私も到る所懇切に待遇された。一つは私が相應に財産が有つたからだ。何處でも一番好く通用するものは金子である。

私は或立派な家の、氣高い、美しい、利發な娘に戀するやうに成つた。兩親は其土地の勢力家で有つた。私は其娘が私に氣が有るやうに思つて、胸が燃え立つた。が、獨身生活の自由と放縱とに慣れた私は、それと別れるのが辛さに、思ひ切つて結婚を申込むことも出來なかつた。つまり心から其娘を想つて居た譯ではないらしい。私は急に二箇月の間他の地方へ派遣されることになつた。

二箇月經つて歸つて見ると、其娘は既に近所に居る金持の地主と結婚して居た。其人は私よりは年上だが、未だ若く、彼得斯堡の上流社會にも緣邊があり、又卓越した教育も受けて居た。私は二つながらそれがないのだ。私は此結婚の話を聞いて全く顚

倒して仕舞つた。聞いて見ると、二人はずつと前から許嫁に成つて居たと云ふのだ。私は自分の自惚からそれを知らずに居た。が、それ位なら、女の方で何故私に心の有るやうな素振をして見せたらう、左樣思ふと無性に腹が立つた。が、それも考へて見ると、女の方では最初から私を避けるやうにして居たらしい。私はそれを知らずに居たのだ。併し其當座は迚もそんな反省なぞ出來ない。只如何しても復讐せねば置かぬと誓つた。

で、私は復讐の機を待つて居たが、到頭或集會の席で相手の男を漫罵して遣つた。私の方にも理窟は有つた。私は圖に乘つて、相手に決鬪を申込んだ。此方は青二才、先方は立派な地位の有る人と云ふやうな、二人の間に大分懸隔が有つたにも係はらず、相手の男もそれを承知した。後で聞いて見ると先方が承知したのも嫉妬の爲めだと云ふことで有つた。即ち私の挑戰に應じなかつたら妻君から輕蔑されは仕舞ひかと、それを恐れたので有る。

時は七月の末で有つた。次の朝七時、町の外廓で出逢ふことに約束した。が、此處

に一つ私の生涯の一轉機を劃するやうなことが起つた。其晩私は亂暴な、變性を帶びた心持で宿へ歸つたが、從卒を見ると、いきなり其顏を掘り付けた。顏からはたら〳〵と血が流れた、それは四十年前の出來事だが、私は今もそれを想ひ出すと穴にも入りたいやうな恥辱と苦痛を感ずる。私はそれから寢床へ這入つて、三時間ほど眠つた。起きると、窓の傍へ行つて、それを開けた。凝乎と庭を眺めて居た。太陽が昇つた。鳥が囀つて居た。

如何いふ譯だか、私は心に一種の羞恥を感じた。血を流しに行く爲めか。まさか左樣ぢや有るまい。それとも私は死を恐れるか、殺されるのが怖いのか。いや左樣ぢやない、そんな事ぢやない……不意にそれが私に判つた。昨宵私があの從卒を掘つたからだ。私は再び其時の光景を目の前に見た。從卒は撲れながら、手を下にして眞直に立つて居た。掘られる度に、よろ〳〵と倒れかけたが、それでも手を擧げて避けやうとはしなかつた。人間が慣らされると云ふのはこんなものだ。人間が人間を掘つたのだ。何と云ふ恐しい罪だろう、私は鋭い刄物で胸を抉られるやうな氣がした。私は

寢床の上に倒れたまゝ、兩手で顏を被ふて啜り泣きに泣いた。兄が臨終に際して、「お前方何うしてそんなに私を大切にして呉れる、私はそんなにされる値打が有るかい」と、召使に言ひ〳〵した言葉が想ひ出された。私はそんな値打が有るか。同じく神の御委に肖せて造られた同胞から仕へられるやうな値打が有るか。私は生れて始めてこんな質問を心に浮べた。

實際私は世の中の凡てに對して責任が有る、何人よりも罪の深い者で有る。私は一時に光が射すやうな氣がした。一體私は何をしに行くのだ？　私は何の罪もない、高潔な、善良な紳士を殺さうとして居る。又其妻から半生の幸福を奪ふことによつて、妻君自らをも殺さうとして居る。私は斯うして枕に顏を押付けたまゝ、時の經つのも知らなかつた。そこへ介添人が拳銃を持つて私を連れに來た。

「君はもう起きて居たのか。さ、出かけやう」と私を促がした。

私は不決斷のまゝ、馬車の傍へ行つた。が、急に墓口を忘れて居たからと言つて、取つて返した。直に從卒の室へ飛んで行つて、

「私は昨宵お前の顔を二つ摑つたね、勘忍してお呉れよ」と言つた。

從卒は吃驚したやうな顔をしながら、私を見返して居た。私は左樣言つただけでは氣が濟まないので、士官の制服を着けたまゝ從卒の足許に蹲づいて、床に額を付けながら、「堪忍しておくれよ」と繰返した。

從卒は愈々飽氣に取られた。「且那樣、貴方は何をなさいます？　私のやうな者に」と言ひながら、彼は兩手で顔を抑へたまゝ、わつと泣き出した。それから窓の傍へ行つて、身を顫はせながら啜り泣きに泣いて居た。私は馬車の處へ飛んで歸つて、「さア行かう」と叫んだ。「君は勝利者を見たことが有るかい。君の前に立つて居るのが左樣だよ。」

私達は斯うして指定の場所へ着いた。先方は既に其場に待つて居た。二人は十二歩離れて顔を見合はせた。相手方が最初に射るのである。私は愉快相にして、眞當面に相手の顔を見詰めて居た。眉毛一本動かさなかつた。相手の彈丸は只私の頰と耳を掠つた。

「神に謝す、これで何方も殺されないのだ」と叫びながら、私は拳銃を摑んで林の中へ投げ込んだ。それから又相手の方へ向つて、「勘忍して下さい」と叫んだ。「私は貴方を侮辱して、こんな決鬪などさせて、眞個馬鹿でしたよ。私は貴方より十倍も惡い人間だ。何卒貴方の此世で一番愛して被坐しやる方へも其樣に仰有つて下さい。」

「如何したのです」と相手の男は當惑して言つた。「そんな位なら、最初から止めて下されば可かつたのですね。」

「昨日は馬鹿でしたが、今日は賢く成つたのですよ。」

「ぢや貴方は愈々打たないのですか。」

「えゝ、打ちません」と、私は言つた。「貴方の方でお打ちに成りたけりや、最一度打つて下さい。併しお打ちに成らない方が可いでせう。」

介添人は皆がや〳〵言ひ出した。特に私の介添人は「決鬪に出て、相手に謝罪ると云ふやうな、君は聯隊の名譽を辱かしめるのか」とまで激語した。

私も眞面目に成つた。「諸君は自分の愚を悔いて、公衆の前に懺悔する人間が出て來

たとて、それ程可訝しいのか。」

「だが、これは決闘だぜ。」

「だから」と私は言つた。「僕は此處へ着くや否や白狀しやうかとも思つた。が、それは出來ないのだね。僕が十二歩の距離で射擊を受けた後、始めて僕の言葉に意味が有るのだ。其前に言つたのでは、拳銃を見て怖くなつたからあんなことを言ふのだと、一言の下に言ひ消されて仕舞ふからね。諸君！」と、私は不意に叫び出した。「諸君の周りに有る神の賜物を御覽なさい、美しい空を、淸らかな空氣を、草を木を。自然は美しくて罪がない。只人間が、我々が馬鹿で罪が深いのだ。吾々は此世が天國で有ることを了解しない。」

私はもつと〳〵言ひたかつた。が、聲が喉に塞つて出なかつた。

「眞個お言葉には道理が有る」と相手の男が言つた。「兎に角面白い方だ。」

「貴方はお笑ひでせう」と私は笑ひながら言つた。「後には讃めて下さいませうよ。」

「今でも讃めて居りますよ。貴方は本當に眞面目な方だと思ふから、何卒握手させて

下さい。」

「いや、それは私が本當に尊敬されるだけの値打が有るやうに成つてからにして下さい。それ迄延ばして置きませうよ。」

私共は又自宅へ歸つた。友達は此事を聞くと皆遣つて來て、卑怯だとか、卑怯でないとか、がや〳〵言ひ募つた。中には、聯隊の恥辱だから辭職させろとまで言ふものも有つた。が、私は其前に辭職願を出して置いた。此後は僧院に這入る積りだとも言つて聞かせた。

「なに、それ位なら早く言へば可いんだのに。僕等も坊主を彼是言ひはしないよ。」

皆笑つた。それから皆私を親切に愉快相に遇して呉れた。町の交際社會でも、此話を聞くと皆面白がつた。それまでも私は至る處親切にはされたが、格別注意も曳かなかつた。が、今度は一時に皆私を知つた。私を招待した、皆私を見て笑つた。が、皆私を愛して呉れた。特に婦人連が私の話に耳を傾けた。其人の爲めに決闘した例の若い婦人も、良人と一緒に來て、私に感謝した。私は嬉しさに胸一杯に成つた。が、私

は特に或る中年の紳士に心を惹かれた。前から名前だけは聞いて居たが、言葉を交したのは其時が始めてゞ有る。

彼は此町で高い地位に有つた。皆から尊敬もされ、金持で、慈善家の名が高かつた。年配は五十位、むつつりとして、滅多に口を利かなかつた。十年前に結婚した若い妻君も有れば、三人の子供も有つた。或宵私が一人自分の室に坐つて居た時、不意に戸を開けて、此紳士が入つて來た。

序ながら、私は元の宿から移つて、或婆さんの家に下宿して居た。從卒も隊へ返した。あの日以來顏を會はせるのが恥しかつたからだ。斯くの如くにして、世俗的の人間と云ふものは、自分の正しい行爲をすら恥づるもので有る。

「私は此頃中方々で貴方のお話を拜聽しました」と、客は口を開いた。「で、一度お懇意に成つて親しくお話を伺ひ度いと思つたから參りました。宜しう御座いませうか。」

「宜しい段ではない、私は大變名譽に心得ます」と私は答へた。が、内々は少々萎びてたぢろいて居た。

「貴方があゝして公衆の侮蔑を招くと知りながら、尙眞理の爲めに盡されたのは、眞個見上げたお方ですね」と彼は言ひ出した。

「御賞讃は過分です」と私は答へた。

「いや過分ではない。あゝ云ふ行爲と言ふものは貴方が考へて被坐しやるより遙かに困難なものですよ。私は眞個感服して仕舞ひました。それだから斯うして會ひに來たのです。あの際貴方はどんな心持が致しました？　何卒それをお話し下さい。斯う申すと、私が如何にも物好きなやうにお考へかも知れませんが、こんな質問をするについては、私は私だけの秘密な動機が有るのです。何れ此後もつと御懇意になれば、お話する時機も有るでせうがね。」

私は凝乎と相手の顏を見詰めて居たが、すつかり信用して仕舞つて、却て私の方で此男の心の底に何か深い秘密が有りはせぬかと好奇心さへ起した。で、私は從卒の頭を毆つたことから、一伍一什を話して、

「斯う云ふ譯で、私は最う自宅で始めて居たのですよ。一度其道に出立した以上、同

じ道を最つと遙かに行くのは六ケ敷いことではない。却て喜びと幸福の源と成るものですよ。」

私は相手の聞き惚れて居る樣子が氣に入つた。「いや、眞個面白う御座いました。これからは幾度も伺ひますから宜しく。」

其後彼は殆ど毎日のやうに遣つて來た。二人はすつかり仲好に成つた。が、彼は私の話を聞くばかりで、自分のことは何一つ言はない。私も此儘で彼が所好になつて居られる以上、別に彼の秘密を知り度いとも思はなかつた。二人の間には、宵々毎に熱心な人生問題が繰り返された。私はだん〳〵社交界や隣人を訪はぬやうに成つた。

「貴方は御存じですかい」と、彼は甞て私に言つた。「此町の人は私が餘り度々貴方を訪問すると云つて、不思議がつて居ますよ。まア不思議がらせて置くが可い。何事も今に判りますからね。」

時としては、彼は非常に興奮して居ることがある。こんな時には、何時でもついと立つて歸つて仕舞ふ。時としては、凝乎と私の顏を見詰めて居る。今に言ひ出すか、

言ひ出すかと思つて居ると、何にも言はないで話を反して仕舞ふ。

或日、不意に彼の顏が眞蒼に成つた。頰の肉も痙攣するやうに見える。「如何したんです！　何處かお苦しいのですか」と、私は訊いた。

「貴方は……貴方は知らないのですか……私は人殺しをしたんですよ。」

「何を言ふんです！」と、私は叫んだ。

「ねえ貴方」と、彼は妙に笑ひながら言つた。「私は最初の言葉を言ひ出すのが實に辛かつた。斯う成れば後を言ふのはいと易い。」

十四年前に、彼は一人の美しい金持の後家さんを殺した。最初彼は非常に其女を戀して、心の中を打明けて結婚を申込んだ。が、彼女には既に意中の人が有つたので、彼の申込を拒絶して、今後此家へも出入りして呉れるなと頼んだ。

或夜彼は兼ねて案内知つた窓から女の部屋へ忍び込んだ。女の寢姿を見ると、彼の情慾は再び燃え上つて、復讐の念が彼の心を占めた。彼は醉ばらひのやうに、我を忘れて短刀を女の胸に刺した。女は聲も立てずに死んだ。それから彼は召使どもに罪を

着せやうと思つて、故と女の墓口を盗んだ。無智の召使の仕業に見せるとて、故と高價な證文を捨てゝ、金子だけ取つた。大きな黄金の道具なぞを取つて、小さな金目のする寶玉なぞを殘して置いた。それから又自分の記念とて、或物を奪つた。それは後に解る。

次の日、町中は大騒ぎに成つた。が、一人として彼を罪人だと疑つた者はない。それから今日迄ずつと左樣で有る。彼は控目な性質で、滅多に友達にも心中を打明けないから、彼女に戀して居たなぞとは、誰も知らなかつた。只死人の近附位に思はれて居た。ビヨートルといふ奴僕が疑ひを受けた。其男は前の日に解雇された。或居酒屋で酔ばらつて、女主人を殺して遣ると言つて居たことなぞが解つた。二日後に捕まつたが、衣嚢に小刀を持つて、右の手が血に汚れて居た。鼻血を出したのだと言譯したが、誰も耳を藉す者はなかつた。

彼は捕まつて、人殺しとして調べられた。が、捕縛後一週間目に熱病に罹つて、知覺を失つたまゝ慈善病院で死んだ。此事件はそれで終つた。裁判官も町の人も皆其男が後家さんを殺したものと信じて居た。此時から天の冥罰が始まつたのである。

今私の友人と成つた客は、最初の間些とも良心の苦痛を感じなかつたと告げた。只自分の愛する女を殺した、女は最う居ない、然るに女に對する情熱だけ殘つたのが苦しかつた。が、女が他人の妻と成るのは考へるだけでも耐らない。だから他に仕樣がなかつたとも考へた。

最初は召使の捕縛で心を苦しめた。が、病氣に成つて死んだと聞くと、直に安心した。病氣に成つたのは酔ばらつて濡れた土の上に寢て居たからで有る。金子を盗んだと云ふことが、少しばかり氣に懸つた。が、それも疑を避ける爲に盗んだのだ。彼は盗んだ金子の何倍といふ程慈善財團に寄附した。其他彼はいろ〳〵面倒な義務を引受けて、全力を擧げてそれに當つた。莫斯科と彼得斯堡に於ける博愛協會の委員にも擧げられた。

が、其間にも彼は過去を考へずに居られなかつた。一人の美しい利發な娘に心を惹かれて、結婚でもしたら此憂鬱を忘られるかと、それだけを頼みに結婚した。が、結

果は反對となつた。結婚した其月から、絶えず「あの女は今俺を愛して居る――若しあの女が知つたら」と考へ出した。妻君が子を孕んだ時、彼の苦痛は一層深く成つた。愈々子が生れた。彼は其子を抱きたいと思ひながら、罪のない顏を見ると抱くにも抱けないやうな氣がした。

血は復讐を叫んだ。彼は毎夜怖しい夢を見るやうに成つた。時が經てば癒るかと思つたが、時が經てば經つ程、彼の苦しみは烈しく成つた。彼は世間から尊敬されて居た。が、尊敬されゝばされる程、一層堪え難い氣がした。彼は幾度か自殺を思ひ立つた。が、其間他の考が浮んだ。何うしても其考を振捨ることが出來なかつた。即ち公衆の前に立つて、自分が人殺しをしたと白狀するので有る。三年間程彼は其事ばかり考へて居た。到頭自分の罪惡を白狀さへしたら、彼の魂の傷は癒される、心の平和も取戻されると信ずるやうに成つた。其際、彼は私の決闘を聞いたのである。

「貴方を見て、私は漸つと決心した。」

私は彼を見返して居た。「そりやア不可ない」と、私は兩手を摑みながら叫んだ。「あ

んな些細な、あんな詰らない事が、貴方にそんな大決心をさせては濟まない。」

「併し私は三年も前から考へて居たのですよ。私は貴方を見て、自分が責められた、貴方が妬ましく成つた。」

「だが、何人も貴方の告白を信じますまい。十四年も前の事ですよ。」

「併し私は證據を持つて居る、それを見せますよ。」

私は思はず聲を擧げて叫んだ。そして、彼に接吻した。

「だが、一つだけが、唯一つだけが」と、彼は苦しげに言つた。「私の妻や子は！　妻は敷きの餘り死にませう。子供は人殺しの子に成りますよ。大きく成つてからも、何んな記憶を――父親に就いて何んな記憶を持つことでせう！」

私は何とも言へなかつた。

「子供と永久に別れる。解つてますか、私は永久に別れるのですよ。」

私はなほ默つて、心の中で祈禱を繰返して居た。

「行け！」と、私は漸つと言出した。「行つて白狀なさい、何事も濟んで、只眞理だけ

が殘りますよ。子供も大きく成つたら貴方のお心持が解るでせう。」

其夜彼は如何にも決心したやうに歸つて行つた。が、其後二週間と云ふもの、彼は矢張毎晩のやうに遣つて來た。毎晩白狀すると言ひながら、如何しても思ひ切れないらしい。

「愈々白狀した瞬間は、私の爲に天國であるとは知つて居る。十四年間私は地獄に居たのだ。私は苦しみたい、罰が受けたい、そして、私の生活は始まるのだ」と、或日の如きは斷乎として言つた。が、次の日は矢張蒼い顏をして再び遣つて來た。

「貴方は私が來ると、未だ白狀しないかと云ふやうな顏をして、私を見ますね。が、少時待つて下さい、貴方のお考へになるやうに、そんな容易いものぢや有りませんよ。恐らく私は全然白狀せずに仕舞ふかも知れない。そしたら、貴方は私を訴へて出ますかい。」

私は怖しいやうな氣がして、彼の顏さへ見られなかつた。私は胸一杯に成つた、夜も眠られなかつた。

「私は今妻君の傍から來たのですよ」と、彼は續けた。「女房や子供が何んなものか、貴方にはとても解らない。妻や子だけ許して貰へたら、私は一生の間でも苦しみますよ。私と一緒に彼等まで亡すのが正當ですかい。」

彼の眼は輝き、唇は引釣つた。「ね、言つて下さい、私の運命を決して下さい。」

「行つて白狀なさい」と、私は嘶くやうに言つた。聲か喉に塞つて出なかつたのである。そして、新約聖書の約翰傳十二章二十四節を開いて見せた。

「誠に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落て死ずば唯一つにて存んもし死ば多の實を結ぶべし」

「其通りだ」と、彼は苦々しげに笑ひながら言つた。「貴方の見せて呉れた文句は實に怖ろしい言葉だ。眞個それを他人に投げつけるのは易しい。何人がそれを書いたのです！　まさか人間が書いたのぢアないでせうね。」

「神の御言葉ですよ。」

「他人に說敎するのは易しい」と、彼は殆ど私を憎んででも居るやうに言つた。

やがて彼は立上つた。「では、左様なら。最うお眼には懸りますまい……何れ天國で會ひませう。」

私は彼の手を取つて接吻しやうと思つた。が、彼の顏を見るとそれも出來なかつた。彼は出て行つた。私は床に跪いたまゝ、永い間神に祈つた。一時間半も經つたと思ふ頃である。不意に彼が戸を開けて這入つて來た、私は吃驚した。

「何處へ行つてたんです」と、私は訊いた。

「何か忘れたやうな氣がして」と、彼は言つた。「手帛か何か……よしや何にも忘れないとしても、少時此處に居させて下さい。」

彼は椅子に腰掛けた。私にも掛けよと言つた。二分間程、凝乎と私の顏を見詰めて居たが、不意に微笑した。私は今でもそれを記憶て居る。それから彼は立上つて私を抱いた。私に接吻した。

「私が二度目に來たことを記憶て居て下さい。ね、ね、宜う御座んすか。」

彼は出て行つた。

翌日は彼の誕生日である。其日は例年の通り町の重立つた人が彼の家に集つて來た。晩餐後、彼は室の中央に立つて一場の挨拶をした。それが人殺しの懺悔であつた。

「十四年間私は人と離れて生きて來た、只神が私を訪ねて呉れた」と、彼は言葉を結んだ。「私は自分の罪惡を償ひたい。」

彼は罪跡を晦ます爲に後家さんの部屋から盜んだ、いろ〳〵の品物を取出して見せた。其中に女が戀人から受取つた手紙と、それに對する返辭を書いたまゝ出さなかつたのと二通有つた。

聞いた人は皆驚いた。が、何人もそれを信じやうとはしなかつた。皆彼が狂人に成つたのだと思つた。裁判所でも調べかけたが、直に又止めた。成程證據は有る。が、そんな物は懇意づくから貰つたのかも知れない。つまり何一つ取止めたことはなかつたのだ。

五日後、彼が病氣で死にかけて居るといふ噂が傳はつた。醫者は矢張腦の錯亂だと診斷した。私は何一つ口に出さなかつた。彼の病氣を訪ねやうと思つても許されなか

つた。

「貴方のお蔭でこんな病氣に成りました」と、妻君は言ひ切つた。妻君ばかりでない、町中が左樣言つた。私は只默つて居た。實際心の中では、自ら罰した人の上に、神の恩寵が有るのを明白に自覺して喜んで居た。私は飽迄彼の狂氣を信じなかつた。

到頭、病人が私に會ひたいと云ふので、私を彼の病床に通すことが許された。彼の命は旦夕に迫つて居た。が、彼の痩せた顏は優しさと幸福とに輝いて居た。

「到頭遣り果せました。其瞬間から私の胸には天國が有つた。今始めて私は子供を愛することも出來る。妻も裁判官も、誰一人として私の言つたことを信じて呉れない、矢張神樣の惠は有るのですね。」

彼の息遣ひは暴かつた。妻君は始終隣の間から見張つて居たが、それでも彼は窃と私の耳に囁いた。

「私が二度目に行つたのを記憶ておいでですかい。あれを記憶て居て下さいと言ひましたね。何しに戻つて行つたとお思ひですか。私は貴方を殺しに行つたのですよ。」

私は飛び上つた。

「私は貴方の家を出てから暗がりの中を彷ひ歩いた。不意に私は貴方が憎くなつた。私は思つた、今私の罪惡を知つて居る者は貴方だけである。私が明日如何しても白狀しなければ成らぬのは、貴方が知つて居るからだ。尤も、貴方が私を裏切らうなどゝは夢にも思はなかつた。が、私が白狀せずに居たら、此後如何して貴方にお眼に懸ることが出來やう？　假令貴方が世界の果に被坐しても同じことである。貴方が何も彼も知つて、私を責めながら生きて居るのだと思ふと堪えられない。私は貴方の宿へ戻つて行つて、貴方にも懸掛けよと言つたでせう、私はあの時何を考へて居たか。あゝ神樣、神樣は私の心から惡魔を拂うて下さいました。併しあの時貴方は眞個危なう御座いましたよ。」

一週間後彼は死んだ。町中が彼を墓場へ送つて行つた。が、後にはあの言葉を信ずる者が出て來た。私の處へもいろんなことを言つて聞きに來た。人間は正しい人の沒落と不名譽を喜ぶものだがらである。が、私は固く舌を結んだ。間もなく其町を去つ

て、數箇月後には神様のお惠みで、私を導いて下さる眼に見えぬ指を讃えながら、僧院の生活に這入ることが出來た。併し私は今でもあの罪の深い、神様の僕ミハエルの爲に祈ることを忘れない。

アリヨウシヤの記錄には、未だいろ〳〵な教訓が載つて居たが、それは略して置く。

長老ゾシマの死は思ひもかけず早かつた。五分間前には、誰も未だこんな事はないと安心して居た。が、彼は急に胸の痛みを感ずるらしく、顏色が蒼ざめた。そして、兩手を伸ばしながら、地面を接吻するやうに俯向いた。人々が駈けつけた時は最う冷たく成つて居たので有る。

二

長老ゾシマの亡骸は、儀式に從つて葬式の準備をされた。長老の死が傳はると、僧俗の區別なく、夜明前から僧庵に集つて來た。中には待構えて居たやうに病氣の子供

を連れて來る者も有る。つまり長老の死に際して奇蹟が行はれるだらうと豫期して居るのだ。これを見ても、長老が生前から一般に聖者と仰がれて居たことが解る。

アリヨウシヤは片隅の方に壁に向つたまゝ、しく〳〵泣いて居た。或老僧がそれを見て慰めて呉れた。

「最う好いから泣くでない。泣くどころか喜んでも好い位だ。今日は如何云ふ日だと思ふのか。長老は今何處に被坐しやるかを考へて見るが可い。」

が、アリヨウシヤは脊を向けたまゝ、返辭もせずに泣いて居た。老僧もアリヨウシヤを可愛ゆいものと思ひながら、其儘立去つた。

此處に思ひがけない事變が起つた。と云ふのは、長老が亡くなつたら何か不思議な、尊とい奇蹟が行はれるものと一般に信じられて居た。が、夜が明けても一向そんな徵候が見えない。却て時の移るにつれて長老の死體から惡臭が洩れ始めた。それが午後に成つて、愈々堪え難く成つた。長老の死體が腐敗する、今に奇蹟でも行はれるだらうと豫期して居た長老の死體が腐敗するといふことは、一般の僧俗に取つて驚異で有

る。或者はそれ見たことかと喜んだ。或者は只驚きの眼を睜つた。騒ぎはたん〳〵大きく成つた。かね〴〵亡き長老に不快の念を抱いて居た僧侶どもは、時こそ來れとばかり盛んに悪罵を放つた。群集の喧聒はだん〳〵烈しく成つて、夜に入つても止まなかつた。

黄昏時、アリヨウシヤはこつそり僧院を脱出さうとした。前に自分を慰めて呉れた老僧に見咎められたが、顔を背向けたまゝ走り出した。勿論彼は無智な群集のやうに、即座に奇蹟を見やうなぞとは思つて居ない。が、あれだけ徳の高い優れた人が死後それに相應した光榮を荷はないで、却て無知の群集から凌辱され、踏み躙られる云ふことは、彼には何うしても信じられなかつた。何の爲だ！　誰がこんな裁きを下したのか。彼の無垢な經驗の淺い心には、何うしても斯う云ふ疑問が去らなかつた。彼の求めたものは奇蹟ではない、正義で有る。正義の力が見たかつたので有る。

アリヨウシヤはとぼ〳〵と俯向き勝ちに門の方へ出て行つた。心の中には、昨日イヴンと話した問題が何遍となく戻つて來た。勿論彼の信仰が搖いだのではない。只イ

ヴンとの會話に依つて殘された印象が漠然戻つて來たので有る。

「何處へ行くのだ」と、神學生のラキチンが不意に彼を呼び止めた。「僕は二時間も前から君を探して居たよ。」

アリヨウシヤは、只顔を擧げた。其眼には苦惱の色が見えた。

「眞個君の顔色は變つて居るよ。例の有名な、人の心を和げるやうな面影は更にないね。」

「何卒打捨つて置いて呉れ給へ」と、アリヨウシヤは顔を背向けながら言つた。

「君は何かい、長老の死骸が腐りかけたと言つて、そんなに騒いで居るのかい。まさか奇蹟が有るなぞと本當に考へて居た譯ぢやなかからうね。」

「僕は神に反く譯ぢやない、只神の手に造られた此世界が堪えられないんだよ」と、突然アリヨウシヤは冷かに笑ひながら言つた。

ラキチンは相手の顔を見い〳〵、空腹を感じたから臘（ちやうづめ）腸でも喰はうと言出した。

アリヨウシヤは直に應じた。又、三鞭酒を飲みに行かうと誘つた。直に又それに應じ

た。毎もの癖度とは違ふので、ラキチンも眼を睜つた。

町へ差かゝつた時、ラキチンは急に思ひ付いたやうに、「ねえ、アリヨウシヤ君」と、低聲で言出した。「それから何處へ行かうかね。」

「何處でも……君の好きな處へ行くよ。」

「如何だ、グルシエンカの許へ行つて見やうぢやないか、えゝ、君行くかい」と、ラキチンは懸念さうに聲を顫はせながら言つた。

「あゝグルシエンカの許か、行きませうよ」と、アリヨウシヤは穩かに答へた。

「何、行つて呉れるか」と、ラキチンは吃驚したやうに言つた。そして、途々も相手に遁げられでもするやうに心配しながら、手を攫んで連れて行つた。

グルシエンカは此町の一番繁昌な通りに棲んで居た。此女の出所は能く解らない。四年前にクヅマ・サムソノフと云ふ金持の爺さんが何處からか連れて來た。其時分は痩せた、臆病な、悲しげな、夢見るやうな十八歳の處女で有つた。何でも十七の年に或士官に騙されて、間もなく捨てられた。士官は遠方へ行つて他の女を娶つた。グル

シエンカ一人金子もなく、人々の笑はれものに成つて居たのを、例のお爺さんに救はれたと云ふのだ。生れはさのみ惡くはない。或牧師の娘だと云ふことで有る。

四年前の蒼白い痩せた娘は、今や壯健な、大膽な、尊大な、薔薇のやうな女に成つた。殊に事務の才が有つて、大分金子を貯めて居ると云ふことで有る。此二年間に大分此女を挑んだ男も有つたが、皆見事に跳ねつけられた。金子を貯めるのは一種の投機で、殆ど見込みのない古證文を安く買つては、それを生かして十倍にもするので有る。そんな關係からカラマゾフの父爺とも懇意に成つた。フヨドールは最初利慾の念から此女に近附いたが、後には情慾に變つて、何うしても此女を手に入れなければ置かぬと誓つた。其處へ又ドミトリが競爭者として現れた。グルシエンカの保護者たる金持の爺さんは、二人の間で撰ぶなら寧そ親父の方にしろ、息子の方の方ぢや仕樣がないよと好く注意した。町でも此噂は有名に成つたが、グルミエンカの心の底は何人も知らなかつた。

アリヨウシヤとラキチンとが、此女の部屋へ這入つて來た時は、日もとつぷり暮れ

て居た。が、燈火は未だ點いて居ない。グルシエンカは長椅子の上に腕を枕にかつたまゝ、仰向けに寢そべつて居た。誰かを待つて居るのか、着物も他所行のに着更えて居る。何か苛々しながら蒼い顏をして、眼も血走り、絶えず足で長椅子を蹴つて居た。足音を聞くと、むつくり起上りながら、「誰だ」と聞き咎めた。

「あの方では有りません、他のお客樣ですよ」と、女中が言つた。

「如何したんです、アリョウシヤ君を連れて來たから、早く起きるが可い。それよりも燈火を點けて貰ひたいね」と、ラキチンは親しげに言つた。

「まアあの方ですか」と、グルシエンカは鏡の前に立つて、解けた髪を手早く結ひ直しながら、「併し飛んだ時に連れて來て下すつたわね」と、不興げに呟いた。

「何だ、氣に入らないのか」と、ラキチンは直に腹を立てた。

「何ですよ、吃驚するぢや有りませんか」と、窘めながら更にアリョウシヤに向つて、「御免なさい、貴方のことを怒つてるのぢや有りませんからね。私は又ミチヤが飛び込んで來たかと思つたのですよ。私は今ミチヤを騙して、今夜はクヅマの家で金子の

勘定をするからと言つて、お爺さんの家迄あの人に送らせたんですがね。あの人の姿が見えなくなると、直に飛んで歸つたんですよ。私は好い報知を待つて居るんですがね、何うもミチヤが怖くて仕樣がない。フェニヤ(女中の名)や、好く窓の戸を閉めて置いてお呉れよ。」

「何うしてそんなにミチヤを怖がるのです」と、ラキチンが訊いた。「あんな男位貴方の指二本で如何でも成るぢやないか。」

「だから私は好い報知を待つてると言つたぢや有りませんか。それにはミチヤが邪魔なんですよ。あの人は今頃阿父さんの家の裏で私を張番してるんでせうがね、此處へ遣つて來られたら困るんですよ。」

「が、何うして着物を更えて居るんです?」

「好く聞きたがるのね。私は使を待つてると言つたぢやないか。其使が來さへすりや、私は直に馬車に乘つて立つのですよ、そして、二度とは貴方方の御眼にも懸りますまいよ。」

「一體何處へ行くのです？」

「そんなに聞きたがると老人に成りますよ。」

彼女はラキチンを捨てゝアリョウシャに向つた。「私何うも今日は少し都合が惡いのだけれど、貴方の來て下すつたのは本當に嬉しい。まア此處に坐つて下さい、此の長椅子に。ラキチンが昨日か一昨日連れて來て呉れたら――いや、今日が好いんですね、こんな時にお眼に懸る方が却て好いんですね。」

彼女は嬉し相にして、アリョウシャと並んで坐つた。何うもそれが嘘らしくない、心から嬉し相で有る。罪のない笑ひ聲で有る。アリョウシャは眞個豫期が外れたやうな氣がした。以前から惡い女だと思つて居る處へ、昨日カテリイナに對する仕業を見て、殆んど最う耐らないやうな氣がして居た。で、今こんな親切な罪のない顏を見るのは眞個思ひがけない。彼は注意して女を見遣つた。凡てが單純で、人が善さ相で、他人を信じて疑はないやうな素振で有る。只少し興奮して居るらしい。

「何うしてそんなに茫然して被坐しやるの、アリョウシャさん、私が怖いのですか」

と、女は戯談のやうに男の眼を見遣つた。

「此男は欝いで居るんだよ、長老が笑ふ(腐る)からね」と、ラキチンは口を出した。

「何を言つてるんですよ、貴方は默つて被坐しやい。アリョウシャさん、私斯うして貴方の膝の上に坐つても可いのですか」と、グルシエンカは男の膝の上に飛び上つた。

「可哀想に、私は貴方を慰めて上げるのですよ。」

アリョウシャは默つて居た。が、此女に誘惑されるやうな心持は些とも起らなかつた。心の中の大きな悲しみが、それを防いで呉れたのである。それよりも、今迄非常に怖れて居た女が――そして、今自分の膝の上に坐つて居る女が、一種の純粹な、張り詰めた興味しか彼に起させない。それが自分にも不思議に思はれた。

「到頭此男を捕虜にしましたね」と、ラキチンが叫んだ。「さア、約束だから三鞭を拔くが可い。」

「えゝ、拔きますとも。アリョウシャさん、私は此人に貴方を連れて來て呉れたら三鞭奢ると約束したんですよ。フェナニヤや、あのミチヤが置いて行つた瓶を持つて

來てお呉れ。あゝ、私も氣がくさ〳〵するから飲みますよ。」

「一體如何したんです。使と云ふのは何ですか」と、ラキチンが訊いた。「それとも秘密で言へませんかい。」

「些とも秘密ぢや有りませんよ」と、グルシエンカは相手を見返しながら言つた。

「私の士官が來るのですよ、あの士官が來るのですよ。」

「あの男が來ると云ふ話は聞いたが、そんなに近く迄來て居るのですか。」

「モクロウに居るんです、其處から使を寄越すと云ふんですからね。斯うしてる間も私は氣が氣ぢやないんですよ。」

「此奴をミチャが聞いたら耐るまい。あの男は知つてるのか、知らないのですか。」

「知りませんとも。知つちやア大變ぢや有りませんか。なに、私はあの人に殺されることなんざア怖く有りませんがね、只あの人の心の中を思ふと……でも私はあの人のことなぞ考へたくない。アリヨウシヤのことを、此處に居るアリヨウシヤのことばかり考へて居たいのですよ。ねえアリヨウシヤ、昨日貴方は私を餘程酷い女と思ひな

すつたでせうね。私は眞個病犬のやうな女ですよ。が、あれが可い、矢張あゝ成つた方が可い。」斯う言つて笑つたグルシエンカの唇には、殘酷な筋が表れた。

「あの方は私を袋叩きにすると言つて被坐しやる相ですね。眞個私はあの方に濟まないことをしました。でも、あの方は私を呼びに來て、チヨコレートで私を胡魔化さうとしたんですよ。矢張あれはあゝ成つた方が可い。併し私は只貴方が怒つて被坐しやるだらうと思つて、それが心配なんですよ。昨日彼處から歸る途々も、貴方の眼に私が何んな可厭な女に見えたらうと、そればかり思ひ續けて來ました。」

其處へ女中が盆に栓を拔いた瓶を載せて持つて來た。ラキチンは一息に盃を飲み干したが、又自分で一杯注いだ。アリヨウシヤも盃を口まで持つて行つたが、直に又下に置いて、「いや、矢張飲まない方が可い」と、優しく笑つた。

「貴方が上らなけりや私も止めませう」と、グルシエンカが口を合せた。

「何だ、大層感傷的な臺詞だね」と、ラキチンは嘲るやうに言つた。「此男は神に反かうとして居るんだから、臘腸でも喰ふんだよ。」

「何うして左様なの？」

「今日長老ゾシマが亡くなつたんだよ、あの聖者がね。」

「まア長老様が」と、グルシエンカが叫んだ。「如何しませう、私は些とも知らなかつた。」斯う言つて、彼女は胸に十字を畫いた。「まアそんな時に、私は此方の膝の上に坐つたりして」と言ひながら、女はアリヨウシヤの膝から飛び降りて、げつそりして居た。

アリヨウシヤは永い間凝乎と女を見詰めて居た。一種の光が彼の顏に輝いて來た。

「ラキチン」と、彼は不意に確乎した聲で言つた。「私は今日怒りたくないから、最少し君も親切にして下さい。それから、此女のことも最少し好く思つて上げたら可いでせう。私は不好ない女に會ふ積りで此處へ遣つて來た。私が善くない人間だから、人も善くないやうに見えたのです。ところが會つて見ると、私は眞實の姉妹に會つたやうな氣がしました。此女は今私を憐れんで呉れました。グルシエンカ、私は貴方に言つてるんですよ、貴方は私を淵の底から救つて呉れました。」

斯つ言つたアリヨウシヤの唇は顫えて、聲が喉に塞つた。

「此女が君を救ふ？」と、ラキチンは忌々し相に笑つた。「此女は君を爪にかけて墮落させやうとして居たんだよ。」

「お默りなさい」と、グルシエンカは飛び上つた。「二人ともお默りなさい。えゝ、私が言ひますよ。アリヨウシヤさん、貴方のやうに仰有つて下さると私は恥しい、私は眞個善くない女で御座いますからね。成程私は貴方を墮落させたいといふやうな考へも持つて居た。が、今は違ふ、今そんなことといふのは嘘です」と、グルシエンカは極度に興奮して、息を喘ませながら言つた。

「二人とも全然氣違ひだね」と、ラキチンは吃驚して飜を眺めながら言つた。「二人とも今に泣き出し相だ。」

「えゝ泣き出しますとも、私は泣きますよ」と、グルシエンカは繰返した。「此人は私を姉妹だと言つて呉れました、私は決してそれを忘れない。ねえラキチン、私も惡い女だげれどね、葱を捨てたことは有りますよ。」

「何だ、葱？　こりや何うしても狂人だ。」

二人は今や一生の間にも滅多に會はれないやうな、精神上の最頂點を經驗しつゝあるので有る。

「ねえアリヨウシヤ」と、グルシエンカは嗄れたやうな笑ひ方をしながら、彼の方へ向いた。「私が今葱を捨てたと言つたのは、餘り自慢ですがね、これは只話ですよ。私は幼い時乳母やから好くこんな話を聞かされました。昔一人の百姓の女が有つた。其女は大變不好ない女で、一生善い事は一つもせずに死んだから、地獄へ墮ちて、火の池へ投げ込まれた。ところが其女の守り神なる天使樣は如何かして其女を救つて遣らうと思つて、何か善い事をしたことはないかと探した末、神樣に向つて、此女は或時畑の葱を一本拔いて乞食の婆に遣つたと申上げた。神樣はそれを聞いて、『ぢやお前が其葱を持つて火の池の緣に立つて、其女に縋らせるが可い。首尾よく女を池から引上げることが出來たら、天國へ生れさせう。葱が切れたらそれ迄だ』と宣まうた。天使は火の池へ走り着いて、葱を差出しながら、『さア此葱におつかまり、私が引上げて上

げるから』と言つた。除々と氣を附けて引上げた。最う一息で引上げて仕舞はうとした時、他の亡者が遣つて來て、其葱にぶら下りながら一緒に引上げられやうとした。其女は惡い女だから、『私の葱だ、お前のぢやないよ』と、彼等を蹴り始めた。が、斯う言ふや否や葱は千切れた。女は再び池へ墮ちて、今日迄も其中に苦しんで居る。天使も泣きながら其場を去つて仕舞つた。ねえアリヨウシヤ、私は其話を諳で記憶えて居る。私も惡い女ですからね。私は最う何もかも言つて仕舞ひます、お聞きなさい、アリヨウシヤ。私は貴方を手に入れやうと思つて、貴方を連れて來て呉れたら二十五留布の金子を上げやうと、ラキチンに約束した位ですよ。ねえラキチン、お待ち！」

斯う言つて、彼女は机の抽斗出から二十五留布の紙幣を取り出した。

「何を馬鹿な、馬鹿な」と、ラキチンは胡魔化した。

「さアこれを受取りなさい、遠慮することは有りませんよ。貴方が自分で呉れと言つたんぢやないの」と、彼女は其の紙幣を男に投げ付けた。ラキチンは途方に暮れながら、それでも其の金子を懷へ入れた。